



\* 0 0 5 4 7 3 9 0 0 0 \*

2

0054739-000

560-20

民俗怪異篇

磯清・著

磯部甲陽堂

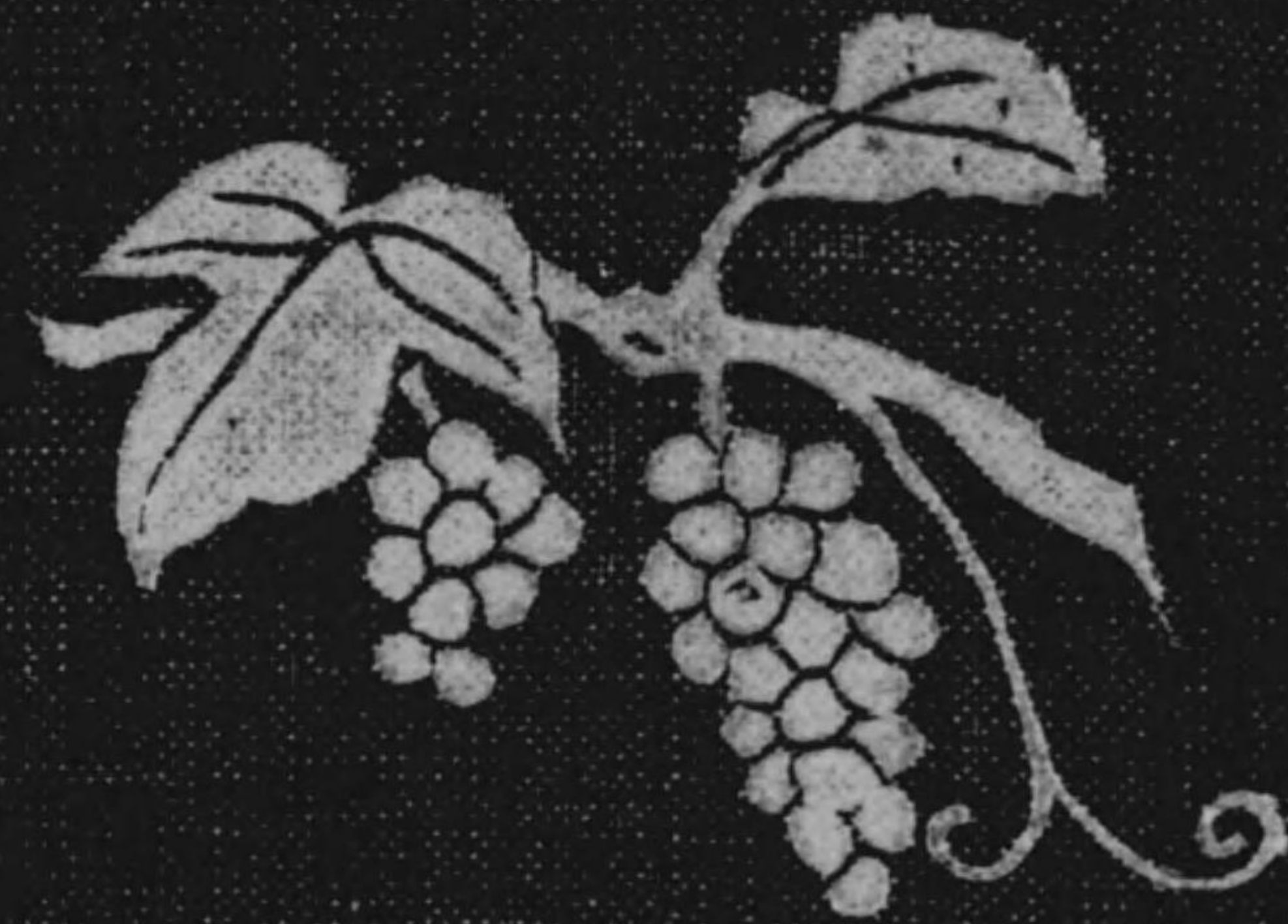
昭和2

AID

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法  
第67条の規定に基づき、平成12年3月23日  
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので



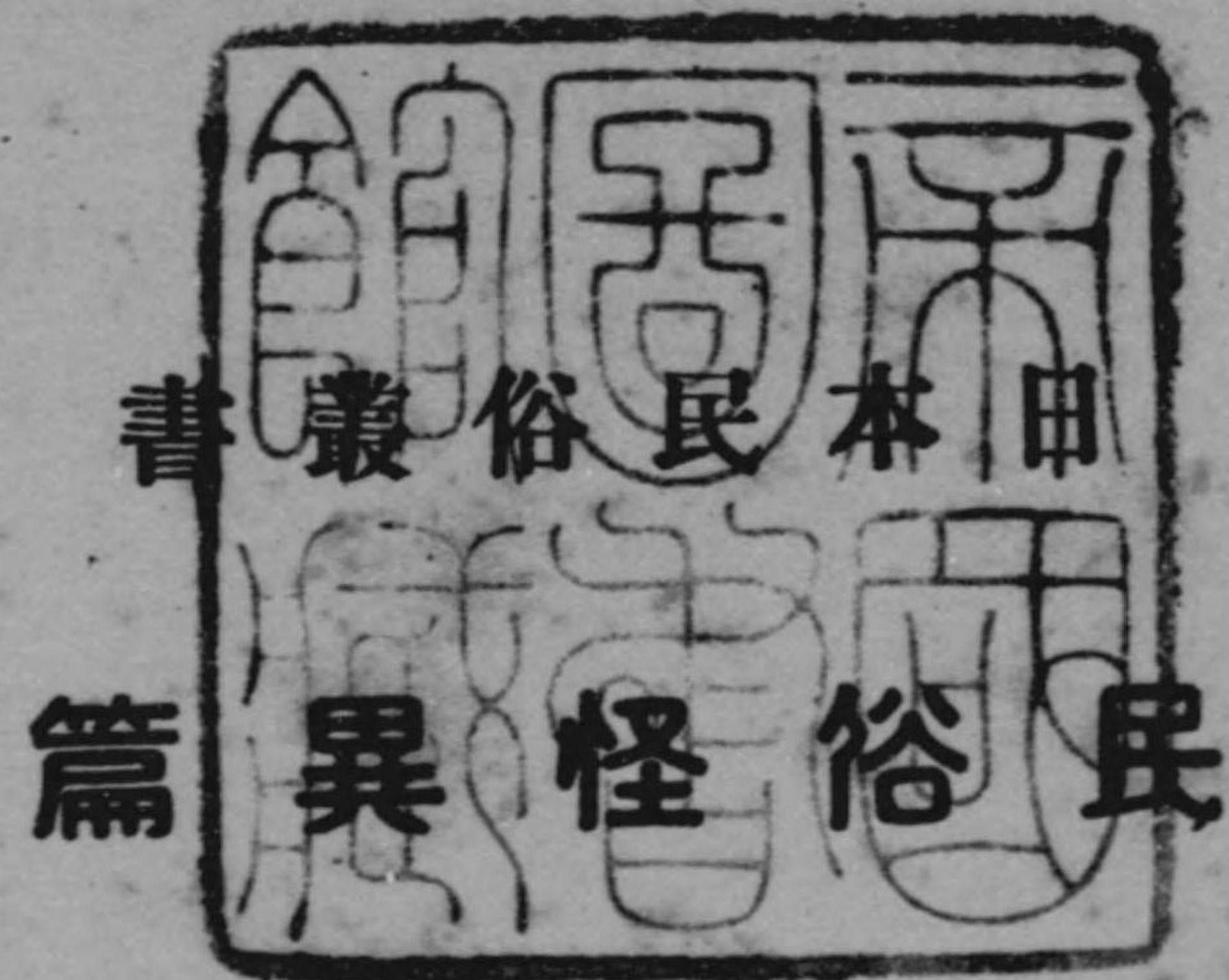
560  
20











著 清 磯

2





## 序

私は怪異の存在を確信するの一人であります。これを破壊し、これを解剖するの徒輩を、心から憎みます。賤しみます。そーつと、その儘に、色をつけず、刀を加へず、素地の儘に藏つて置きたいのが、年來の心願なのです。

と心掛けては居ながらも、私のもつてゐる筆は、ややともすれば艶をつけて了ひます。書いて終つて、これとは思はないではありませんが、何度書き直しても大した變りようはありません。他には然うせよと勧めながら、さて自身はそれを實行し得ませんのは、亦もつてお恥かしい次第であります。然しこれも、年を老つたなら、それが自然と寂になつて行く事を思つて居ります。この意味で私は、筆にだけは齡を老りたいと念じて居るのであります。

瘠せ枯れた、世間からは莫迦にされて、殆んど存在を認められない私の耕してゐる畑にも貧しいながら自ら蒔いた種、氣紛れな風が吹きよこした種、それ等は人に知られずに自分自分の花をつけてゐます。通りがかりの旅人は、一瞥をもなけては呉れません。春よ、秋よ、



徒らに咲く廢園の花よ。

茲に殊勝なる旅人あり。その一鉢をとつて試みに卓上に置く。野花漸く人目に映ぜんとなす。旅人、その名を本山桂川と云ふ。

私は書きたい。唯々非常に書きたい。江戸の妖怪誌を書きたい。怪談の人國記を書きたい。更に世界の國々の妖異を書いて行きたい。唯々書きたい。睡る時間を少くしても書きたい。

唯、私にはその紙がない。

柿の芽、日ましに青し。今日は支那貴族の爪ほどの大きさとなる。

目黒 一忘莊

磯 清

# 民俗怪異篇

## 目次

馬の災と馬の怪	一
馬をとり殺す女	一
馬魔の禁厭	五
馬神社	九
魔女の素性	二一
首切れ馬	二五
濁ヶ淵の主	二八
左片袖の姫	三四
亡き馬の嘶聲	三六
馬の人語	四〇



再び馬の人語……………三三

馬と戀の執着……………三三

白馬の噂……………三六

徳川家の禁物……………四二

城の主……………四四

刑部姫……………四四

八幡太郎の戀……………五〇

竹の間の柱……………五一

掃部助の魂……………六一

白馬の將……………六三

龜姫……………六五

天井を行く女……………六七

乞援兵……………七〇

首なし行列……………八〇

猫……………八八

二百八十餘年前の怪猫……………八八

猫魔問答……………九七

猫魔ヶ嶽……………一〇四

猫の踊り……………一〇九

猫の人語……………一一三

金花猫……………一二四

名刀……………一二七

断弦の怪……………一三八

猫の行……………一三三

淺間ヶ嶽の猫……………一三三

歸らぬ猫……………一三五



目 灯 の 占

寅 待

一 次

その一話 墨の前の女……………二二

その二話 薦を着た女……………二六

その三話 消された灯……………二九

夫さがし……………三二

油花のト……………三四

紅水を焼く……………三六

狼 の 噂……………三九

狼を神の國……………四一

三峰の話……………四五

失くならぬ落し物……………四五

群狼のさまよふ夜……………五二

一 次

目

神の命綱、三分の金……………六一

夜半の神使ひ……………六五

咬殺された男……………六九

死屍何處へ行く……………七三

鏡が鳴る……………七四

狼につけられた時……………八〇

傳説と小説……………八〇

人に化けた狼……………八〇

狼に化ける術……………八四

母か狼か……………八五

戀人を殺した男……………九〇

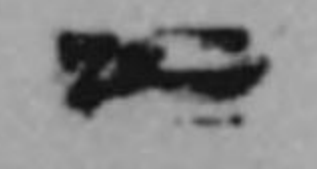
落語に存在する怪談……………九三

田 能 久……………九四



七度狐	二七
狸の釜	二七
もう半分	二八
いが栗	二〇〇
薬人形	二〇三
たちきり	二〇五
反魂香	二〇八
三年目	二一九
おすわどん	二二一
貸家さがし	二二三
不動坊火焰	二二四
脛かぢり	二二五
野晒	二二六

籠の幽霊	二二七
------	-----





民俗怪異篇

磯

清著





馬の災と馬の怪

馬をとり殺す女

馬の怪を説く前に、私は先づ、それよりも、馬が或物の爲めに惱まれる、その或物なるも

のを説いて見たい。

また提馬風とも書く。尾張美濃あたりではギバと謂ふ。斃れるのをか

けられたと呼んでゐる。

土俗ギバと謂ふ一種の魔物があつて、馬の鼻から入つて尻に脱け出れば、馬は即座に斃る

と謂はれてゐる。その時の有様について説が二様ある。忽然と旋風が吹き起つて一團の砂烟



が馬前に襲ひかかる、馬の行手を立閉いで車輪のやうに轉りまわる、見る見る馬の首にのると見ると、馬の鬣が一筋一筋に立つて、その鬣の中に細い糸のやうな紅い光がさし込むと、馬は悲鳴をあげて棹立ちに立つて苦惱の中に息が絶える。馬がおちると風は烟のやうに消えて跡もない。もし馬子なり馬上の客なりが心得のある者であるならば、直ぐと刀を抜いて馬の行く手を切り拂ふ、さうすれば風は馬の頭まで襲ひかかる事なしにそれで行く、と謂ふのと、また一説は、不意に中空から、玉虫色の小さな馬に乗つて、狸々絆のやうなものを着物を着て、金の瓔珞を戴いた、姫神のやうな女が紙薦のきれて落ちるやうにひらくと落ちて來ると、馬は忽ち喉綱をきつて首をあげて、唯事ならぬ聲をあげて嘶き狂ふ、妖女はその馬の前脚をあげて被害の馬の口に當てて、後脚を耳から鬣にかけて踏みつける、つまり馬面にひしと組みつくのである。その途端にその魔女は、つこりと笑ふ、と齊しく、玉虫色の馬も狸々絆の妖女も消失せて、かけられた馬は右の方に三度きり／＼廻つたと思ふと、斃れて了ふ。

これは前述の風が襲ひかかるのを、更らに空想的に具體的に立入つた見方である。然しこの魔女が絆の衣を着てゐると謂ふのと、風の裡に細く糸のやうな赤い光があつて、それが鬣

にかかると斃れると謂ふのが、その赤い光りと謂ふのが妖姫の衣のやうで、似通つてゐるのが面白いと思ふ。

その魔にかかつて斃れた馬は、尻の穴が内から外の方へ、太い棒で突出したやうになつて開き脱してゐると謂ふ。これも其ギバが、鼻から入つて尻にぬけると謂ふのと、思ひ合されて首肯れる一である。

類馬にかけられる馬は、國々によつて毛色が異つてゐる。美濃では白馬に限られてゐると謂ひ傳へる。栗毛や鹿毛は無難である。それが遠州に入ると全く反對で、白毛はかけられない代りに、栗毛と鹿毛が呪はれてゐる。

此の魔女が馬を襲ふのは時がある、年中時を嫌はずではない。濃州では、四月から七月までで、別して五六月が多いと謂ふ。七月になりかかると、秋風が立初める、とギバの難は影を隠して了ふ。武州常州あたりでも、やはり四月から七月と謂つてゐる。一天晴れ渡つた日にはギバは出て來ない。晴れては曇り曇つては晴れる、村雲などが出たり入たりする日に限つてギバが出る。野州や總州では馬は決して南向きには繫がない。南向きに繫げばその難が



あると謂つて、心ある馬子は堅く戒めてゐる。

ギバは四五歳から七八歳ぐらゐるのをかける、別けて四五歳の良い馬を目がけてかける。老馬と女馬は決してかけない。これから見ても、ギバは良い馬を呪ふとしか思はれない。

かけられるのにまた時刻がある。朝五ツ時前(午前八時)、夕七ツ時過(午後四時)、にはかけられない、多くは日盛りであると謂ふ。

耕作中のや厩に繋いであるのには眼もくれない。即ち途上に限られてゐる。多くは松原や堤の上などを行く時にやられる。それが遠州へ行くと、かけられる場所が決つてゐる。濱松から上り、八町繩手と謂ふ松原を過ぎて、念佛堂と謂ふ立場のとり付の一里塚、ここでは年に三四度はかけられる。下りの方では天神町の立場の一里塚、ここでも年に五六度は必然かけられる。また濱松から氣賀街道を半里ほどの、なぐり町を通つて山の麓の小松原でも襲れる。遠州でやられるのは此三ヶ所に限られてゐる。田畑や厩にはかからない。遠州に限つてギバの立場のあるのが、規則正しい危険である。

## 馬魔の禁厭

馬にとり、馬によつて生活して行く馬子にとつては、ギバほど怖いものはまたとない。怖しさはやがて夫に對しての禁厭を生んだ。

驚破馬魔がかかつたと見ると、馬子は直ぐと左の手に馬の口をとつて、絆纏なり繻絆なり右の袖ばかりを脱いで、左の袖は口綱へ通した儘、彼の魔女と諸共に馬の首におつ冠せて馬が懸命で右に廻らうとするのを、力量まかせに強引で左へ曳き廻す、その手で直ぐと百會(尾の上の脊骨)に針を打ち込む。此の手配が滞りなく運べば、ギバは馬の首にかかつて馬は助かる。この針を留針と謂つて、ギバ除けの武器として針一本は必ず髻節にさして置いたと傳へる。馬魔は馬の鼻の穴から入つたが、左へ廻されたので、勝手が違つて尻へ出られない、出られないから今度はギバの方で面喰らつて、早々舊の鼻から出て行く、馬は尻へ通り抜けをされないので生命が助かる。



美濃、尾張、遠江の馬子はその難を防ぐ爲めに馬子袴纏と謂ふのを着る。馬子袴纏とは、羽織でも袴纏でも、或ひは襦袢でも風呂敷でも蒲團、蓆、筵、何でも衣服なり裸の上へなり帯なしで羽織つておく。これが唯一のギバ防ぎである。針よりも大切な禁厭の品である。これを前述にあつたやうに、ギバがかかつたなと氣がついたら、左の袖は馬の口をとつた儘にして置いて、右だけ脱いでギバもろ共に馬の首へおつ冠せて了ふ、それに用ゆるのである。さう謂はればよく芝居や繪などに、馬子が禪一つの裸に蒲團なんかかけて馬を曳いて出て來るのがある。手近い例なら彼の大和橋の馬斬りで、長七郎に斬られる馬子は、誰が演つても赤銅色の裸一貫を蒲團にくるまつて出て來る。あれも無意味なものではなかつたのだなと氣がつく。

芝居でまた氣がついたが、あの芝居のたてに、もんどりでギバに落ると謂ふのがある。私は生憎とそれを文字で見ただけで、芝居ではそれと説明されて見た事がない（勿論今迄に何度も見せられては居たのだらうが）。この言葉の起因などは、馬がギバにかけられて斃れるその有様からとつたのではあるまいか、私は然うであらうと思ふ。その斬られた役者がギバ

に落ち、その姿がギバに殺られた馬のちるやうに、それから來てゐるのだなと思はれてならない。

話はまた舊に戻る。ギバ防ぎも關東へ來ると、箱根ひとつ越へたばかりで俄かに荒つほくなる。蒲團を冠せるなどと謂ふ音無しい方法ではなくつて、野州などでは必ず耳をきる。耳は馬の急所ですつて痛がる。それで馬か氣をとり直すからギバに奪られないと謂つてゐる。馬でなくつても耳をきられては耐らない。總州になると馬の平首を切つて助ける。どつちにしても關東は荒つほい。刃物のない時は馬子が耳を噛みきる。要するに馬の首から血を流さなければ助からないのだ。

馬の耳をきると謂へば、いまのやうな禁厭でなく、實際上の目的から馬の耳を切つた實例がある。徳川八代將軍家の時代に、伊豆の大島へ馬や羊を放し飼にしたが、私有と官有との區別をつける爲に、お上の馬や羊は耳がきつてあつた。馬や羊こそ迷惑千萬。馬などに至つては、あの竹を削いだやうな耳こそ、唯一の容貌自慢にもなり、また誇でもあるのに、それ



を何の遠慮もなしにちよん切られては、ただでさへ彼の通り、恐らく獸類中隨一の長い顔がとめどもなく長くなる、甚だしく馬の躰面を無視した區別法ではないか。

馬魔に對しての禁厭が關の東西で異つてゐるのを馬子の服裝で證據立てゐるから面白い。尾張からかけて美濃、伊勢、伊賀となるとどの馬子も皆馬子袴纏をかけてゐないのはない。それが箱根を此方へ來ると、まるで馬子袴纏の姿は見られない。

以上は馬子が馬に施すべきギバ除けの禁厭であるが、馬にも不斷お守りはつけてある。よく昔の繪などで見た覚えがある。また今でも時によると田舎などで見かける事がある。馬の腹當、アブヨケとも謂ふ。あれに白く、大津東町上下仕合と染めぬいてある（單に大津東町とばかりのもある）、あれさへ掛けて置けばギバが見脱してくれる。また不思議と此アブヨケをした馬がギバにかけられて斃ちたのを見た事がない、と謂はれてゐる。

一體この、大津東町上下仕合とは何から出た禁厭であらうか。これさへ掛けて置けば何故さしもの魔女も手出しをしないのか。

## 馬 神 社

江州大津上京町に（また東町とも謂ふ）大津馬神社がある。御維新前は御本尊は馬頭觀世音であつたとか、今の御神體は知る由もない。ここから馬の水引に大津東町と染めたのを出す。これを馬につけて置くと、諸々の災難をのがれて從順になると説ひ傳へる。

時代は知らぬ。大津の八丁に馬子がゐた。親が永々の難病を、貧苦の中から手の盡せるだけをして介抱してゐた。その中にまた自分も大病の人となつた。働人の馬子が病んでは一家の水の手は断へた。馬は他に貸して、その妹が馬のノシ（腹當）を拵へて生活の料とした。その娘の拵へる腹當には、黒に赤く大津東町と染め抜いてあつた。兄妹の孝行が何よりも世間の同情を買つた。腹當は奪ひ合ふやうに賣れた。やがて街道の馬どもは、どの馬もその腹當をしてゐなければ、馬らしい面はして歩けないやうになつた。また不思議な事には、その腹當をしてゐる馬は、いろ／＼と災難を脱れた。人々はその娘を疎略に扱はなかつた。その



娘を祭つたのが大津馬神社である、と謂ふのは實に執るに足らぬ俗説で、馬神社の由來は他にある。この話はギバ除けの腹當の起因と見るのが至當なのであつて、唯これが如何して馬神社で下け渡すやうになつたかは不明である。然しそれは大して問題ではない。馬神社も娘の腹當も、どちらも馬の安全地帯である以上、双方から歩みよつたのであらう。その方が世智辛くなつた世の中に對して、神社としては有難味がまし、腹當の賣行きの上からは確實なる地盤に立つからである。

馬神社とは何を祭つたのであらう。これも或頃、親一人子一人の馬子があつた。その馬子がまた型の如く孝行者で、大津町々のほめ若であつたのに、何の因果か盲目となつた。盲目では馬子は動らないけれど馬子をして以上今日を過して行かれない。そこでその馬が發奮して、人に荷をつけて貰つては、おほえた街道を京へ行き、京の間屋場からまた荷をつけて貰つて、大津へ歸る。その駄賃で主人の代りに親孝行をしました主人孝行をした。この主人孝行の馬を祭つたのが馬神社である、と謂ふのが大津に傳はる口碑である。成程この位の心掛の馬なら神に祭つて差つかへない。然しこれでは、馬神社の由來と、ギバ除けの腹當の起り

しか判らない。なぜその腹當にさうした功德があるか、一面にはまた斯うした話がある。

### 魔女の素性

時代はわからない。江州の大津東町に穢多の娘があつた。兄は馬の皮を剥ぐのを渡世としてゐるが、不景氣と謂ふやつは餘程昔からのさ張つてゐたものと見えて、閑で生活に困る。斃馬が少いからである。娘は父の貧苦を見かねて水に死んで、ギバとなつた。そして良い馬と見るとかけて斃して下ふ。大津東町とかいてあれば、町内の馬か、それなら可愛さうだからと見のがして助けてくれる。これに據るとギバは不景氣の産物である。先づこれが一つ。常陸の大津東町に類馬除けの馬頭観音がある。ギバはそれを非常に恐れてゐるから、大津東町として置けば、観音さまを恐れてその馬にばかりは災をしない、と謂ふのもある。先づこれで二つ。

更らに一話は、これも常陸の大津東町にカアボがあつた。その娘の某は特種の扱ひをされ



るのを厭つて、何とぞして同種族でない夫をもちたいと心がけて、觀世音に願をかけた。それでも思はしくないので、美貌を餌に女郎となつて夫を物色した。客の中に一人これとは思はせる親切な男があつた。思へば思はれるで、遂々その男に身受された。夫婦となつた。やがて子供が出来た。その子供が成人するに従つて、犬や猫などを殺して皮を剥いだりするのが上手で且好きで、いくら小言を謂つても止めない。女は氣が氣でなくなつた。それとなしに亭主の素性を洗つて見ると、これも自分と同じ種族で、不憫や女房と同じ心願、カアボでない女を女房にもちたいと自分の素性を隠してゐたのが知れた。女はつくづく身の淺猿しさを泣いて、世の中に馬や牛がゐるなかつたら、穢多と謂ふ人交りの出来ない家業も絶えるであらう、私と同じ悲しさに泣く女も無く成るであらうと、自殺して類馬の虫となつたと謂ふのである。で大津東町とかいて置けば、町内の馬だからと助けてくれる。

以上の三話の筋は別々でも、その歸納は一つである。結局大津東町とあれば、町内の馬だからと助けてくれる。腹當にギバを除く力があるのではなく、ギバの方で憐憫の情を起して見脱してくれるのだ。一と二が加はつて三になるのではなくして、一と一が加つて、そこに

初めて三と謂ふ數が生じて來るのである。無色無臭の花が、或る雨によつて色がつけられ匂ひがつく。大津東町と、最初は例の馬子の孝行娘が無意味に染めぬいた文字が、茲に至ると大きな力を顯してくる。それにまたギバが、自分の町内の馬だからと助ける、その愛郷心が面白い。怪物のもつ人間味と謂はうか、怖いばかりが能ぢやない。魔界に墮ちても一筋の人間らしい血のあるのが悦しい。大津東町の文字よ、お前のもつ力量は神佛の加護以上のものがある。

三つの話の中、觀音の外は國こそ近江と常陸の違ひはあれ、親を思ふのと身の淺ましさを呪ふの異ひこそあれ、馬をとり殺さうと謂ふのは一である。どちらにしても類馬の魔女として趣はあるが、親の貧苦を助けたさに馬をとり殺す方が筋が立つてゐる。それに常州のは虫になるので少し困る。尤も美濃などでは、ギバは白蛇のやうな、目にも見えない虫だと謂ふ説もある。また常陸ではその虫を大津虫と呼んでゐる。虫は玉虫色をしてゐて足長蜂に似てゐる。好んで藤豆の葉を食ふので、馬を飼ふ家では決して藤豆は作らない。ギバを招くと謂つて嚴しくさけてゐる。



この玉虫色と謂ふのが捉へどこである。前に述べたやうに、ギバの魔女は玉虫色の小さな馬に乗つて中空から下りて来ると説ひ傳へる。そこに相似通ふ點がある。馬の色や妖姫の衣の色や、まほろしのやうで決して空想ではない。色に先づ共通のあるのが面白い。

色の玉虫色は大に吾意を得たが、虫では少し困る。馬でありたい。然しこんな馬は世の中にあり得る筈がないし、馬の鼻の穴から入つて尻の穴へ抜けるには、虫の方が都合もよいしまた自然でもある。けれど矢張私などは、虫などと手短かに形づけたくない。玉虫色の馬に乗つた姫が、金の瓔珞で猩々緋の振袖でありたい。この魔女説は口碑ばかりでなく、古い物語にも書いてあるのだから、吾々は依然魔女にしておきたい。

天文五年夏五月二十四日、時の將軍足利十二代義晴公は、愛宕山代參として畠山修理太夫義忠を遣はされた。首尾よく代參相濟んで下向の折から、下り松の邊まで来ると、忽然と一人の怪しい女が現はれて、畠山の乗馬の轡を執つて笑ふと齊しく、馬は忽ちに悶絶して斃れた。

斯うした記録から見ても、虫などと見ずに、やはり馬に乗つた魔女と見ておきた

い。  
馬の受ける災はこの位にして置いて、次には馬自身が怪をなす、それに移つて行く事にする。

### 首 切 れ 馬

首のない馬が夜歩く。これは國々にある話で、古戦場や城趾などには付き物の怪である。然しこれはそんな單純のではなく、物語の起因があり、その物語の筋も五六あつて、それがまた一國至る處に殆んど蜘蛛の糸のやうに行き届いてゐるのは、目覺しくも怪しい組織立つた妖異である。即ち話の起りは異つてゐても、首の切られてない馬が夜行く、その馬に逢ふと大病になるか命を落す、と謂ふ説ひ傳へは一である。

これを夜行さんと謂ふ。國は阿波、人あり若し一國を代表すべき唯一の怪異はと問ふならば、私は何を措いても此怪異を眞先に數えあけずには居られない。正にこれこそ阿波一國を



代表すべき怪異であり、且彼の國の誇りである。

「夜行さん」、これに逢ふと命を落すか死にはぐれの大病にかかる。私は先づ怪異その物よりも、夜行く者を戒める口實として絶好の材料であるなど感心する。でなくとも晝間田や畑で精々と働いた若い人達は、老人とは血も脈も動きやうが異ふ。彼等が風呂でも貰ひに行つて蒲團に體を休めやうと爲る時間は、此方では更に彌々新規時直しの氣分で押歩かうとする活動時刻である。それを恐怖さして自發的に爐邊に居すくませる、實に夜行さんは持て来いお誂え向きの口實である。稚い者が灯ともし頃まだ歸るのを忘れて外で遊びほうけてゐるのを人さらひの婆さんがくるよと脅して家の中へと逃げ込ませる、人間の意久地なさは何時になつても去り得るものではない。この恐怖があつてこそ人間の面白さである。實に「夜行さん」は阿波一國を風靡して、夜の幕が下されるとその名を呼んだばかりで人間と名のつく物は怖れ戦く。

然し夜行さんも、年が年中夜になると出歩く不良青年のやうな者ではない。ほほ出さうな夜と、必ず出る夜がきまつてゐる。雨のしよほ／＼降る夜はよくその鈴の音をきくと謂ふ。

たとへその姿を見なくとも、その鈴の音をきいただけで人の顔の色は土氣色になる。想像して御覽なさい。軒をうつ雨の音にかすれて鈍い鈴の聲、聴くまいとしても、耳の底にこびりついて離れない鈴の聲、爐のぐるりの人達の顔の色を御覽なさい。

けれど雨の夜に出るのは餘りに月並である。そこで必然出る夜のあるのが夜行さん特有の權威である。夜行日と謂ふ。昔の曆日を繰ると、やぎ、よう日とかいたのにぶつかる。これが夜行さんの正確に出て歩かねばならぬ定めの日であつたが、世の中の人間が家にゐるのが嫌ひになつて、夜も出歩かなければ氣が濟まないやうに成つてからは、夜行さんも夜行日まで待つては居られなくなつた。そこでいろ／＼と思案なされた果が、晦日、節分、庚申、甲子二十三夜待、この夜にもお出ましになる事になつた。此分で行くと、この位ではまだ足りなく成るのは知れきつてゐる。もう十年もしたら、毎晩脅して歩かなければ感じなくなるに相異なる。

茲にまた趣のあるのは、その夜行さんは歩きたい放題に歩くのではなく、出顯の場所と通る途筋がきまつてゐる。一廻りまわるとまた己の住家へと戻つて来る。従つてづう／＼しい



奴になると、その途筋をさけて通れば、それこそ懐ろ手の鼻唄でそそつて歩けやうと謂ふもの、けれどそこは田舎の人の有難いところで、夜行さんのお出ましになる夜には申合して謹慎してゐる。

然し夜行さんの全部が通る道筋がきまつてゐるのではない。處により、その夜行さんのたちにより、行きも歸りもなしに脚の向き放題に歩き廻るのがある。斯うしたのをもち合した村々はよくくゝの不仕合で、それこそ一寸と雖外へは出られない。

夜行さんは、首のない馬ばかりが歩き廻るのではない。その馬の上には必ず主がある。左片袖の大振袖のお姫さまもあれば、顔のまつさはな六部もある。その他主の異つたのがさまざまあるが、首きれ馬の主としては此二人が如何にも適材である。見た目が凄い。だから私は首切れ馬の傳説を引證するものにも、この二話を以て代表して置く。

### 濁が淵の主

桑の川の上流の濁が淵には首切れ馬の主がゐる、その背の上には血だらけの六部が乗つてゐる。

年老ひた六部はその日も黄昏に近づいたので、今宵の宿を氣つかひはじめた。先刻休んだ並木での村の人の噂では、この桑の川の長者は斯うした廻國の者共を心よく宿めてくれるとか、それこそ今宵の淨土と、嬉し喜んだ老人は、先づその人に厚く禮を述べた。

何さま此あたりでの長者であらう、年經た大木の樹隠れに棟の高い家根、鶏犬の聲ものどかに聽えて來る、はや立昇る夕餐の煙。

何のこだわりもなく長者の家では宿を許してくれた。それも納屋の隅の下僕と枕を並べる事か爐の向ふに座を與へてくれて、夜のたべ物も主人のを分けて馳走してくれた。水一杯にも人の情の温かさ冷たさを味はう漂らひの老人は、泌々この家の主人の温情に動かされた。主人は憐れな旅の人を恵む優しさの中にも、別けて老人をいたはるの情が深かつた。六部は心から今宵の有難さに身も魂も蘇生したやうに覺えた。乞はれる儘に旅の話をも語る。見知らぬ國の興ある手振に、聴く者先づ浮き立つて、果は語る者も漫ろに浮立つ。どの話もどの



話も、長者の家人をめぐらしがらせぬはない。嘆服され驚異する毎に、六部は何とはなしに自分が世にも物知りで豪い者のやうな氣がして來た。斯うなると人間の心の淺猿しさは、なほその上にも豪く思はしたひ、感心されたい。終に私は、斯うして家もなく旅から旅とさまよふてゐるけれど、天が下にまたと二つない寶物をもつてゐると謂ひだした。

長者の眉は動いた。我こそは桑の川の長者、何不足ない身の上であるが、この貧人のもつ寶と稱する物はない。長者は見たいと謂ふ、押して是非見せてくれと頼んだ。

六部は勿體らしく、御見せ申ませう。けれど斯う謂ふ天下にまたとない寶物は、あなたのやうな御身分の方なら御覽になつても祟りはないが、なみくの人間の見るものでない。一間を拜借したい、そこであなたにだけ御覽に入れやうと、今までとは人が變つたやうな勿體振りである。

六部は笈を背負つて、長者と二人で奥の一間に入つた。

ほの暗い灯の下で、六部は笈の底からとりだした物を掌の上ののせた。

長者は力を籠めて見開いた瞳が、ぐらくと眼まひがした。何ものか知らぬ怪しくも尊い

光に射られたのである。

氣をとり直して瞳をすえた長者の眼には、一塊の黄金が、六部の手の平に盛りあがつてゐるのが見えた。睨と見てゐる中にそこに懸て形が見えだした。それこそは一羽の黄金の鷄。

長者は息を呑んだ。口もきけない。

今日でこそ裏返しの洋服にアイデアルカラーの方々でさへ、金の鎖や時計は、禪をしなくつても缺す者はないが、何しろ何百年前、いや千年にもならうか、その頃の黄金と謂へば、今日此頃の金剛石の比ではない。正に桑の川の長者の心臓はその位置を變へたに相異ない。

次に六部は一寸四分程の木の小箱を長者の前にさし出した。蓋をとつて、これは蚊帳だと謂ふ。覗いて見れば小切が入つてゐる。この蚊帳は魔を除ける。この裡に入れば、如何な悪鬼妖魔たりとも手の出しやうはない。どれ程の寶を積むとも得られる品ではない。魔を除ける功德がある計りでなく、人一人安らかに臥られる、大ききの蚊帳が、此一寸四方の木箱の裡に入つて了ふ、不思議はそこぢや、と彌々六部は自慢の色を強めた。如何に長者らしう振舞ふても、これだけの寶物はまだ見た事もあるまい、と謂ひたけな口振。



長者はものも謂ひ得で、夢を見てゐる人のやうであつたが、欲しい羨しいの念は、聽て口惜しい憎いの心となつた。

これ程の寶をもつ六部は、その氏素性こそ合點が行かぬ、貴い位にあつた人か、さらすば稀代の大盜賊であらう。

長者が忽ちにして其品が欲しくなつたのは謂ふ迄もない。人間はすぐ他人の物を欲しがらるものだが、就中大金持と唱へる奴は素寒貧の貧乏人よりも泥棒根性が増長してゐる。

それからの長者は、六部に親切の度が數倍した。うるさいやうに付き纏つた。無理に引とめた。六部も先をいそがぬ旅ではあるし、樂をして御馳走の食べられるのであるから、ついうか／＼と三日が四日とのびた。その間に謎のやうな話が長者から六部に投げかけられた。曰く、その年で未始終知らぬ他國の並木のこやしと成るよりか、ここに錨を下す氣にはならぬか、さすれば朝夕の物には事缺かさせぬ、家も拵へてやらう、面倒も見てやらう。曰く、田何町とその黄金の鶏と取かへ事せぬか、厭ならば二年が三年でも貸しくらしよう。曰く、山幾つとその蚊帳と替へぬか。

だから謂はぬ事ぢやない。自分の分不相應な物を有つのは、結局身の破滅になる。更にまたそれ程大切なら、なぜ他に見せたりするのか、たとへば美しい妻君などは、いくら自慢でも他人に見せびらかすものぢやない。魔がさすと録な事はない。それに得て斯うした場合に魔がさしたがるものだから。

六部はその二品を、命にかへても手放したくなかつた。永居は爲にならぬと氣がついたので、或る朝、まだ夜の明けきらぬ中に暇乞ひして、再び當どもない旅の草鞋をはいた。

落かかる月か、星あかりか、それをたよりに六部は桑の川の淵まで來た。杖を立てて淵を見下した時、すぎ越し方に馬の脚音がきこえた、と思ふ中にはやその影が見えた。近づくと馬上の主は長者ではないか。

六部を見るなり、馬から飛び下りた。これを最後と長者は改めて彼の二品を懇望した。勿論六部が譲りやうはない。長者は今日の今まで慎んでゐた最後の手段に出るより外はなかつた。

その呪ふべき争ひの中に、こけつ轉びつ逃げまわる六部を斬らうとして、長者の鉞は誤つ



て自分の馬の首を斬つて落した。然し遂々六部もその兇暴な餓の餌食となつた。

二人が命をかけて争つた二つの寶物黄金の鶏と一寸四方の箱に納る蚊帳はどうなつたか。六部が斬込まれてから、其血で濁つて濁が淵と呼ばれるやうになつた、その底に黄金の鶏が沈んでゐる。いまだに沈んでゐる。六部の殺された日、その時刻には、その鳴聲がきこえると言ふ。一寸四方の箱に納る蚊帳に至つては、傳説も私も遂にその行方を知らない。

六部を殺した長者の後はいまだに續いてゐる。その怨恨で此家では、正月が來ても餅が搗けない、いくら搗いても餅に血がまじつて搗けるので。

### 左片袖の姫

袖ヶ瀧山から出る夜行さんは美しいお姫さまで、左片袖の大振袖を着て、首きれ馬を走らせる。

いづれ奸人の舌頭に災された末であらう。これも桑の川の流に沿ふた袖ヶ瀧山に、都から

流れ流れてそこに隠れ住む公卿の一族があつた。その中に、このあたりでは夢にも見られぬ程、眼も昏むやうに美しい姫君があつた。

よくよく運の薄い人達であつたらしい。詫しい中にも明日は新玉の正月と、心祝ひに餅を搗いた大晦日の眞夜半すぎ、質盜の一群がなだれ込んだ。此頃と違ひ、總てが大懸りであつた昔の野武士共、熊坂長範とか蜂須賀小六とか、かうした調子の具足頭巾に身を堅め、斧鉞鐵棒、繩櫛子、投松明、頭目は大薙刀を風車の如くに振舞はさうと謂ふ輩。勿論此方も昔が昔だけに、下女二人に書生一人と謂ふやうな山の手あたりの生活ではない。役者は段違ひだが太刀持つ侍の四五人は居たのであらう。然しそれは全然問題ではない。假りの館は侵入者の理想以上に荒し荒された。身を隠す間もない姫は忽ち賊の手に捕へられた。金銀に飢え米鹽に飢え、人の血に飢え、女の肉に飢えた賊の集團が、何條この目のさめるやうな、香りたかい雫の滴りさうな盆上の肉を見のがさう。血の海と死屍の山の間には姫は押伏せられた。もう此館の裡には犬の兒一匹もないと、思ふ儘に意を満さうとした其の後から、何物、首筋、肩、頭、尻、その怪物は矢庭に四五人を嚙み殺した。驚破と駭き騒ぐ混亂につけ入つて、また六



七人は蹴倒された。灯は消え、松明は踏み消され、如法の闇の裡に、この正體さへ見定めぬ暇もなかつた。襲來者と賊との間に大猛闘が開始された。兵器と兵器の打ち合ふ音。斬られて人の倒れる響。それに混つて馬の暴れまわる音と、苦痛の嘶きとが聽えた。その颯風のやうな亂闘も時たつとないで、盗人共は逃けるやうに引上げて行つた。

次ぎの朝がその隱家を訪づれた時は、賊に斬られて命を亡くした家の人々、不意の襲來者と闇に逢まどひして同志討した賊の屍、その中に、づたくに首を切られた馬の骸によりかゝつて、悼しや姫は死んでゐた。

それから後、大晦日の夜になると、袖ヶ瀧山から首きれ馬が走り下る、その上には左片袖の大振袖を着たお姫さまが乗つておるでなさる。それに逢ふた者は病んで命を落す。

いまでもその時の賊の後が続いてあつて、この家では正月の餅がつけない。搗いても搗いても血がまじつてゐる。恰然公卿の館の餅が、血に汚れてゐたやうに。

夜行さんの噂はいくら數えたてても盡きさうもない。阿波一國に對して分布の範圍のこの位廣く行き届いてゐるのは、何かそれこそ因縁でもありさうである。

夜行さんに出會うと、直ぐ後向になつて手拭でも羽織でも冠れと教えられてゐる。或る女房が何の氣なしに夜出た。月に暈のある晩であつたさうな。曲り角で不と向ふから來る馬の鈴を聽つけた。いま時分馬が通る道ではない。直ぐ夜行さんだなど感づいた。もう絶體絶命女房は絆纏を冠つて道の隅に彼方を向いて蹲まつた。夜行さんは女房の體とすれぐに向ふへ行つて了つた。ほつとした女房はもう好いと思つて後を振向いた。そして見るともなしにその後姿を見た。三日ばかり病んで女房は死んだ。その臨終にこの話をして息を引取つた。

また或る男が道で夜行さんに出會した。この男も氣丈の者と見えて、そこにあつた人家の戸にかじり付いてやりすごした。それが後を通る時、振向いて見たくつて、振向いて見たくつて、どうにも仕様がなかつたのを、柱に噛みつくやうにして辛抱した。その男は病みもせずは無事ですごした。その時の心持を他に語るやう、何か斯う變な大きな手が何かで耳や頭を後に捻じ向けやうとするやうで、何うにも斯うにもならなかつたのを、觀音さまを念じて辛抱し通したと。



## 亡き馬の嘶聲

この話は美濃の話。ギバの本場だけに好い話をもつてゐる。

岐阜から西に七八里で芥見と謂ふ村がある。此邊は馬に炙治をしてから、三ツ目、七ツ目二十一日目、此三日の中どれでも一日は血返しと謂つて休せないといふ、凶事があると昔から謂ひ傳へられてゐた。馬を可愛がる飼生は三日とも休息させる。村の某が炙治して七日目によい仕事があつたので働かせやうとした。馬子は、三ツ目にも休ませない。今日は七ツ目である。是非とも休せてやつてくれと謂ふのを、慾深い主人は耳にもかけない。欺いて謂ふ、折角の好い仕事だ、二十一日目にはきつと休せる、貴様行くのが厭なら留守してもよい、俺が行くと、重荷を背負せて率ひて出て行つた。

村から關に行く道に日野坂と謂ふのがある。そこへ來掛ると、忽然に馬は斃れた。ギバにかけられたのである。何の甲斐もない。血返しを休せなかつた計りに、可愛や馬は死んでしまつた。

それから後、そこへ馬が來ると、晝でも夜でも馬の嘶きが聽える。聽えはするが姿はついで謎にも見えない。曳かれて行く馬もその嘶きを聽くと必ず鳴き合ふ。人間には見えなくとも、馬の眼には見えるらしい。その嘶くは何時も場所が變らない。聲も變らない。馬子は馬の亡靈がそこに留つて、飼主の無慈悲を訴へるのだと謂つてゐる。

私はとり敢えずこの話を、京濱間に専ら横行する馬力屋に與へる。彼等が其筋の目を盗んで規定以外の重荷を挽かせて、今日も明日も明後日もと、飽くことを知らぬ無慈悲な虐待振は、隨所にいまのやうな慘劇を演出してゐるではないか。これでまだ反省しないなら、まだこんなものがある。嘶くだけで馬の心が解らないのなら、人の言葉を話させて見せる。

## 馬の人語

馬がもの謂ふた鈴鹿の關でと謂ふ唄がある。此の話の起りは寛政年中であつたとか、東海



道坂の下宿の馬が、土山の宿に仕事に行つて宿つた夜、何も食べさせられずに一夜明した。明る朝鈴鹿の峠を曳ひて下ると、馬が獨言を謂つた。「やれく、昨日は相場飛脚の重荷をつけて馳上つて、一夜ものも食はされずにまた山道を下るのは、空荷でも辛ひ事ぢや」。馬子が腰をぬかして、それからは馬を大切にしたと謂ふ。馬が人間の言葉をきくものか、今日は老人でもそんな馬鹿は謂はない、と仰有るだらうが、それはいけない。人間でありながら表裏二枚の舌をつかふ化物のたえない世の中だ。馬が人間の言葉をきいたからと謂つて何の不思議があるものか。人間が馬の假聲をつかへないのが馬に對してお恥かしい。そこで馬子唄に遣つたのが、「馬がもの謂た鈴鹿の關で、おまん女郎なら乗せてゆこ」、此唄は可成國々に行き渡つてゐる。馬がものを謂つたのはこれ計りではない。天保の五年四月八日に、東海道藤澤の宿の馬が平塚の宿に荷物をつけて行く。時に平塚では馬が拂底だつたので、付越しにされて大磯まで行かなければ成らない。間もなく化粧坂まで来ると、向ふから權吉の馬が来た。荷をつけ替へやうと申合せて、荷を下しにかかつたが、大磯の荷の方が甚だ重さうなのを見て、折角だが止しにしべい、俺の馬にや背負されねえ、それに丁場が無理いしてあるだからの、と。

大磯の馬子がまだその答をしない間に、「毎日々々重荷を背負せるなあ、末の冥利が悪かんべい」と謂ふ聲がした。聲の主が人間ではない。大磯の馬であつたから二人の馬子は尻餅をついて了つた。大磯の馬を曳いて来た馬子が、馬を馬とも思はない残忍な奴で、一頭には逆も背負きれない程の重荷を、毎日々々つけさして馬を苦しめてゐた。馬子は今更ら身の程が恐しくなつて、其夜の中に、逐電して了つた。まだ此の種の馬がもの謂ふた話は指に餘る程あるが、同じやうなのであるから略しておく。要は馬がものを謂つたか謂はないかを議論するよりか、馬にもものを謂はして動物虐待を戒めてある點に留意して載きたい。私は謹んで前のと此話を、東京横濱の馬力屋にたたきつける。そして一言する。いまに見ろ已に、そら見た事か、ざまあ見やあがれ、と謂はれないやうに考へ直せと。

### 再び馬の人語

馬が馬子の無情を鳴らしたのは前にも述べたが、それだけでは馬が物を謂ふた話の結びが



つきかねる。馬がものを謂ふたのはさうした不平を鳴らす場合ばかりでない。昔京方の公方義親公が栗本郡まかりの里に陣をすえられて、茲で御病氣になられた。延徳三年三月二十五日の夜、十五頭の馬屋に立並べて繋いである馬の中で、第二間の馬屋の葦毛が、忽ち人のもの謂ふやうに、いまは叶はぬじやと謂ふと、また隣の河原毛が、あら悲しやと和した。番の馬取共身をよだたせて恐しさに戦いたが、次の日二十六日に遂に義親公は薨じさせ給ふたとある、即ち馬が人間以上の知覺をもつてゐる。

また武州神奈川に旅人が宿をとつたが、朝立ちに早く立とうとすると、雨が降つて來た。そこにあつた亭主の羽織を盗んで着て行かうとすると、聲がした。それは亭主の羽織ぢや、何で着て行くのぢやと。吃驚して傍を見たが、人はゐない。氣のとがめだらうとまた着て行かうとすると、また、それは亭主の羽織ぢや、何で着て行くのぢや、——此度は眞實に驚いて羽織を投げだして見廻すと、馬屋から馬が見つめてゐた。

### 馬と戀の執着

私は馬は蛇につぐ執念深い畜生だと思ふ。彼の瞳を御覽なさい。人の心の底まで覗き込まつとする、深い疑ひと執拗の色がまざくと見えるではないか。よく馬が女を魅込んだと謂ふ話が昔から幾種もある。馬に魅込れて如何しても脱れる事が出来なくつて、遂に女を馬屋の棟に結びつけたとか、娘を食ひ殺して馬も死んだとか、似通ふた話はいくらもある。馬が犬と同じやうに人間に親切であるだけに、また人間に對して我意を逞うする。蛇は女になつて若い男に戀をし、また若衆などになつては娘の處に通ふが、馬は多くが女に戀をしてゐる。魅込むのは女に多い。いまでも老人は、馬に乳房を見せるなとか、白ひ馬に逢ふたら横へそれろのと謂つてゐる。一度斯うと魅込んだら、殺されても唾へた袖をはなさない執拗をもつてゐる。實に氣味のわるい畜生である。敢て淫獸と謂ふ、その例を二三列べて見る。

三宅島では今でも一月の二十四日の夜は相戒めて外に出ない。神に逢ふと謂ふ。神とは女を魅込んだ馬である。女も女、他の女房を魅込んだ助兵衛馬である。それを神として怖れ祭つてゐる。子供を欺すかすのには、島ではこの神さまの名を呼ぶのが何より一番效能があ



る。特に女の兒などは泣いたのが忽ち止つて唇の色まで變る。首山くびやまのかうべ様が來ると謂ひさへすれば、一言で型がつく。

何時頃の出來事であつたか時代は知らない。島の壬生と謂ふ家の妻女は甚だ心得のない女で、何時も小用をたすのに神着村の首山の方に向つてする。一體女が外でおしつこをすると言ふのからして甚だ穩かでない。間違つてゐる。これでは蛇や馬に魅込れる譯だ。その首山に野飼ひの馬がゐた。それが暫々此女房のおしつこ姿を正面から拜見する。これも何かの因縁と謂ふのであらう。馬は遂々女房を見染めた。これは當然の成行で、無理でない。人間でも他人の裸姿を日に幾度となく見せつけられては、終には此馬と同じ經路へ墮ちて行くのは定りきつてゐる。但し湯屋の三助は別である。それは見まじきものを見た歸納である。その中に何時か折を見て、馬は女房を口説いたらしい。爲ると女房がまた重ね重ねの不心得者で、よく人間と畜生の別を説いて思ひ斷るやうに意見でもする事か、からかひ面に斯う謂ふ事を謂つた。「お前の親切は嬉しい、だからお前の頭に角が生へたらお前の言ふ事をきかう」——無論女房は體よく出來ない相談の良をかけたのだが、これがいけない。一體女と謂ふ代物は男

よりもからかひ過る。此不眞面目を神さまがお憎しみになつたのか、或はまた其姦馬に神通力があつたのか、面白くも無残にも角が生へて女房の驚駭知るべしである。何とか胡魔化して馬を失戀せしめやうとしたが、角が生へた以上は馬の勝だ。とう／＼女は馬に連れて行かれて、生きながら馬の玩物となつた。その有夫姦馬を祭つたのが首神社くびやまで、その女房を祭つたのをこばし神社と謂ふ。神さまも斯う謂ふ來歴のは恐入る。またこんな淫獸を神なぞに祭つた島の人の氣が知れない。

木曾の藪原に甚太夫と謂ふ山持があつた。一人娘のお妙は四つ五つの頃から今年十八になるまで馬屋の前で湯に入つた。事更らに馬屋の前にしたのではない。据風呂が恰度馬屋の前に當つたのだ。馬はお妙が十四五の時からそれを見た。夏などは行水を、馬の目の前で浴びた。やがての事、馬はその行水の流し水、娘のが馬屋近くに流れてくるのを、さも楽しさうに呑み呑みした。娘がそばを通ると首をさげ顔をすり付けては喜んだ。娘は何の氣もつかずに可愛い、ものに思つて、飼料などをなけてやつた。それが高じて終には娘のでなければ餌をたべないやうになつた。他の者のなら豆でも見向きもしない。娘のなら草でも食べた。娘



に婿が来た。その婚禮の夜に馬は綱をきつて逃げた。行方が皆暮知れなかつたが、四五日して谷に落ちて死んでゐたのを見つけた。人に連れて行かれた様子はまるでない。どうも自分で身を投げたらしかつた。何故馬が身をなけたかは、馬自身でなければ知つてゐるやう筈はない。

娘は何時からと謂ふ事なしに病ひつひた。そしてうわ言に馬の名を呼んでばかりゐた。家の者は唯熱病だと思つてゐた。一夜、雨戸の外で馬の嘶く聲がした。家の者はその聲が、永の年月きなれた自家の馬の嘶聲であるので、顔を見合せて顔の色を變へた。嘶く聲は夜通し家のぐるりを繞つてゐた。夜が明けると何時の間にか娘がなくなつてゐた。草を分けて探したが、影も形も見あたらなかつた。四五日して、ふと山へ仕事に行つた男が、馬が身を投げた谷に、娘が突き落されたやうになつて死んでゐるのを見つけた。

こんどのは支那の話である。蜀の國にまだ君長がない時代の事、蠶女の父は隣國の敵の擒となつた。親思ひの蠶女は朝夕泣き悲んでばかりゐた。その母も悲しさは同じ思ひであつた。

ので、若し父を取返してくれる者があつたならば、娘の婿としよう、と謂ひだした。蠶女は其美近隣に聞えた別嬪であつたが、河豚は食ひたし、命は惜し、敵地に踏込んで人間一匹奪ひ返してくるのは命がけの大仕事、誰も娘は貰ひたいのは山々ではあるが、敢てその冒険に當らうと謂ふ者は一人もなかつた。

厩の馬が綱を噛み走つて逃げて了つた。母も娘も別に氣にもかけなかつた。

二三日するとその馬が歸つて来た。唯歸つて来たばかりではない、その背には亡いものと諦めてゐた父が乗つてゐるではないか。

馬は口を血だらけにしてゐた。軀には斬り傷矢傷がしたたかにあつた。生命がけの大奪闘で奪り返して来たその時の光景が目あたりに見える。

馬は兩親の前に脚をまけて、何ものかを求むるやうに嘶いてやまない。

父は何うしたのかと怪んで問ふた。母は娘を妻にやる約束で觸をだしたが、馬にやるとは謂はなんだ、如何に約を履めばとて、馬にはやれないと、齒牙にもかけずに笑ふてゐた。父も笑ふた。娘は氣味悪さに襲はれながら、父の背後に隠れて微笑してゐた。



然し一家の大恩人であるから、手を盡して御馳走したが、顔をそむけて何も食べない。女の姿を見ると、呪ふやうな瞳をして睨む。

父は馬が娘に危険であると感じいたので、擊殺して皮を剥いて樹にかけて曝した。

一日娘はその樹下を通つた。馬の皮は忽然と飛び下りて来て、娘を包んで殺して了つた。

彼は一度この女と魅込んだが最後、死物狂ひでかかる、此點は蛇に次ぐの執拗さをもつてゐる。傳説によると、白馬は最も恐るべきものとして何はぬ風習は、日本全國殆んどに行き渡つてゐる。

馬の瞳よ。彼の瞳の怖くない人は、未だ怪談を語るの資格がない。恐らく畜類の中で、彼の瞳ぐらゐる底氣味の悪い瞳はない。兒を愛する人よ、娘をしてその姿を彼の瞳に宿さしむる勿れ、馬は淫獣である。

## 白馬の噂

一寸見に白馬と謂つても、白馬と葦毛は似通つた點が燕子と杜若のやうで、どれが葦毛でどれが白馬であるか、伯樂でなければ見分けかねる。白馬は飽くまでも白く、葦毛はほんの心持青味を帯びてゐる。またの名を青驚毛と呼ぶのも、さうした色合からであらう。然しその色の異なるのは一般には見分けられない證據には、どこでも白と葦毛を混同してゐる。現に公の言葉としても、彼の白馬節會を、あほうま節會と訓せてゐる。此白馬節會も、白馬を用ひ來つたのが、次第に葦毛を以てこれに代るやうになつたので、さう訓せるのだとも謂ふ。馬説によると、葦毛の馬は年と共に變化して、終に白馬になると教へてゐる。葦毛は八歳になれば色全く變じて白馬と成ると書いてある。然し勿體ない比喩だが嚴島の神前に御乗として捧げる馬は、五行の毛色の中、黒でも赤でもいよく御乗の番となる一二年前には、何時ともなく白馬になつてゐると謂ひ傳へる。私はこれに對して動物の白化などと科學上の言葉を用ひたくない。依然神わざとして遠くから眺めて置きたい。

話が何だか白馬の戸籍調べになつたから、白馬と葦毛の差別は此位にして置くが、兎に角白馬は崇りあるもの、民家に飼ふまじきものと信ぜられてゐる。日本中の村々で、どれ程あ



るか数えても数えきれない。要するに白は神聖なる色、馬としても容易に得易からず、得易からざる計りでなく、人界にては天子の用ひさせ給ふもの、その位にあらざれば勿體なきものとされてゐる。神々は多く白馬に召しておるでになる。八幡さま、お諏訪さま、必ず白馬に召しておるでになる。八幡さまに至つては申し合されたやうに、どこの八幡さまも白馬である。天神さまは牛、辨天さまは龍、兒雷也は蓼、鈴ヶ森の長兵衛は駕籠、その商賣によつて各々乗物がきまつてゐる。神さまの御乗りになる毛色の馬だからと謂ふので、敬して遠ざけてゐるのである。然し茲に例外は、薩摩の國川邊群川邊村の白山権現は、黒い馬に騎つておはずぢやによつて此村では、白馬を鎮守の厭はせ給ふものとして飼はない。更らにまた一例、甲斐國東山梨郡松里村の諏訪明神と、同じ國の東八代郡富士見村の諏訪明神とは、いたく葦毛の馬を憎せられて、もし間違つて祭の日などに村に入つて来れば、それこそ村に凶事がある。萬一不心得者があつて村で飼へば、神これを隠すと戒めてゐる。斯うした例は尙他に随分あるが、これは神の乗物として遠慮したのではなく、神慮を恐れてである。酷ひのになると、下野の那珂郡那珂村の三輪明神は、その神前を白馬がすぎれば、馬は斃れ人は怪俄す

る。神さまがギバの代理をつとめられるのだから凄い。

結局白馬に對して民間の思想は、十の八までが神の有として尊敬して用ひぬのと、あとの二に足りぬ端數が、自分等の戴く神が厭み嫌はせ給ふにより、これを避るのことに別れる。さらば絶體的に白は遠慮されてゐるかと謂ふに、また茲に例外がある。白馬を祀つて神とした社がある。武藏の北足立郡尾間木村の駒形神社がそれである。神體は三頭の白馬であるが、それでは世間體が如何はしいので、表向は觀音さまと謂ふ事になつてゐる。も一つ私の知つてゐるのでは、彼の相馬の野馬追ひで有名な磐城相馬中村の太田神社で、これは毛色は白か葦毛か判然しないが、とにかく馬を祀つたので、表面は妙見さまと謂ふ事になつてゐる。これ等は大いに威張り返つて、神さまらしい勿體振りを見せてゐる。遠慮どころではない、人間より一段と上にある。どちらにしても白馬は、普通の馬とは扱ひを異にされてゐるのは明白な事實である。

### 徳川家の禁物



茲にまた面白い挿話がある。昔徳川幕府時代には、將軍家では白馬は嚴禁のその一であつた。先づ第一が例の村正の劍、これは先刻御承知であらう。家康が少年の時に誤つて指を傷つけたのも村正の刀、眞田幸村に追つ驅け追まわされて散々擧丸を縮めたのも、村正の槍、曰く何、曰く何、であるが故に村正と名のつく刃物は、徳川家に凶をなすものとして忌み避けてゐるのは判りきつてゐるが、あとの一つは、と謂ふと、これは白馬である。然しこれは何も家康を蹴飛ばしたのでもなければ、由井正雪のやうに徳川の天下を狙つたものでもない。徳川はその先祖を新田氏として、源氏だとお仰有る。一體系圖なんて謂ふものはどうでもいゝものだ、赤旗が天下を風靡してゐれば、徳川も、遠く御先祖を尋ね奉るに、桓武天皇九代の後胤なんかと、知盛の幽霊の寢語のやうな事をのたもうのだらうが、とかく世間は勝てばこれ官で、源氏の方が羽振がいい、最負がある。赤旗で嫌はれるよりかと、大ていは源氏に拵へあけるものだ。徳川とてもその玉で、御先祖なる新田氏は、上野の國新田郡の一の宮を一族の守護神とす、この神白馬に乗り給ふにより、代々新田の一族は白馬を避けて用ひぬ、

御當家もその流の末、白馬は恐れあり、御乗御無用、なんかと勿體らしく世間體を張るもの、一體系圖なんてもの程人を召しあがつたものはない。一家一門を築きあげると、それそこで何とか箔をつけたい、豪さるな系圖をと謂ふ事になる。斯うした輩がここにも彼所にもあるから、即ち系圖屋なる商買もよつて起つたのだ。御先祖が妾を三十人置けば、いい事にして自分も三十人妾を置く。御先祖が梅毒で死ねば、白分も喜び勇んで梅毒になる。そこへ行くと加賀さまは見上げたものだ。ここでもいざ御系圖と謂ふ段になつて、係の役人あれかこれかと詮議の末、さて、御當家御系圖は菅原の道實公に御座りますと、と申上ると、その邊でよからう、と仰せられた。何と、このその邊ぐらゐる味はふべき言葉はまたとあるまい。謂ふ事に無駄がなくつて、意味深重だ。自分の先祖を世間に吹聴したいばかりにわざと白馬に乗らない、そんなのとは毛の生へやうからして異ふ。徳川の白馬禁制は氣障だ。



# 城の主

刑部姫

城の怪談が始つて此話が出ないと、私は味噌汁なしで朝飯を食べさせられたやうな気がして、一日飯を食べたやうな心地がしない。味噌汁は誰でも毎朝膳につく物、この怪談もその格で、城の怪にはなくてはならぬ。但し手前製の味噌汁は岡崎の八丁、白味噌や宿屋の、やうに、こつてりした眼玉の寫るやうなのではないから御安心を。

呼吸についてはまた降りしきる秋の霖、夜は子をすぎて丑に程もない。時よしと座を立つた森田圖書はその年十四歳、思ふに色白く眉清く、眼に星の光あつて、紫か淺黄の振袖に、

袴は勝魚綺、月並ではあるがお約束で斯うありたい。この夜半にお天守の頂上七階まで上れるか、誰も唾を呑んで事なかれの顔。圖書一器量ある魂の、おめおめと座に堪へやうや。『拙者上つて参る』と凛たる口上。息を引いて誰彼齊しくその顔を見る。お天守には主がゐるさうな、晝間でも三階から上は上れない。それをこの、唯さへ雨に寂しさ加はつて、お廊下に出るさへ心の戦く眞夜半、さりとは無分別、盲人蛇に怯じすとや、不憫や圖書はお天守を自分屋敷の奥の間と同じに考へたのぢや、と宿直の一同申合したやうに思ひ合せる。中に親切なのが、今夜に限つた賭ではなし、月のない夜になされては如何、と退き口を作つてやつても此男顔に似合はぬ情の剛さ、今夜でなくては賭にならぬと一向に取り合ぬ。一座は白けて唯時を待つ。四つの拍子木はとくの昔に廊下の杵に消え失せて、ざ、ざざあと雨が横なぐりに雨戸を撫でる音。

圖書は手雪洞に灯を移した。それだけ。刀掛の太刀には目もくれず、その儘さらさらと袴の鳴る聲、見返りもせずに出て行く。まさに水の流れ行く風情。

圖書と聞くと、年の頃四十代、淺黒く肉豊かに、眼大きく二重瞼、芝居ならば大星由良之



助、草双紙なら秋山豊後、さうした人柄を思ひ浮べる。これが彈正なら鼠となつて連判狀を啜へだし、權八なら犬を斬り、雲助を斬る。やはり名は體を現す、好い名はつけたい。

斯りける程に、一重二階、三重四階、五重七階の梯子を踏み上つて、今は頂上、左に雪洞を高く翳して、右の手は靜かに杉戸をあけた。

朧月夜か、暈ある月夜か、内はほ一つと薄あかり、片膝ついたなり差し覗くと、一座の燈臺まん中にとほつて、その前に机、これまで見て、將たと物の威に撃たれて、我にもあらず頭を低けた。「何者ぢや」。重みのある、冴えた、禪僧の大喝を言葉に研いた趣、圖書雪洞をさし置いて、塵に前髪を埋めて恭々しく手をつかへる。さて徐ろに眼をあけると、年の頃三十三四、顔長に大きく、色蒼きまでに白く、眼釣り上り、鼻瘦せて高く、紅き唇の大いなるが、十二一重、緋の袴、思ふにこれは古今東西、今の梅幸の他にその人なし。然しこれは私のお話で、圖書には梅幸などには見えない。神か、魔か、但し我が森田圖書は、小刀に手をかけるやうな世間並の勇者でない。言葉爽かに事の仔細を述べる。さらばここに参つた證據にこれもとと、いづどこから取り出されたか、圖書の膝一尺程前にさし置かれた一品、御禮申

して手にとると、兜の鍔、引ちぎつたやうに切つてある。押戴いて懷中に納め、杉戸は舊の儘にしめて、再び冷たい板敷を踏んで下りる。三重を下りかかつた途端、不と背後に物の氣配、見返ると、梯子一杯の大入道、やにわに雪洞の灯を吹消した。如法の闇、圖書はまた上つて行つて、再び件の杉戸を開けた。「何しに來やつた」。灯を奪はれた仕末を申上ると、「さても心剛き者よ、ここは人間の來まじき處、構へて再び参るまいぞ」。御手づから雪洞に灯を移し下される。此度は吹消す入道も出ず、無事に下りられた。

さて宿直の間に立歸つて、これを證據とその鍔をさし示す。御同役いづれも齒の根が合はず、その中に夜は明けて、この事殿のお耳に入る。時の城主は松平大和守義俊、圖書召出されて事の顛末を言上する。名ある者も未だ上り得ぬ天守へ、よくぞ眞夜半、兒小姓の身にて上り得たるぞ、その鍔見せいの仰せ、手に取つて御覽あつたが、はて見たやうなと小首を傾けられる。もしやと係の侍を呼び出して、お藏を開いて御家重代の兜をあらためると、鍔がない。引ちぎつてある。件のと合せると、びたりと合ふ。手の長さ力の強さ、豈景清の比ならんや。これはお天守からお藏の内の兜の鍔を引ちぎる。



妖怪の中でも私は一番十二重に緋の袴の、上臈姿のが物凄くて好きだ。この刑部姫と一緒に思ひ出すのは、伊豆新島にやはり上臈姿の妖女がある。島の丑寅に淡井浦と謂ふのがあつた。そこに怨念様と呼ばれて、非常に怖れられてゐる海中の礁がある。昔ある船が錨をこの礁に引かけて、欺してもすかしても取れない。一人海中に潜つてはづしに行くと、その錨に腰をかけて彼方向いてゐる者がある。なぜ他の錨に腰をかけるのだ、だから錨が上らない。のけと押し除けやうとすると、その者は此方を向いた。女だ。色のまつ蒼な、口の耳まで裂けたやうに大きい、物凄じいのが、十二重に緋の袴で、その漁夫を睨みつけた。「この錨は返す事はならぬ、ここは人間の来る處でない、とつと戻れ、妾の姿を見たと言つたが最後汝の命は立所に亡いぞよ」と。男は魂の色までまつ蒼にして逃げ歸つた。この男も依然、謂ふなと謂はれると謂はずにはゐられない代物と見えて、つひその女の話をする、言葉が切れるか、切れない中に、ぱたりと倒れて最う息はなかつた。

話は再び刑部姫の上に戻る。姫は何が本來の面目であるか私は知らない。草双紙などは狐だなどと言ふ。私は何が何だか判らずに置く方が面白いと思ふ。然しその年頃だが、年増盛

りだと謂ふのと、老女だと謂ふのとある。老女側の謂ひ分は、此城の主となると、必ず年に一度は天守櫓の頂上に立つて、城の主の御機嫌を伺はなければならぬとしてある。殿様は表面上の城の主で、實際上の城の主は刑部姫さまであるからである。その時人間の方の城の主の眼に見えるのは白髪の姥だと謂ひ傳へられてゐる。

もう一話、老女説の方の根據は、この姫路城は加藤清正が拵へたので、石垣を築く時、いくら石を積んでも、積んでも、一夜たつと崩れて了ふ。道の清正も如何したら好いのか思案に餘つた。すると或夜、名も知らず見た事もない姥が來り合せて、礁のやうな小石を石垣の上に置いて、この上に積みよと謂ふ、清正その通りにすると、果してそれからは崩れなかつた。此姥こそ城の地主刑部様だと謂つてゐる。

然し私は、白髪の婆さんよりか、色が蒼くつても、口が大きくつても、年増盛りの方が好い。何故と謂つて、色氣があるから好い。それにお天守の櫓に立たれた姿でも、大すべらかに十二重緋の袴、檜扉を翳した方が神々しくて繪のやうだ。白髪の姥では、お天守と釣合はない。されば私は、刑部姫は、上臈姿の三十三、是が非でもさうして置く。



## 八幡太郎の戀

英雄何とやら謂ふが、源氏の大將株は却々撫切の名人に富む。八幡殿もその方では先づ親指を屈けられる。その昔例の前九年後三年の合戦の折、鶴の羽形城に對陣した(秋田縣仙北郡花館村)、守る者は安倍貞任、毎日毎日追ひつ追はれつ、矢石を飛ばしてゐる中に、義家は内職を始めた。それは女を拵へたのである。何時垣間見たものか、貞任の息女鹿姫が、義家の爲めに左の胸を押へるやうになつた。義家由來雅量のあり餘るあり、早速に退治して了ふ。姫は夜になると、笛を吹いては義家の許に通つた。暢氣千萬も極まれりではないか。一族の浮沈、親兄弟が死ぬか生きるかの瀬戸際に、笛を吹いて情夫通ひ、斯うした眞似をして見せたから、伯父の宗任も見やう見眞似で降人となつたのだ。この笛を吹き吹き通つた路を笛澤と呼んでゐる。義家は城の落ちない前に、その娘を落して了つたのだ。この事何時しか城主貞任の耳に入る。秘藏の姫が敵將の槍玉にあがつて何で欣ばう。即刻追手は差向けられて、

## 竹の間

姫は斬つて捨てられた。その立廻りの最中に姫は鬘を落した。今もそこを鬘澤と謂ふ。その流れには毒があつて、今でも飲めば命はないと戒められてゐる。姫の一念の致す處とされてゐる。また毎年五月の四日の日暮には、姫神山の水が一時に白くなる。それは姫さまがお米をお磨ぎ遊ばすからだと謂ふ。その次の日の五日には、姫神山の榎に白旗が幾十旒となく立つ。誰も山の上まで登もないのに立てに行く者はない。義家と鹿姫の間に出来た兒が立てるのださうだ。この白旗を見た者は、三年の内に死ぬとの謂ひ傳へ。

それと同じのが甲斐にもある。三月の三日には天目山に白旗が見える。それを見た者はその年の中に死ぬと戒められてある。謂ふ迄もなく茲に滅亡した勝頼一族のなす業。然し斯うして何百年の昔に死んだ者が、さうした悪戯で自分と人間との聯絡を断たないやうにしてゐるのが面白い。



備前岡山の城中、御本丸の竹の間の柱には、誰にでも祟る不吉な柱がある。

どこの世界でも新参者は白い眼で見られる運命をもつてゐる。殿御寢所から二間置いて、竹の間は五十帖、そこに夜毎に二十人の家臣、若くして屈強なのが、殿の御寢所守護として宿直する。この宿直の若侍の中で、新たに御夜詰を申付かつた者は、その晩必ずその柱の洗禮を受けない譯には行かない。

曾ては御夜詰を勤めた者、兄なり妹の婿なり、或は親類なりが、何故それから避れるやうに教へてやらないのか、その何故は終に判らずに了つた。假令自分の子が初めて其役に當つても、親は何處を風が吹くと謂ふ顔をして、その夜を勤めさせる。そして苦しませる。よしそれが大した苦しみでないにせよ、慈悲のない行ひである、情がない。

どの城にも主がある。私は岡山城の主が何であるかを知らないが、恐らく此柱を主と見るのが當然である。此柱が主にならない前は何が主であつたにせよ、今は此柱がその主を押しつけて主の位を領めてゐる。然り現實に占めてゐる。柱は死んだ柱であるが、魔物同様な力量をもつてゐる。

殿さまは大抵、四つの御時計が鳴る少し前に御寢になる。御寢になると直ぐ御坊主が知らせに来る。來りや應と若侍の面々、我勝ちに床を敷いて了ふ。一人當り二帖としても五十帖なら可成り樂々と床が敷ける。それを什麼した事であらう、中央のところ二帖ほどをすーつと一筋、路のやうに空けて、十帖あまりが白々と疊を見せて、そこは床が敷いてない。而もその左右は、床と床と一寸の隙間も見せずに敷かれて、かけ蒲團は瓦を葺いたやうにそれからそれと重なり合つてゐる。知らぬが佛、佛はものを疑はない。宿直の作法は斯うしたものが位に思つたが、さて自分の床を敷く場所がない、ないのではない有るには有り餘る程あるが、そこへ敷いて好いものか、わるいものか、様子が薩張判らない。迂路迂路してゐると、中にお世話焼で、悪戯好きで、またその悪戯で天晴周圍の喝采を我が有にしたいと始終心がけてゐるのが、親切ごかしに、『そこへお敷きなさい、そこはこの間でも正座だが、今夜は特別ぢや、さ、遠慮は無用、お敷きなさい』……やれ地獄で佛と、よく佛が出るが、これも因果か、怪談に佛は付物、仕方がない。甘々と投げられた良、地獄の底へはうり込まれたとは知る由もない。今夜が宿直の皮切の身は、座る疊にも氣兼ねする際、親切な人と欣んで床を



敷く。そこは入口ぢや、失禮だが出入の邪魔になる。もつとすーつと奥へ、あの柱の前が好い。あすこなら誰の邪魔にもならぬ、それに彼の通り廣びろとしてゐるから、樂々と眠られる。また親切な人が出てくる。謂はれる儘にその大きな柱の前、枕を柱とあてがふ位にしてさて漸つとの事で床に入る。

寢所が變ると睡れないもの、向ふ三軒兩隣りは皆これ宿直場敷の寢上手、立つても座つても、歩いてゐても眠れる輩であるから、床に入らない前から眠つてゐる。宿直の新參、柱の前にねかされた男、却々眠れない。夜廻りの太鼓は風の間隙に、さも睡たけに聴えてくるが、眠れない、眠れない、斯う謂ふ時に殿御寢所に何か異變でもあつてくれれば、まつ先がけに馳せつけて、天晴初陣の功名、思はぬ出世の緒口となるものを。雨戸を撫でるは風か忍びか、伊賀か甲賀か、鼠か蝶か、今にも金網をかけた番の灯の前に、まつ黒々と覆面の曲者むつくり立たぬとも限らぬ。その時こそは斯うして彼あして、なぞと他愛もない夢を見てゐる中に、何時か眞實の夢になる。

この夢は誰しも見なければ濟まされない夢、今夜の男がどんな夢を見たかは知らないが、

此男もお約束通りに、踏んだり蹴たりの目に逢はされて、體中の血と脂が油汗になつて、五體は熱湯を浴びたやうになつた。これは誰しもが受ける刑罰で、産れてから死ぬまで、この位酷い目に逢はされるのは、これが最初であり最後であらう。

この話はまた聞きだ。従つてその柱の前で見る夢が、どんな夢であるのか知らない。また實際夢なんか、見た者が自分の見た通りを話すか、口先で拵へて話すか、當人の腹になつて見なければ眞疑知れたものではない。それよりかそこに人間が一人、芝居でも眞似事でもなく、腸からの油汗を絞つて苦惱の叫びをあける、これで澤山だ。

いま惱されてゐる男が、此儘死んで了ひはしまいかと思ふ程苦しむぬく。その苦しみが必死の聲となつて、人界の人々の耳に響く。その恐ろしい、物凄じい叫びには、魂を千里も飛ばしてゐる寢坊でも現世に立戻らない譯にはいかない。一人さめ、二人目を醒し、暫くの中に竹の間の宿直の侍、一人残らず目を覺して了ふ。そしてそこに、極めて不人情な、冷淡な場面が展開される。或者は床の上に座つて、うなされてゐるのも見てゐる。或者は臥た儘でその聲を聴いてゐる。刑場で、槍で横腹を刺され、火に焼かれる、それを見物してゐるかの



態度。手を觸れまじきもの、近よるまじき者、助けまじきもの、として扱つてゐる。何と謂ふ不人情な人達であらう。

やがての事、傍觀者の一人が、『餘り聲が高いやうぢや、上が御目覺になつては恐れ多い、何々氏、お茶道を起して下さらぬか』。これは上席で相當の年輩、言下に一人立つて隣の間に行く。襖一重、何の造作もない。折返してお坊主がやつてくる。毎度の事で馴れたもの。こんな時でなければ殴れないと思つてか、抱き起して、拳で厭と謂ふ程背中をどやす。一つでは氣が濟まないと見えて、おまげが二つ三つ、これなら奈落の底からでも飛び起きる。起きた處で聲をかける。掛けなくとも可いのだが、流石に殴つた許りでは氣がさすと見える。柱に祟られた當人、水で死にかかつた者が助けられたやうに、遮二無二お坊主に嚙り付く。漸つと人心地がついて四邊を見廻すと、これは如何な事、此間の人は一人として起きてゐないのではない。目を覺してゐたのなら、何故早く呼び覺して助けてくれないのだ、口にだして不平を謂ふのと、怨めしさうに睨みつけるのとある。この時また年輩のが、『お茶道、御苦勞だがまた頼む』と謂ひ捨てて、今度は新參に、『もう眠れまい、次の間でお茶道と寝物語は何うぢや、玄齋は話上手だから、また面白い話をしてくれるだらう』。今度は何うしたのか同役殊の外親切で、夜具を手傳つてはこんでくれる。

さて次ぎの間、お茶道と枕を並べて、ほつと一息。『〇〇さま、御氣の毒を致しましたな、けれどあれは何もあなたさま許りに限つた事ではありません、あの柱の前へ臥た者は誰に限らずあした目に逢ふので御座いまして、いえ何、御詰合の皆さまが、お目覺めでありながら御呼び起し申さないのも、譯があつてで御座います。決して面白づくで見てゐたのと、そんな不人情な不親切な御座いけません。あれは斯うで御座います。あの場合あの竹の間の方が、あなた様を御呼び起し申しますと、またその方があなたと同じ恐ろしい夢を御覽なすつて、あの苦しみを繰返しなされるので御座いまして、それからそれと唸されては、起し、起しては唸されてゐましては、一夜中どなたも一睡もなされません。そこで愚老が御助けに伺ひましたやうな次第で御座いまして、……あの柱で御座いますか、それは、その、どうも夜分は御話ができかねますが、御所望とあれば是非が御座いけません、さらば一齣り、講釋師の眞似を致しませうかな。



さても日本國創まつて以來、關ヶ原の合戦ほどの一六勝負はない。五年十年兵を交へたのは指を屈する程あるが、それは勝つたり負けたり勝負定まりなく、それとは異り、關ヶ原のは、ほんの二か六かの賽の目一轉び、一戦で鬼がつく。何方かが天下の主となれば、何方かは修羅の鬼となる。慶長五年九月十五日は、家康公には大吉祥日ぢやが、石田、小西には大悪日。大阪勢は石田、小西、島津、浮田、大谷、脇阪、戸田、木下、南宮山の彼方には、毛利、吉川を初めとして、長束、安國寺、長曾我部、大阪勢には必死の色が見えて、十が七つは石田小西の勝と見えたが、憎んでも餘りあるは筑前勢、小早川秀秋は昨日までは石田方と見せかけ置いて、何時の間に内府に意を通じたか、……合戦はその日辰の刻と謂ふに火蓋は切られた。東西の勢二十餘萬の大軍、砲煙晝を夜となして、矢叫びの聲太刀打つ音、人馬のとどろと駆け合ふは大地も崩るるばかり、現世ながらの修羅地獄、撃ちつ、撃たれつ、追ひつ、追はれつ、血汐の河、死人の岡、未の刻に至るも勝負未だいづれとも見定め難い、と思ふ中に内府方、漸くに勞れて、旗色白け渡る。そここゝに、屢々破れて、屢々退く。この時まで日和見の小早川秀秋は、大阪方か、關東方かと、旗色に迷ふて松尾山の上に八千の手

勢を控へて朝より動かさず、心中未だそれと決し兼ねたる折柄、關東勢よりは豫ての合圖として、窪島孫兵衛大筒を撃ち放つて、今ぞ今ぞと裏切の催促。筑前の振舞奇怪と豫てより看破りたる大谷刑部吉隆殿は、石田三成とは年來の交はり、秀秋の二心に戦ひ危しとは知りながらも、生命は石田へと覺悟召されて、手勢僅かに八百をもつて松尾山の下にと構へられた。刑部少輔は悪疾の重つて、兩の眼ひたと盲ひ、晝を夜とも辨ち難い。その日の軍装には、白の練小袖の上に村蝶を墨にて描いたる鎧直衣、白絹をもつて悪疾を包む。白木の輿に身を乗せて、これを擔ぐ者五十人餘り、みな齊しく白刃を抜きつれて、途に當る者は鐵壁もなほ破つて通らんす勢ひ、筑前が八千の勢これに氣を吞まれて、進みもならず、退きもならず、一方には合圖の砲音、撃つて下らんか、麓には刑部少輔が八百の決死の勇士、槍衾を作つて備ふるあり、進退ほとほと谷りながらも、遂に裏切の旗を翻した。これや窮鼠猫に向ふの概、戦士八千銃手六百、一齊にどつと許り松尾山をば撃つて下る。刑部少輔齒咬みをなして六尺の青竹に輿を叩いて、それ踏み躪れと大喝の下に、八百の吉隆勢、喚き叫んで筑前が勢に割つて入る。元來より武士の魂なき小早川の勢、撃ち破られ、斬り崩されて、十の四は吉隆勢



に撃たれたが、八千と八百は十が一、口惜しくも吉隆の勢は、一人も残らず斬り死の天晴最後。刑部少輔の無念口惜しさは、今もなほ目の前に見える。この裏切に氣を得た關東勢は、負色立つたのが盛り返して、大阪勢は防戦甲斐なく崩れ立つて大敗亡、終に浮田秀家の窟隠れとなり、小西の捕はれとなり、石田が葦の粥となり、世は家康が有となつて、當城の主たりし浮田中納言は、領地は召上られて八丈島の鬼となる。それと代つて賜つたのが、人もあらうに人非人の小早川秀秋、備前岡山の城は中岡の目貫、餘程の信任なくては預けられぬ。それと謂ふのも關ヶ原天下分目の瀬戸際に、約を守つて裏切りしたからの儲け物。暫くは秀秋の夢も穩かであつたが、亡き人の怨はやがて繞つて來ずにはゐない。漁遊の歸途の黄昏に怪しの影に怖へて落馬してより、人心なく、夜も睡らず、晝は狂ふて、湯水も咽喉に通らずに狂ひ廻り荒れ廻り、『おのれ推參大谷刑部、當城の主は金吾中納言秀秋、城中に白輿を乗入るとは奇怪至極、お我を討たうとか、松尾山の仇討ちに參つたとや、出會へ、者共、驚破合戦ぢや、汝、刑部少輔、大谷吉隆、『近づく近侍侍女を斬り捨て斬り倒して、はては無慘狂ひ死を遂げられたのぢや。それ、あの竹の間で、あの柱にもたれて、狂ひ死に召されたのぢや。

斯うして次ぎの夜詰からは、此男も床を折重なつて敷いて、窮屈な思ひをして眠る。そしてまた新參が、知らずに敷いて、殺される程苦しんで、また茶道に呼び起されて、この一條を聽かされる。そして柱は、百年その儘に、不言不語、まつ黒々とツツ立つてゐる。

### 掃部助の魂

斯うした話は類が多い。城趾に人馬の物音がしたり、火がもえたりするのは餘りに月並すぎるが、この火は招けば來る處に面白味がある。

土佐國長岡郡國府村に比江山と謂ふのがある。比江山掃部助の城趾だとしてある。掃部助は長曾我部元親の叔父に當る。何か元親の怒りに觸れた事があつて、討手をかけられて一堪りもなく落城した。掃部助はその妻子一族と共に討たれて了つた。それから後、今に至る迄雨のそほ降る夜には比江山に火があがる。色赤く、大きさ傘ほどもあつて、一里餘りも飛び



まはる。草履をぬいで裏に唾を吐きかけ、それで招くと車輪のやうに飛んで来る。昔さうして招いた者があつたが、餘りの恐ろしさに逃げ歸つた。歸つてもその怨念火は、その男の家の周囲を飛び廻つてゐた。家の内は晝のやうに明るかつた。恐ろしくて、恐ろしくて、魂も身に添はずに、夜具を被つて震へてゐた。その中に、どこから火が出たものか、怪し火が出て家は焼けて了つた。だから比江山に掃部助の火が見えても、見てゐるだけなら差つかへはないが、招いてはいけなさと堅く戒められてゐる。

殺された人間の怨靈が火になつて飛びまはるのを、もう一つ思ひだしたから附録とする。伊豫の松山の七不思議に、粟井阪の怨靈火と謂ふのがある。毎年九月になると、石手川の南の拓南から一團の火が舞ひあがつて、その数が三つ五つの時もある。十、二十もある時もある。それがふわりふわりと徐かに、五六里の間を山傳ひに粟井阪まで来ると恰然曉になる。そこで残り惜しさうに消える。三夜も四夜も續けて出る事もあるし、七日に一度しか出ない事もある。この火は昔高繩の城主河野某が、その家來の爲に謀られて殺された、その怨靈の火だと傳へられてゐる。

これは怨靈火ではないが、長曾我部にも關係があるし、松山の七不思議の一であるから、南方へ義理を立て、採用する。

松山七不思議の一で、南郷の太鼓と謂ふ。松山の城の南から西へかけて野原になつてゐる。毎年八月の末になると、夜半に、何處からともなく、幽かに、幽かに、陣太鼓の音がして来る。人あり、その音を求めて尋ねて行けば、音はまた他の方から聽えて来る。斯くして終に捉へることが出来ない。この太鼓を鳴らす者は、その昔長曾我部元親に破られた伊豫勢のなす業としてある。要するに長曾我部元親なる男は、殺す程の者をして悉く化けさせずには置かない。よくよく怪談の種を蒔くのが上手な男と見える。

## 白馬の將

八鶴の城と呼ばれてゐた、上總の國では名城の一つ。北條の家臣酒井小太郎が此城を踏まへ、祿は僅か五萬石ではあつたが、武威おさおさ四隣に震ふて、あつばれ北條の片翼、徳川の



世とならずば、何時までも八鶴湖にその雄姿を寫してゐたものを、慶長の年某の月、家康はこれも眼の上の瘤の一として、攻め潰せと采配を振り切る。小城と雖も手に餘る敵として、馳せ向ふたは四天王の中にも槍さきことに鋭き蜻蛉切の本多平八郎忠勝、勝ちに勝ち誇つた勢ひは眞に面も向くべからず。孤城の奈何でか能くこれを支へ得やう。曉よりの合戦に、午の刻にははや落城、辱を知るの侍は城と共に亡びた。

今もその城趾と謂はれてゐる山の麓に、本漸寺と謂ふ寺がある。その寺では午には鐘をつかぬ。その昔から太鼓を鳴らす。もし鐘を撞く時は、今も未だ修羅に迷ふてゐる八鶴の城主酒井小太郎が、白装束に血をあびて、白馬に跨つて現はれ、城山かけて八鶴湖を一めぐりすると謂ひ傳へられる、と謂ふ譯で、本漸寺では、未だに午に限つて太鼓を鳴らして、鐘にかへてゐる。

この物音によつて白馬に跨つた將が現はれるのがもう一つあつた。もつと世の中には多いのだらうが、私はこれきりしか知らないから仕方がない。周防の國の山口町に築山神社と謂ふのがある。これは大内義隆を祀つたもので、その隣りにある八阪神社は、大内の館の内に

あつた義隆守護の祠である。この築山神社の前では、「田村」の謠曲をうたふことを禁じてゐる。もし心のない者か、悪戯者があつて、田村をうたへば、甲冑姿で白馬に跨つた義隆が現はれて、空を飛んで鴻の峰の方へ行くと謂はれてゐる。何故田村をうたへば義隆が現はれるのか、それは義隆が陶晴堅に攻め破られた日、恰然田村をうたつてゐたからであると。

龜

姫

猪苗代城の主、龜姫と、姫路の城の主、刑部姫とは、姉妹でおはすさうな。姫路が姉君、龜姫はおん妹。

加藤左馬之助嘉明の息式部少輔明成が、會津若松の城を領してゐた頃の事、猪苗代の城はその重臣堀部主膳が城代を勤めてゐた。祿一萬石、武勇譽の者、膽満身と唱へられた。時は寛永十七年十二月、某の日、主膳は唯一人で居間にあつて、今日も寒くさむく暮れて行く庭の面を眺めてゐると何處から出て來たのか、足音もなく、禿が目の前に現はれた。主膳、つ



ひぞ見なれぬ奴、怪し、要こそあれと空嘯いて目も呉れずになると、禿曰ふ、汝この城の主を知れりや、と。主膳、さてこそ、何せんとするかと、それとなく用心してあれば、如何に主膳、汝久しく此城に住むと雖、未だにこの城の主に御目見得をなさず、無禮甚だし、只今主君、御禮請けさせらる、急ぎ呼び参れとの御諚なり、早や早や身を清め禮服を着して従ひ來れと、言氣荒々しく、立つたる儘にものを謂ふ。主膳今は、狐狸變化なりとも用捨ならずと、初めて眼をさし向けて、はつたと睨みつけ、當城の主は我が主君、加藤左馬之助嘉明代つて護るは斯く謂ふ堀部主膳、此外に城の主のあるべきや、たわけ者と大喝。禿、露ほども驚かず、嘲笑つて、また謂ふやう、左馬之助、嘉明、何する者ぞ、我儘勝手に移り來つて城主と名乗る曲者、この城始まつてよりの主は我が君龜姫さまより外になし、汝未だ姫路の城の小坂部姫を知らざるか、彼の方さまはお姉上さま、龜姫さまはおん妹君、汝知らずや、汝の天運は既に盡きたり、また天運の改まる時なし、見よ見よ、汝の命數はその灯の如きぞと、風一陣颯と吹き起ると齊しく、灯は消えて、禿も見えずなる。

主膳元來武邊の猛者なりと雖も、有繋に心の傷つかぬでもない。兎かくして其年は逝く。

明けて寛永十八年の春正月元朝、主膳は年賀の禮を受けんと、上下を着して大廣間に出で己が座すべき上段に目をやると、生々しい棺桶を飾り、その左右に葬式に用ゆる道具一式を揃へてある。家臣を訊し求めても、元よりその人を得やう筈はなかつた。

またその夜、何處とも知れず、大勢で餅を搗く物音がした。城中、隈なく探し尋ねても、これまた逃ぐるが如く、遂にその所在を明にし得なかつた。

主膳一人の胸に秘められてゐた不祥が、城中残る隈もなく行き渡つて了つた。

一萬石の家族が、人の力の及ばない不安に手足のやり場もなく思ひ悩んで、一日、一日、と覺束ない日を送つてゐると、その月、即ち正月の十八日に、主膳は不淨から病ひついて、何の病とも見極めの付かぬ中に、廿日の夜の引明けに永い眠りに就て了つた。

## 天井を行く女

何時の事であつたか、時代は判らない。



下總忍の城で、宿直の一人が、ふと夢がさめた。夜半はすぎてるたが、未だ夜明には間があるらしい。また眠らうと枕をなほすと、また一人起きた。何かに目が醒めたやうに床の上に座つてゐる。聲をかけるのも面倒と、眠た振をして様子を覗つてゐると、また他の一人が起きた。これも誰かにゆり動かされたやうに、眼を覺して、床の上に座りなほして、何か考へ込んでゐる。二人とも顔を見合したが、一言も言葉を交さない。寝ほけてもゐなければ、眠る前に物争ひをした仲でもないのに、不思議な振舞ひだなどと思つて、なほも様子を伺つてゐると、また他の一人が起きて床の上に座つた。一人が自分より先に起きた二人を見た、二人がいま起きた一人に目をやつた。けれど此方からも、先方からも、顔は見合したが、言葉は交さない。腑に落ちない振舞ひが再び繰返された。宿直の者は五人なのだが、一人病氣で缺けてゐるので、四人になつてゐる。その四人が四人眼をさました。そして誰も彼も一言も謂はない。此時最も先に眼をさました一人が、三人が顔を見合せても、一言も口をきかないそれを不思議とし奇怪と考へてゐた自分自身を、漸つとその仲間であるのに氣がついた。なぜ自分は此人達を見てばかりゐて、言葉をかけなかつたのだらう、それが不思議に思はれて

仕方がなかつた。夜具をかけて臥てゐるたが、臥てゐては濟ないやうな氣がして、床の上に座つた。四人が四人、見交した。然し口をきいてはならない國の人間のやうに、誰も聲を出さない。いや出し得なかつたのかも知れない。

何と思つたか、一人が立つて行つて廊下の障子をあげた。三人も續いて、飛び起きて、その一人がもう片々の障子をあげた。四人は何と思つたか、そこに座つて了つた。相變らず四人は啞であつた。處々に置いてある金網をかぶせた灯が夢のやうに長い廊下を照した。

絹づれの音がした、さら、さら、と幽かに。三人は申し合したやうに其の方を見た。先づ白い長い物が、廊下の天井にさがつてゐるのを見た。黒く、長い細いものが廊下の板の間に立つてゐるのを見た。

何だらう、四人齋しく思つた。思つただけでその正體は判らなかつた。

呼吸をする度に、その天井に白く、板の間に黒く、そして連がつてゐるものは段々此方へやつて来た。女だ、女だ。女が白無垢を着て、髪をさけ髪にして、天井を歩いて来るのだ。身をさかさにして、……板の間に黒いのは、その髪の手だ。



目の前に来た。その女は、人品の高い、威のある、立派な女であつた。その間一二間をへだてて、同じ装の、若い女が、腰元であらうか。これまたさかさに歩いて来た。また一人、續いて一人、腰元らしいのが五人、以上六人の女が、天井をさかさに歩いて四人の前を歩きすぎた。四人はそれこそ、茫然が人間になつたやうにそれを眺めてゐた。白無垢の女は音もなく表口の方へ天井を歩いて行つた。

その曉方、奥では大きな騒動が降つて湧いた。奥方が突然お隠れになつた。續いて腰元が五人、お供をして彼の世へ行つた。昨夜までもおすこやかでゐらせられたのが。……餘りの事に、家中の一統はそれを信じなかつた。信じまるとした。然し終に奥方はじめ五人の腰元は、眞實に彼の世へ行かれたのであつた。

### 乞 援 兵

日本の城は如何にも城らしい。本丸、二の丸、三の丸、天守が三重、もしくは五重、肩に

白雲を宿して青座高々と聳えたつ。神々しい。雄々しい。そこに魂ありと誰にも頷かせる。主がゐると謂はれば、成程さうかとも思ふ。支那のは困る。家を城と呼ぶのでなくして、一の都會の四方に高い塀、石と土で築きあげた、それが城なのだから、何だか締りがつかない。その塀の裡には、質屋もあれば、八百屋もあり、女郎屋もあれば、天浮羅屋もある。城の中に女郎屋や質屋のあるのは、甚だ不都合だ。城の威光を墮すと一方でない。斯うした土塀が城なら、奈良や京都には至る所に城がある。これでは主なんかあるまいと安く見くびつてゐると、有る。主もある。神もある。既に斯うした話がある。

河南の滑州の城は、彼の二千年の中に三たびその流域を變へた恐しい黄河と相並んで走つてゐた。唐の玄宗の時代、開元年間の事である。

時の城主、韋秀莊が、ある夕暮に城の上を漫ろ歩きしてゐた。城の上を歩くと謂ふと甚だ合點が行かないが、前申上た如く、土塀の上を歩いてゐたので。この土塀甚だ幅が広い。いざ鎌倉となると、その上に陣笠が押並んで矢石を飛ばす。まあ結局往來の變體で、車や驢なぞ來ないから、散歩するには面白いかも知れない。



どうせ支那の軍人の事だから、女の事かなんか考へて、思ひ出し笑ひかなぞで歩いてゐたと思へば間違ひはない。するとひよつくり、目の前に人間が出た。それこそ、この場合、天から降りでもしなければ、地からは三丈も四丈も萬いものだから、湧いて来るには空間がありません。

章秀莊は、思ひもかけず城の上で人間に逢つたので、一寸驚いたが、さてその現はれ出でたる人間を見るに及んで、二度吃驚せざるを得なかつた。身の丈が三尺あるかなしで、その僻顔は非常に老人臭い。諺の通り、三尺だから童子だと早合點してゐると、顔に叱られる。大ききから見れば小兒だが、顔から考れば申分のない老人だ。一體どつちなのだらう。紫の服を纏つて、赤い冠を載いてゐる。

章秀莊は頭の好人だと見えて、反さなかつた。これは世間並の人間ではないと直覺したらしい。先づ此方から一拶した。『や、御老人、毎日好い天氣が續いて結構ですな。』三尺の怪老も丁寧に會釋した。『俺はあんたに御願ひがあるのぢやが、』御願、と仰有ると、『是非聽届け下さらんけりや困る、俺の運命の瀬戸際は、即ちあんたの浮沈ぢや、』と仰有ると、『俺の

身の上を明さなければ、話は判らぬ、俺は人間ではないのぢや。』章秀莊は、さてこそ、お出でなすつたなと胸を躍らした。怪老は恐れ氣もなく、『俺はこの城の主なのぢや。』章秀莊はびりつと軀の震えたのを知つた。妖怪でないので安心はしたが、城の主と名乗られると、自から頭の重さを感じずにはゐられなかつた。肩身の狭ひ思ひがした。今のいま迄この城の主として踏反りかへつて歩いてゐたのが、目の前に城の主と名乗る怪物に出て來られると、自分の影が薄くなつた。然し彼はその老人を、彼自ら稱する如く、眞實の城の主と思つたので、更らに改めて禮を厚うした。『あんたは俺を見るのは初めてぢやらうが、俺は毎日あんたを見ない日ではない、處でぢや、俺の頼みぢやが、仰せ聽け下さりませ、身に代へて行れるまで行つて見る考で御座います。』城の主は然もこそと頷いて、『あんたは未だ知りなざるまいが、いま此城は危急存亡の場合に臨んでゐるのぢや。城の脚下を洗ふやうに流れてゐる彼の黄河は、今日から三日の中に、此城を呑まんとしてゐるのぢや。いやさ、城を河としやうとたくらんでゐるのぢや。聽け、章秀莊、駭くまい。汝が俺に力を添へさへすれば、恐らくはその事なくて齋む。』どのやうな事を致したら好いので御座ります、疾く仰付け下さりま



せ「俺は昨日まで、彼黄河の暴戻な挑戦に對して、手を盡し、術を盡して、戦へるだけ戦ひぬいたのぢやが、彼は見る通りの大軍ぢや。此城は、さして狭少と謂ふではないが、彼に較べては、虎の前に犬ぢや。俺は手勢の限りを盡して、これまで戦ひ續けては來たが、今日から三日の後に迫る最後の決戦には、どうせ勝目が薄いのぢや。そこでぢや、今日から指折つて三日の日の暮方近くに、この城のあたり、黄河のあたりで、此城と黄河との天下分け目の大戦が開かれる。白い霧は俺の軍、黄な煙は敵ぢや。この合戦のまつ最中に、汝は弓勢の強い武者を三千人、この城の上に並ばして置いて、すわ戦ひと見たならば、その黄色の煙を目掛けて、遮二無二弓を射たてるのぢや」判りまして御座ります、何の大した事では御座りませぬ。其様な事で此城が助かりますならば、何故もつと早く仰付ては下さりませぬ。今日まで御遠慮なされたのが無益で御座ります「では、韋秀莊、きつとぢやぞよ」きつとで御座ります「萬一違約いたさば、此城は河となり、俺も、汝も、幾萬の城中の老幼は、魚の腹に葬られるのぢやぞ」韋秀莊はまた一禮した。何かまた謂はうとしたが、もうそこには、紅の冠に紫の服の姿は無かつた。

韋秀莊は彼の城の主と名乗る老人の謂ふ所を絶対に信じた。さう謂はれば、どうも此頃の河の流れ鹽梅は、城の脚下をさらはうとしてゐるらしく思はれて來た。見るが如き大怪物である。此城位、呑もうと思へば僅の一呑だ。それを斯うして呑まれずにあるのは、彼の城の主が、神兵を以て防ぎ鬪つてくれればこそだ。彼の朱冠の老爺こそ實に吾々の大恩人だ。彼の爺なかりせば、此城は疾くの昔に川と成つてゐる。城内の幾萬の老若は、今頃は魚になつてゐるやう。俺もその仲間には脱れまい。もし何かの僥倖で、魚族の難を脱れ得ても、守るべき城がないから、その日から浪人だ、浪人だ。考へた計りで軀中が粟だつ。

韋秀莊は雲霞の如き大軍に押寄せられたやうに、必死になつて兵を召し集めた。弓の強い兵者ばかりが、三千も一城に備へてあるべき筈がない。汗馬を八方に飛ばして、東の城、西の城から、出来るだけの弓術手練の猛者を乞ひ迎へた。三日目の朝までに、漸つとの事でそれだけの人数を描へる事が能た。

韋秀莊は、丁寧、能るだけ丁寧、それ等の弓取りを頼つた。そして、戦ひの駈引をよく嚙んで含めるやうに呑込ました。



遂々その日は来た。暮方近くとの申し遣しではあつたが、戦さと謂ふものはさう眞正直に行はれるものでは決してない。正直を守る方が何時も馬鹿を見るのが通り相場だ。不正直なものが得て奇利を博する事にこれまた相場が決つてゐる。彼の城の神は正直を實行しさうだ。黄河は如何、見たばかりでも彼の如く壁をとかしたやうな顔の色は、どう見ても正直らしくは思はれない。彼はこの城を餌食にして自分の領地を擴げやうと永年心がけてゐる。或ひは、表には日没と約して置きながら、不意に起つて奇襲し來らぬとも限らない。いや寧ろ彼としては常套手段として行ふのが既定の行動と思はれる。その時はそれこそ一堪りもない。可矣。城の神の出陣なくとも、黄煙不意に湧き起ると見たなら、三千の箭先で射立てて見やう。勝敗は豫め伺ひ知るべくもないが、用心に若くはないと、朝來既に城の上には三千の兵を配列して、弦食ひしめ、箭束くつろけて、何時にても應戦の準備おさおさ怠りなかつた。

敵は不意には襲ひ來らなかつた。漸くにして日は暮に近くなつて來た。

何時となく黄河の襲ひ來る噂を耳にした城中の民百姓は、今にも大洪水が襲ひ來るかのや

うに怖れまどふて、家財を車に積み、老ひたるは背負ひ、幼きは抱き右往左往に逃げ走る。城主の鎮撫も何の役には立たない。大半は他郷に脱れ走つたが、膽太いのは居残つて、今の夕の河伯と城神と人間との争闘を一生の見物にしようと、人の山を築いて頻りに空を仰いでゐた。

河の面は、思ひなしか、波が荒く、高くなつたやうに見えて來た。泡が、黄な泡がむくむくと浮いて流れ漂ふ。忽にその泡が、さしにも廣い河の面一面に隙間もなく浮んだ。何か事ありさうに見える。有りと見ればあり、無しと見ればない程の、煙か、霞か、それも泡のやうに次第々々に濃くなつて、見る見る中に河面を掩ひかくす。驚破と拳を掴る。黄な煙は、勢ひを得てもくもくと空に向つて昇つて行く。

人は皆河面にばかり氣をとられてゐたので、自分達の頭上に白い霧が、棚引くやうに陣を張つてゐたの知らずにゐた。黄な煙が、勢ひよく昇つて行くと、白霧も徐かに相應じて上つて行く。

既にして、相對した。動かざると少時。それが互ひに攻勢の陣容を放つて定めやうと



するかのやうに見えた。黄軍は鳥の翼のやうに両端を廣げて、一氣に押し包んで一揉みに揉み潰さうとすると、白軍は三段に備を分けて、中堅右翼左翼を突き破らうと動きだした。

両者は遂に合した。中空高く白黄の氣、霧とも煙ともつかないものが、相撃ち、相紛れて追ひつ、追はれつするかのやうに見える。時は今と、戦鼓が打ち鳴された。三千の箭は一齋に黄軍に向つて飛んだ。元來より矢つぎ早の精兵、箭は息を吐く間もあらず吹雲のやうに飛んだ。中空高く射あけた箭が、矢羽根色々の色を夕陽に輝かして、燕のやうに飛んで行つて、大きく半圓を描いて、雲雀のやうに墮ちて來て水に流れて行く。箭の一筋が何ものをも貫かず空に飛んで、その儘落ち來るのは、單純ではあるが面白味のあるものだ。それが夕陽の前に何千とも知れぬ箭が、その興ある舞ひ姿を演じたのである。見る程の人達は、思はず酔はされた。聲をあけて賞めただえた。

戦鼓の響、弦音、矢叫び、見物の士民が城の神の軍と人間の戦士とにあける加勢の聲々、これこそ思ひもかけぬ物凄じさであつた。白軍の爲には大きな味方となつたが、黄軍には鈔からぬ脅威であつたに相異なる。

夕陽が、彼の見はてもつかぬ海のやうな黄河の水平線に沈んで行く頃には、さしもの矢數も残り少くなつた。弦に箭を食はした兵が、空を仰いで、黄煙いづこと打見やる彼方には、何時の間にかその色も影も消え失せてなかつた。どうやら戦さは勝つたらしい。

然し未だ不安であつた。城の上には終夜大篝火が焚れた。弓手は交り番に弓杖ついて見張りに怠りなかつた。

次の朝が來た。一夜をもしやの不安に睡られなかつた人達の眼は駭くべき大變化を見た。黄河が三四町も城との間を置いて流れて行く、城と河との間に廣く長い川のやうな野原が現はれてゐる。

これこそ、疑ひもなく黄軍は戦旗を納めたのだと、頼まれて弓を曳きに來た兵も、町に居残つてゐた百姓も、手を取り交して喜び合つた。

それつきり彼の城の主は、誰の前にも姿を見せなかつた。韋秀莊は嚴かに城内の悉くの人々とそれを祭つた。



## 首なし行列

越前ときけば、彼の時の勝家殿の眼光を思ひ出さずにはゐられない。あれは秋の末であつたか、黄昏に北の庄を訪づれて、勝家殿の木像に逢ふた時は、四邊は既に逢魔ヶ時の、ものみな陰あつてうごめく。その色の裡に、腫の凄じさ、人と謂ふ人は誰彼の差別なく、怨まではやまぬ眼ざし。紫電眼に焼鐵をふれたる如く、或は眼と眼を合するにたえず、背筋を震して合掌したが、星霜二十年、京華事多き朝夕に起伏しながら、未だ彼の眼は私の頭腦から消えて行かない。城亡び、將卒修羅の鬼となるとも、勝家は活てゐる。北の庄の彼の堂に活きてゐる。

この話に血が通つて脈をうつてゐるのは百年ほど前であつた。その頃の越前の國福井の人は、來る年も來る年も、四月二十四日をまたない怖しい日として、日が暮れては一寸も外へは出る事ではなかつた。親が死んでも、夫が亡くなつても、……それは自分の命が惜しいか

らだ。忠だの孝だのと謂つても、どれよりも自分の命の方が大切だ、實際正直な話だ。

その夜外に出ると、或るものに逢ふ。逢ふとその人は血を吐いて死んで了ふ。誰しも血を吐いて死んでまでも夜あるきはしたくない。そこで福井の城下は無人の境となる。

この夜、無論舊曆の二十四日であるから月はない。であるのに鳩の御門の柵形には月が映る。土に映る月、聞いたばかりでも血が冷たくなる。もし人あつて此夜この柵形に一步踏入れれば、どうしても出られない。次日の朝他の人がその人を見つけた時には、頭を石垣にぶつけて、血だらになつて死んでゐる。鳩の御門とは、今の裁判所のあたりだと謂ふ。

それならば、それで、鳩の御門に入らなければよからう。いやそうはいかない。鳩の御門は鳩の御門だけの怪異、それよりも、つと大きな怪異が、城下一ばいに横行してゐる。もし宿り遅れた旅人とか、急用の他國の人が、間違つたり知らずに行き違ふと、血を吐いて死ぬ。然し行き逢つても、背を向けて見ず見られずにしてゐれば、命には及ほさない。けれどももしその話をしたが最後、それこそ即座に血を吐いて死ぬ。何故斯う人間と謂ふ代物は、見たら見たで、そつと其儘自分の胸に隠して置く事が能ないのだらう。謂はせるのだ。しやべらせ



るのだ。その妖怪が謂はせずには置かないのだ。見まじきものを見た罪人、どうせ生しては置かれぬ。そこで禁を破らして命を奪る。見ても見られなくつても、行き逢つたが不運命の捨場だ。

四月の二十四日亥の刻をすぎると、九十九橋の上に炬火のやうな火が現はれる。初めは一つだつたのが、二つになり、三つになり、四つ五つと次第にその数がまして、一刻ばかりの内に、橋の上、橋の東西に一ぱいになる。この火こそは、柴田勝家の軍が勢揃ひをするのだと言ひ傳へる。

その九十九橋の亡霊火は、動かないのは動かずに、動くのだけが、あはただし氣に東西に馳せちがふ。これを暫くして、もはや軍勢が揃ふたなと思はれる頃になると、何うした事かさしもの数の火が一時にはつと消えて闇となる。

首なし行列はそれから歩きだす。

家と謂ふ家は戸を堅くとざして、螢火ほどの灯ももれない。北國の四月、未だ春はこの城下には訪づれず、星の瞬きも寒さうである。その寂寞たる無人の境を、去來も定めず奇怪の

行列が練り歩く。

白い霧のやうな塊が、地上二三尺の空間を歩くやうに流れて行く。また一つ、また一つ、それからそれと幾つも来る。時々一丈餘もある大きなのが挟つて来る。もし人あつて眸を凝して視たならば、霧でも煙でもないのが判るであらう。人だ。武者だ。鎧を着た武者だ。四人づつ四五十人も一隊となつて、隊と隊との間が、途絶れて、また續く。間々に大きく高く見えたのは馬だ。馬上の武者だ。

鎧も白い、太刀も白い、背に靡く旗指物も白い、手に携へた弓も白い。總てどれを見ても白からぬはない。

だが、この人達には首がない。槍ひつさけた軍兵にも、馬上の將にも、いや馬にも首がない。

首のない白装束の軍勢が、夜どほし城下を、武者押し道の筋も定めずに練り歩く。

この行列に行き逢つた者は、行列を見たと言つては成らない。謂ひさへしなければ、即座に血を吐いて死ぬやうな事はない。どうせそれを氣に病んで、遅かれ早かれ人間の仲間から



辭退しなければならぬのだが。

ある人が、……この人は他國からでも来た人なのだらう、それでなければこんな無法な事はしないから、……四月の二十四日の夜、ふと眠がさめた。不淨にでも起きやうか、それとも耐へて睡て了はうか、とでも考へてか、むづむづしてゐると、俄かに窓の下で大勢の足音がする……窓が往來に面してあるのから考へれば武家奉公の者であらう……四月二十四日の夜だ、氣のきいた人間なら屋外になんか氣をとられはしないのを、そこが此男の運の盡る時であつたのだ。何事が起つたのかと窓をあけて外を見ると、白装束の、首のない武者が、隊をなして續々と行きすぎた。此男がそれを見てはならぬ首なし行列と、知つてゐたか否かは判らないが、誰だつてそんなものを見て喜んでゐるはない。明る朝漸つと起きたその男の顔を見た人は、誰もが、何うかしやしないか、どこか悪くはないかと、同じ言を謂ふ。録々返詞もしなかつたが、朝飯の時に、餘り訊れるので、實は昨夜、首なし行列を見た一條を話した。話しきると、容體が俄かに變つて、血を水のやうに吐いて其儘息を引とつた。

堂形と謂ふ所に水野と謂ふ侍がゐた。その家に永く奉公してゐた下女が、宿へ下つても親

しく出入してゐた。その女ももう年を老つて、澤山の子供の母であつた。この人もさうした運のもち主であつたのだ。四月の二十四日だと謂ふのに、氣がつかずに舊の主人の堂形の水野へ遊びがてら伺ひに行つた。この氣がつかないと謂ふのが運の盡だ。それで宿りさへすれば此難は脱れたのだが、夜食を御馳走になつてから、宿るつもりで居たのが、急に歸りたくなつて歸ると謂ひだした。まあ今夜は宿つて行つたら好からうと勸めても、一向意を翻へさない。それではと謂ふので、土産物を持たし、提灯をかけて歸らした。歸ると謂ひだした方も、歸らした方も、共に二十四日に氣がつかなくつたのが、これも運だ。今日昨日他國から移り住んだ人ではなし、親代々の此國の産れだ。四月の魔日、九十九様に亡靈火のとほる夜だ。鳩の御門の櫛形に月の寫る夜だ。白装束の首なし行列が城下を押し歩いて歩く夜だ。

果せる哉、この姥は主家からの歸り途、新橋の近くで、向ふから道一ぱいに列をつくつて練つて来る、首なし行列に逢つた。もと来た道へ引返せば、後から追はれる。右にも左にも切れるやうな横町はなし、進退殆ど谷つた。然し流石にそこは年の巧、直ぐと提灯を吹消して後向になつて行列をやりすごした。行列は姥の後ろを、足音靜かに行きすぎた、……實際足



音がしたとその姥が自分の子供に話した……行列は歩きやうが遅いので、却々行きすぎなかつた。漸つとの事で命を拾つた思ひをした姥は、暗闇を這ふやうにして家へ歸つた。その夜は黙つて、何も謂はずに寝て了つた。明る日子達、と謂つてももう立派に女房子のある息子は、母の顔色が餘りただ事でないので、氣にして訊いて見た。最初はどこも悪くはないと隠してゐた母も、話したら何分か氣が重くなく成らうかと思つたか、實は昨夜堂形からの歸り途にと、話すまじき禁制の話を話した。息子や娘の驚駭知るべしである。けれどその婆さんは、何か神佛の加護でもあつたのか、即ぐその場で血を吐いて死ぬべきのを、何事もなくすぎた。そして一年たつた。息子や娘はその間それこそ神佛におすがり申して母の無事息災を念じ祈つた。その次ぎの年の四月二十四日が来た。その朝ふらりと外に出た件の老母は、遂々その夜は歸つて來なかつた。その家族は謂ふまでもない。親類縁者近所の知人が馳せ集つて、四方八方を探しまわると、ある川に、突込れたやうな形をして死んでゐた。兩脚を空に向けて、顔を首まで泥に突込んで。

この越前の首なし行列と、阿波の首切れ馬とを合せて見ると非常に興味がある。どちらも

出現の日がきまつてゐて、共に怨靈で、それに逢つた者は、話せば死ぬ。今の私は唯それだけ面白いて見て置きたい。斯うした種類の話は、まだ日本に澤山あるのかも知れない。何かの機會に、正直で話し上手でない人からそれを聽されたら、どんなに悦しからう。そして段々その數がまして來たらば、自然と草に隠れた徑が見いだされるであらう。首切れ馬よ、首なし行列よ、もつと君達の仲間を呼び集めてお呉れ。



## 猫

### 二百八十餘年前の怪猫

よく猫の怪談に家鳴り震動と謂ふ事を謂ふ。これに就ては斯うした面白い證左がある。

此噺は餘り多くの人に知られてゐない。正保四年の出来事であるから、恰度今日から二百八十年程前の話になる。地は相模の小田原在、梅軒と謂ふ醫師の家にある。

寛永の時代であつたと謂ふ。相州小田原の城主稻葉正則の藩中に緒方梅庵と謂ふ外科醫があつた。慈悲心の深かつた人と見えて近國近在の貧しい町人や百姓は謂ふに及ばず、乞食非人にまでも病を見舞ふて、心からの療法を施すを殆んど身の勤めのやうにしてゐた。その巧

徳もあらふ、醫術も日に月に女妙に達して、天晴名醫と呼ばれるやうになつた。従つて藩主のお覚えも淺くない。小田原の梅庵と謂へば誰知らぬ者もないまでに名を轟かした。

梅庵の父は長州阿武郡草安寺村の郷士緒方八郎衛門の子であつた。年若の頃から力量凡人に秀れて、相撲は最も得意とする、近隣に並ぶ者もない大剛の者であつたが、或時萩の藩の家士と武藝の事から争論に及んで、相手を甚く辛い目に逢はしたので、藩主の立腹一方でなく、何かにつけて憎まれ勝なため、土地にも居づらくなつて上方へと來た。大阪城代であつた大久保家の足輕に職を求めて暮してゐたが、終ひに江戸へ來るやうになつた。暫くして相州小田原から三四里の在方の金手と謂ふ、村の郷士鷓羽山杵之允の養子となつて、村の若者に武藝を教へてゐたが、劍術なり白打なり天晴手練の強者であつたので、小田原の藩からも師として通つた程であつた。これに育てられた一子が即ち醫師緒方梅庵である。梅庵は稻葉侯に奉公してからは、同藩竹子甚平の妹を娶つて二人の男子をあけた。長子は幼名杵太郎、弟は平吉と謂つた。杵太郎は父の業を繼ぐべく醫に志して、十五になつて梅軒と改名した。

梅軒は祖父杵之允死去以來は、祖母の時に齡八十に餘る老人に侍いて故郷の金手に住んでゐる



た。

何故私は猫の化ける癖を他にして永々と梅軒一家の略歴やその祖父の父となりを精しく前提としたか、これが決して徒事でない。斯うした人の孫であればこそ、この恐ろしい猫魔と一年近くも殆ど不眠不休で闘つたのであると謂ひたい爲に、梅軒の祖父の大剛であつたのを先づ吞込んで戴かなければ成らなかつたのだ。

楮、時は正保四年丁亥の四月二十四日の朝、この朝から梅軒の祖母は中風の氣味で床に病みついた。病氣が病氣であり、齡も齡であるから、一步も病室からは出られない。梅軒はその由小田原の父梅庵の許にも知らして、朝夕の看護怠りはなかつた。

此祖母が若い時から寵愛してゐる猫があつた。彼は二十年餘りにもなつたと謂ふ。猫は頗る伶俐なもので飼主なる老婆の寝る時は、小袖の袂を咬へて寝間に誘ひ、自分もその側に寝る。朝は朝飯の膳の出來たのを見すましてから、その袖を咬へて連れて來て膳につかせる。實際吾子も及ばない程の孝行者であつたが、この猫が終に恩人たるその祖母の生命を奪はんとして果さず、一年近くも主人梅軒を苦しめたのであるから、二十年間飼つてやつても、猫

には恩も糸瓜もない。永の年月生命を繋いでやつて置いて、これに咽喉笛を狙はれては、寔に間尺に合はない。熟々猫は魔物である。

老母が病みついてから、老母は勿論、家の者も餘り猫に構ひつけなかつた。

四月は過ぎて五月の初めの或日の黄昏、その老猫が老母の枕元で、後肢でしゃんと立つて前肢を翳して梅軒の方を窺見る。梅軒ははて不思議な猫の振舞と、見て見ぬ振りをして油断はなかつたが、猫はたそがれの暗さに紛れてそれと氣づかなかつたのか、梅軒に心なしと見て、徐々と腹這になつて病人の襟元に這ひより、初めは尾で、じやれて見たが、睡むつてゐるのを見すまして、前肢の爪を磨きだした。さらに再び梅軒の様子を覗つたが、可しと見て二脚三脚後退りするよと見ると、老母の咽喉笛目懸けて飛び掛らうとしたのを、尋常ならずと油断のなかつた梅軒は、柄に手をかけて身構へてゐたから、驚破と相州秋廣の一尺六寸、抜き討ちざまに斬りつけた。しかし間ののびてゐたのと、刃物の短かつたので、殘念にも討ち洩した。猫は二の太刀の下をかい潜つて、兩戸を蹴破つてそれきり行方知れずになつて了つた。梅軒は脇差の切尖についた血糊によつて、多少の疵は負はせたことだけは解つたが、



齒を鳴らして口惜しがった。

その夜から梅軒の家は地震のやうに動揺する。殆んど座に耐えない程に動揺する。家は三間の梁に十八間と謂ふ大きな家であるのを、揺り初めると今にも家が微塵に潰れるかと思はれるばかりに動揺する。それから毎度甚しい夜になると一夜の中に百六十度も動揺した事があつた。家の者は少しも睡る事が出来ない。猫の仕業と知れてはゐるが、奉公人は恐れをなして無理に暇を貰つて歸つてしまつた。

家の動揺するのは夜に限らない。白晝でも劇しく動揺する。終ひには一晝夜に三百七八十度も動揺した日があつた。事の怪異は直様小田原の父梅庵に知らせた。梅庵が家に入るや否や、家は家鳴をたて、大浪のやうに動揺した。梅庵は仰天して外に飛び出さうとしたのを、悴の梅軒に袖をとられて漸つと座に戻つた位ひであつた。これによつても梅軒が如何に沈勇であるかを知る事が出来る。

想ひの外の怪異に梅庵も膽を消した。その日は家來二人を残して小田原に歸つて、翌日早速其頃小田原の城下で、生不動と呼ばれてゐた正観院と謂ふ眞言宗の行者を頼んで連れて來

た。正観院は御幣を十四本も切つて、七つ時から夜の四つ時まで肝膽を碎いて祈つたその御幣を四方にさして歸つた。正観院が祈禱をしてゐる中は雨戸一枚がたりともしなかつたが、歸ると直ぐ又家が動揺しだした。夜の三つと思ふ頃にどさりと音がして何か落ちて來たのかさわ／＼と妙な音をたてる。見ると祈禱の御幣が踊りまはつてゐる。けれど猫の姿は見えない。ふわ／＼と御幣が天井に舞ひあがると見ると、抛けるやうに落ちて來た。家の動揺するのは少しも變りがない。

或時梅軒が雪隠に行くと、猫が隠れてゐて背から飛びついた。脇差で突かうとすると、猫は逃げて了つたが、雪隠で狙はれたのが最後までに五回あつた。梅軒は用をたすのに片手に脇差を構へてゐた。

さて此邊まで來ると誰しも疑ひを挾すにはゐないのは、何もそれ程怪妖のついてゐる家に病人と二人して無理に踏留まつてゐる事はあるまい。けれどもそこが即ち二百年前の人間、而も大剛の郷士の血統であるから、恥辱を知る。猫の悪戯で後退しては名折れである。現代の人間とはまるで意氣が異ふ。



或夜は、梅軒疲れて柱に凭れて居眠りをしてゐる油断を見澄して、怪猫は飛びついて梅軒の左の耳の端を噛み切つた。脇差に手がかゝると逃げて了ふ。猫が座敷に顯はれて梅軒に飛びついて噛んだのは十一度であつた。梅軒は晝夜ともに一睡の安眠もとれない。夜は十二箇所行燈を點けて脇差鯉口をきつて老母の枕元に居合腰である。行燈が自然に天井に手繰あけられて火を吹き消されては抛け落される。叶はなくなつて後には行燈を柱に縛りつけた。

家が動揺しだしてから半月ばかり経つた。少しは息むかと思ふと、目を追ふて烈しくなつた。梅軒が寝轉んでゐると、天井から猫の糞が落ちて來た。仰向くと猫が天井の破目から此方を覗つてゐる。起上りざまに脇差をぬくと、猫は隠れたが、その穴から石や瓦を雨のやうに投げつける。薙刀をとつて穴につき入れて薙廻すと猫は逃げて、又家が動揺する。

或夜は梅軒の顔に何か降りかゝつた。見ると灰である。或時は井戸に人糞をなけ入れてあつて飯を焚く事が出来なくなつた。或朝は食事をしてゐると背に何か天井から投げつけた。振返つて見ると丸さ三四寸の毬のやうな物が動いてゐる。見ると青大將を束にして球のやうにしたのであつた。

或る夜更けに、納戸から、まつ黒な、疊二疊もあらうかと思はれる得體の知れない怪物が轉がつて來た。梅軒が飛びかゝつて斬りつけると、まつ二つに割りつけた。中からは一匹の大きな猫が飛び出して逃げ失せた。灯をあけて見ると切りつけたのは古雨傘であつた。

或る夜は天井から矮鶏が落ちて來た。梅軒は木太刀で殴つた。すると矮鶏は消え失せて影も形もない。塹を調べると一羽失くなつてゐた。それから塹の上には大きな犬を番さして置いたが、謂ひ甲斐なくも貌を掻き破られて血だらけになつて吁鳴いてゐた。

こんな怪異が九月まで續いた。事の起りは四月であるから、實に半年である。その半年の間。雪隠に行くにも抜刀を携えて行くやうな、寸時も氣をゆるせず、而も老人の病人の看病をしながら、不眠不休で辛抱を仕通した梅軒の勇氣と精力とには舌を捲かすにはゐられない。

九月の末からは夜になるとその猫の鳴き聲が、家の棟やら天井裏やら床下やらで聞えるやうになつた。梅軒の思ふには、もう猫も寒さと飢とで苦しんでるやう、落しにでもかけてやらうと、猫の好きさうな物を押入の中に置いて戸に出入の穴をあけて待つてゐると、果して



或夜猫は落しにかゝつた。二人の家來に手傳せて猫を雁字搦みに縛り上げて生捕にしたが、その時家來の二人は左の腕を五寸あまり噛みとられた。櫛の棒で殴りつけて袋に入れて、その袋を更に俵に入れて、その夜は強雨であつたので、夜が明けてから川に流さうとしたのがまた失敗の原、猫は繩を喰ひ切つて袋も俵も破つて逃げ失せた。それからは家の揺れるのも悪戯も一段と猛烈になつた。

二十日ほど過ぎて或夜の九つ頃病人に藥を吞ませやうと仕度してゐると後の方でぱた／＼と音がする。振返ると人形した怪物が、笠を冠つたなりで、手に二本の棒を持つて梅軒を打たうとする。脇差を抜いて斬り倒した物音で家來が駆けつけた。見ると畑に立てた案山子であつた。

天井には七八箇所も穴をあけて石瓦草木を落す。それからは例の落しにもかゝらない。十日ほど経つて或る夜半に猫がその押入を覗いてゐるのを見つけた。戸を閉めきると猫は押入に飛び込んだ。槍をとりよせて家來に戸を少しあけさせると、猫は透を見て逃げ出さうとする。槍で突き伏せた。猫は左の目の下を刺された。家來も脇差で前脚を突く。その處に梅軒

は胸を突いた。家來は繩で縛りあげて棒で滅多打ちに打据えた。一夜吁鳴きとほしたが、夜明には遂々死んで了つた。

仇をしない前も大きな猫であつたが、その時は七尺五寸の大猫となつてゐた。背に五寸四方程毛の禿た個所があつた。思ふにこれは椽の下で背中をあてて揺ぶつた故であらうとの事であつた。死體は俵に入れて海に流して了つた。

此由を城主の正則公がきかれて、厚く御賞美を賜つたと謂ふ。時に正保の四年九月某の日、何と凄じい猫ではないか。先づ猫に驚いて、次ぎに梅軒が半年の間の不眠不休の豪氣と精力とに感心せずにはゐられないが、まだまだ舌を捲く事がある。その梅軒がその時年僅に十六、現代の十六ならば最初の一動揺で目を廻してゐる。

猫魔の怪が家を動かすと謂ふ傳説には、この梅軒の猫の背中の禿て毛のないと謂ふ點が甚だ興味ある研究材料である。

## 猫 魔 問 答



寺にはよく猫がゐる。寺のやうな怪談に縁の深い家には猫は相應しい。猫がよく老婆を喰らひ殺して、それに代るやうに、寺にもよく猫の怪談が保存されてある。

いまでも其寺はある。旅行の途次汽車の窓から友人に教へられたのであつたが、何でも汽車で甲府を出て、龍王と韭崎との間の右の山裾の、大きな竹藪のあるあたりにその寺があると教へられた。

庄屋の猫はもうかれこれ 十年以上も生きてゐる。齡にしたら、人間ならば六七十か。歩くにも餘程難義のやうで、家にゐても爐邊を離れない。其僻よく田の畔をのそく歩き廻つてゐる。何の爲めとも考へられないが、そして田畑に仕事をしてゐる人を昵と斯う見つめる。見つめられた人は老人でも血氣盛りの者でも、何となく氣味が悪くならずにはゐられない。狙はれてゐるやうに思はれて誰でもそれを非常に嫌ふ。石を投げた位で逃けるのではない。鳴きもしずになほの事眺めつける。こんな畜生一匹首筋をつまんで川にたたつ込めばそれ切りなのを、それも仕得ない。笠の裡に寝かしつけてある嬰兒などは、この猫が來ると、寝てゐる

たのでもきつと泣きだす。母親は今にも喰ひ殺されるやうに驚いて掠ふやうにして猫から遠ざかる。庄屋の猫は化猫ぢや、誰も彼もそう謂ひながら氣味悪がつてゐた。

さて件の寺である。禪寺で、そこには七十を過ぎたかな聾の和尚がゐた。その和尚が何と思つたか、これ迄は雨には爐邊に居睡りばかり、晴には椽に日向ほつこ。この猫のやうな無精もの、和尚が此頃問答を初めた。禪宗の坊主が問答を初めたからとて何もさう不思議がる事はないが、たゞそれが半死の爺さんだけに妙であつた。これ迄にいそ一度も問答の眞似事でもした事がないので、彼の坊主は問答なんぞ知らないのだ位に思つてゐただけに、誰も彼も不思議に思はない者はなかつた。

問答と謂つても、寺内には寺男と小坊主ぎり、蒟蒻問答も覺つかない。即ち門前に高々と札を掲げて、他流仕合である。

この和尚が問答を初めてから、庄屋の猫は消えて失くなつたやうに見えなくなつた。これも聾和尚の問答と共に、村の不思議の一に数えられてゐた。

さて不思議はそれ計りでない。その寺の門に這入つた問答の客僧で、一人として出て行つ



た姿を見たと言ふ者はないのである。或ひは言ふ、和尚は鐵槌でも動かぬかな聲、聲を相手の問答では、石にもの言ふよりも頼りない。これで遠來の問答の客も精も聲もつき果て、さてまた外見もわるく、裏門からでも狐鼠々と逃げ去るのではあるまいか。地體聲で問答が凄じい。遣らすのぶつたり、負けつこはない。彼の坊主も飛んだ茶香氣がある。一番その問答の體を見物してえもんだなどと謂はれたのは僅の當座。どうも問答が怪しければ和尚も怪しいとなつた。さう謂はれて見ればどうも彼の片目の光り工合が變に不氣味だ。彼の和尚も化けるのではねえか。さう成つて來ると、やれ和尚が口の廻りを血だらけにして床の下から出て來るのを見たの、本堂の天井から骨が轉がり落ちたのと、見て來たやうな嘘が眞らしく傳えられて、日が暮れて御寺の前を通る者さへないやうに成つた。

一體化物と謂ふ物も、出つばなしでは甚だ詰らない物だと思ふ。他が怖がつたり、または強がりか退治してくれなければ、張合のないに相異なる。此意味に於て宮本武藏や岩見重太郎は化物にとつては滿更憎い人ではない。

惠林寺の僧だとも謂ふ、旅の坊主だとも謂ふ、そんな事はどうでもよい。まあ何でも膽つ

玉の据つた強い坊主だとして置けば間違ひはない。ふと此由を耳にして、怪しからぬ、それこそ正しく佛道の邪魔外道、正體を見屈けてくれやう、人間ならば可し、もし變化ならばやわか用捨のならうか、この鐵如意でたんだ一撃と、勢ひ込んで馳せ向つた。

その寺の問答なるものがまた甚だ手荒い。問答に負けた者の頭上を勝つた者が撃りつけると謂ふ規約である。最も此の位のは禪には稀しくはないが、それが辨慶をいま見るやうな荒法師ならば至極の法であるが、見らるゝ通りの枯れた片眼の爺さんとして、聊か手荒と謂はざるを得ない。それで何でも、誰も彼も其老坊主に負かされては、一撃を喰つて、それなりけりに往生して了ふのだと謂はれてゐる。問答の勝負は別として、彼の吹けば轉びさうな老和尚の腕にそれ程の怪力があらうか、それが既に怪しい。

機智に豊かでも勇氣のある其僧は、撃たれた時の用心にと、彼の鐵鉢を冠つて、——冠ると謂つてもそんな小さな頭はないからまあ乗せたのだ——その上を袈裟で包んで了つた。思ふに變てこんな格構の頭が出来あがつたことだらう。

寺に行つて案内を求めた。その片眼の考僧が出て來て問答仕つらんとの容を喜び迎へた。



直ぐさま本堂にと案内した。黄昏でもう人類も見えわかぬやうになつたので、和尚は本尊の前に御灯を點した。それは好かつたが、怪しい哉老僧が一度灯を點けるや、本堂にありと在らゆる燭臺には、誰がつけたともなく一齊に灯がついて、本堂は白晝よりも明るい程になつた。退治に行つた坊主は、はや既にさてこそと拳をかためた。畢竟化物餘りに技巧を弄しすぎた。人を呑みすぎた。

さて問答となると、殴られる用心をして行つただけあつて客僧脆くも負けた。寺法に従つて一撃撃られなければならない。痛い處ではない。事によると其儘納つて了ふのかも知れない。客僧實に恐縮したが、逃げもされない。それに忍び兜の鐵鉢もあつたので、これで受けて見ろ、もと／＼それで受ける心得であつたから、悪びれもしずに頭をさしだした。得たりや應と和尚は拳をかためて、客僧の頭上に一撃を下した。

その痛さと謂ふものは、ものに譬へやうがない。腦天からかけて足の指端まで痺れ渡つてその儘昏倒しさうになつたのを辛くも耐へた。鐵鉢を忍び兜にしてさへこれであるもの、坊主頭を素で殴らして、何で生きて歸られやう。決して人間の拳の力でない。これでもう一撃

喰はされては、鐵鉢は破れなくとも此方の腦天が粉になつて了ふ。さればと謂つて殴られ放して引退るのは如何にも心外、更に一問答すれば負けるのは見え透いてゐる。これは何でも問答は向ふに勝たせず、此方で殴らなければならないが、それには嫌が應でも問答に勝たなければならない。

客僧は即座に考へた。直ぐ追つかけて一問答かけたが、それは彼の一体が、雪隠の瓢箪粒幾子を逆に讀んだのと同じやうな、出鱈目も甚だしいものであつた。

如何に怪和尚と雖もそれは解けなかつた。解けないわけだ、當人にも解らないのだから。さも／＼口惜しさうに頭をさけた。して遣つたりと客僧は身構へなほし片膝をたて直して居合腰、エイツと氣合諸共手にした如意で殴ると見せて、如意はからりと背後に投げて、懷中に隠した戒刀の柄に手がかゝるが疾いか、真向から斬りつけた。

晝を欺く灯火一時に消えて、震動雷電。その僧は餘程剛氣の人であつたと見えて、戒刀を打振り打振り經を念じながら一夜をその飛びかゝる怪物と闘つた。

夜が明けると、本堂は血の滴りと獸の毛で狼藉を極めてゐる。血の跡をしるべに尋ねて行



くと、寺の後の山の裾の穴に入つたらしい。村の人を呼び集めて来て鐵砲を撃ち込んでから曳すり出して見れば、半面斬り裂かれた血だらけの大猫であつた。

これで庄屋の猫と片眼の坊主とは、再びこの村では見られなくなつた。

これと似よつた噂はいくらもあるが、問答をする猫と、これを退治に行く僧が殴られる用心に鐵鉢を冠つて行くのが面白い。

### 猫 魔 ケ 嶽

會津の磐梯山と並んで、少し後に、猫魔ヶ嶽と呼ばれる大きな山がある。何さま名にふさはしい見るからに猫魔でも棲みさうな凄じい山である。此山には今日でも猫魔の怪が存在してゐる。

穴澤姓を名乗る人が案内者として磐梯山に上ると、その夜にはきつと猫魔ヶ嶽の方から黒雲が襲つて来て、一夜を荒れ廻る。その昔から今日に至るまでこの不思議の怪異は、それを信

ずる人信ぜぬ人の別ちなくその前に繰擴けて見せてゐる。

何時の頃からであるか年を審かにしないが、思ふに伊達と葦名とこの山の麓で戦ひ合つた頃であらうか。磐梯の蔭口を固めてゐた會津藩の郷士に穴澤某と謂ふのがあつた。武藝の剛者で、釣魚をまたない樂としては、何日が日もその淵に糸を垂れてゐない事はなかつた。終には人がその淵を穴澤の淵と謂ふやうになつた。(その淵は今もなほ檜原湖の中に残されてゐる)。

日はとうに暮れて、もう星が見えて来た。糸も見えなくなつた暗い水を見詰て、なほも去りかねて穴澤は釣つて居た。此日はまた得物が意外にあつて、魚籠にも餘る程であつたのでまだ釣れるだらう釣れるだらうと、慾と好きとで夜に入つたのも忘れて竿を納めなかつた。山と謂はず海川と謂はず、總てこの餘り得物の有りすぎた時、もしくは全く無い時などは、もう魔につかれてゐるので、得て碌な事はない。

穴澤が我を忘れて釣つてゐると、何やら人の氣配がした。ぎよつとして振返ると、一人の姥が立つてゐて、魚籠の裡を覗いては手を入れて掻き廻してゐる。無禮をとがめると、乳母



だと謂ふ。星明りにすかして見れば、成程母のない後は母のやうに懐かしい乳母である。お尋ねしたが、釣ときいて、迎へながら参じたと謂ふ。老年の山路は難澁であらうのに、それを夜に入つて何とも氣の毒千萬、さらば歸らうと竿を納めて先に立つと、乳母は魚籠に觸つて仕方がない。手を引いてやらうと謂へば、それには及ばぬから腰につかまらせてと謂ふ。それではと魚籠を前にまわして刀の柄に結びつけると、今度は先に歩きたいと謂ふ。先に歩かせるとまた魚籠に觸つて困る。暗くはなるし足手纏ひなので背に負ふてやると、手をのばしてはまたしても魚籠の裡に手をさし入れる。乳母は丈夫な女ではあるが、夜途を手もひかれず斯う歩ける程の健康ではない。それに心得難いのは心を魚籠にばかり引かれてゐる。姥か、姥にしては腑に落ちぬ振舞であると、穴澤は心して家に歸つて來た。

釣つた魚を煮焼して夕餉を進めると、姥は箸よりも指を多く用ひて、頭から尾尾、骨までも貪り食べた。日頃の姥の殆んど三倍を食へ盡して、まだ足らぬ氣の顔をしてゐた。其癖特に馳走の心で焚いた暖かい飯には箸もつけずに、魚ばかりで食事を濟した。

穴澤は怪しむまいと思ひながらも、どうしても怪しみますにゐられなかつた。床を敷いて寝

かした。穴澤は氣を許さない。寝たふりをして様子を伺つてゐた。稍暫くすると、寝た筈の乳母はむつくり起きた。先刻の漁した魚は、豫てから漁り貯めのと一緒に、串にさしては火で焼いて、薬つとに刺して爐の上に吊してあつた。冬籠りの糧としてである。

乳母はその怪しく光る腫をもつて家内の寢息を窺つた。穴澤は一刀に手をかけながらも睡たふりを續けてゐた。乳母はのそくと床をはなれる。立つて爐の邊に行くと、飛びつくやうに其魚を掴みとつて、頭も骨も其儘に咬りはじめた。人間のすまじき淺猿しき様である。もう猶豫する場合でない。必竟變化が乳母にやつして魚を狙ひに來たに相異なる。魚に氣を奪られてゐる隙を見すまして、背から一刀に首筋を斬り込んだ。凄じい顔は血を浴びて面も向けられない。武者ぶり付いて來るやつを引ばづして、疊かけて斬りつけ斬りつけ、遂々斬り倒して了つた。斬り殺しは殺したが、依然乳母である。穴澤もさすがに顔の色を變へたが、まあ兎に角、日の出るまでと、朝をまつた。日が出ると、乳母と見えたのは、歳經た大猫であつた。穴澤は漸つと安心して屍は火にして埋めて了つた。話はこれだけでは濟まされな



穴澤の妻が湯治に行きたいと謂ひだしたので、二人して磐梯の湯に出掛けた。途中で妻は俄かに心地が悪いと謂つて、動けなくなつた。水でも湯でも呑みたいとせがんだ。穴澤は病み悩む妻を單身山上に残して、遙かの谷に水を掬みに下つた。漸くの事で掬んで来ると、妻の姿は見えない。驚いてあたりを探し求めると、遙かの杉の梢に吊さけてある。病人の妻が男さへ上れない程の高い木の上に自分で上つてぶら下る道理がない。魔物にやられて悪戯をされたのである。穴澤は地段駄踏んで口惜しがつた。

すると何處から来たともなく、凛然一人の老人の木樵が來かかつた。穴澤の困却してゐるのを見て、それでは俺がとり下してあげようと言ふ。穴澤は喜んで、何分頼むと言ふと、刀を貸してくれと言ふ。小刀をとつて貸し能へると、よほくの樵夫は目にも見えぬ程の疾さでさら／＼と上つて行つたが、刀が短かくつて枝が伐れないから長い方の刀をかせと言ふ。穴澤はそれを許さなかつた。これは俺の魂ぢや、貸す譯にはいかぬと。すると親切らしくつた樵夫は俄に凄い顔をして『俺の妻の生命をとつた恨みに汝の妻の生命を奪ふ。生々世々此の怨恨は忘れない。その刀さへ汝の手になければ、此場を去らせず汝の息の根もとめるので

あるものを、見よ見よ、この山のあらん限りは汝の孫子までも崇らすにはおかぬぞよ』——  
枝にかけた穴澤の妻の屍を啜えて、雲に乗つて飛び失せた。これが猫魔ヶ嶽と穴澤姓との因縁として今でも語り傳へられてゐる。

### 猫 の 踊 り

手拭が失なると、猫が盗つたのだらうと言ふ言葉がある。何故猫が手拭を盗るのであらうか。お湯に入る爲ではない、冠つて踊りを踊りたいからで。猫の踊りに就いては私は斯う言ふ實話をもつてゐる。

上州の安中在から私の家に下女が來てゐた。この下女の家で手拭が失くなつて仕方がない。外から盗りに入る模様もなし、と言つて家の者が盗りやう道理もない。不思議でならない。新しいのをおろせば、従つて失くなる。けれど誰が盗るのか解らない。一夜の中に家中の手拭が失くなる事なぞある。泥棒にしては手拭ばかり盗ると言ふのが不審である。何が何



やら正體が解らなかつた。

或る日暮に老婆が臺所から、何の氣なしに納戸を見やつた。納戸の腰屏風には誰かの手拭が掛けてあつた。それを今しも飼猫のごろが前肢でかき下して、一寸と頭にのせたものだ。そして前肢でひよいと立つて、よいくと二歩三歩歩いた。それが恰度踊るやうに見えた。

老婆驚くまい事か、畜生ツと謂ふなり持つてゐた物を投げつけた。猫は投げつけられながら敢て逃げようとしなかつた。昵と老婆の方を見つめてゐるが、靜かにのそくと外へ出て行つた。

それぎり其猫は姿を見せなくなつた。

もう一話斯う云ふのががある。これは有名な話であるが。

淀の清義院の住持が(天和の三年の夏)痢病を病つた。ある晩に便所へ行く。すると其時椽の切戸を叩いた者があつた。誰ぢやなと思つたが、便所で返事をするような賤ない人ではないから、黙つてゐた。出て来て居間の方を見ると、七八年ほど飼つてゐる猫が、火燵の上に

寝てゐるのが、のつそり下りて来て、切戸から一匹の大猫を誘ひ入れた。共にまた火燵の上に乗つて温りながら、外から来た猫が謂ふ。『今夜は納屋町に踊りがある、迎へに来た、行かぬか』と。寺の猫は残念さうな顔をして、『さうか、それは近頃残り多い事ぢや、生憎和尚さまが此頃病氣ぢやで、お寂しいからお伽をしなければ成らぬ、今夜は行かれぬ、折角ぢやが』。客の猫は、『それは氣の毒千萬ぢや、ではまたにせい、手拭をかしてくれぬか、踊りに手拭がなくては、踊りが出来きぬ』和尚さまが御病氣なので、手拭はみなふさがつてゐる、氣の毒ぢやが用に立ぬわ、『はてさて重ね重ねぢや、まあ和尚さまを大切にさつしやれ』。誘ひに来た猫は歸つて行つた。

住持は呼吸をひそめて見聞してゐるが、やがて居間に入られて、『私の相手はせずとも大事でない、誘ひに来た場へ行って好い、手拭もかしてやるぞよ』と頭を撫でると、猫は悄然として出て行つた儘、再び歸つて來なかつた。

斯うした形式の話はいくらも遺されてゐる。猫が踊りを踊る爲めに手拭をとる。一寸思ふと、猫の踊りは茶氣があつて嬉しくなるが、あの寺の廣庭や墓原などで、手拭を吹流しにの



せて踊つてゐるのを想像すると、今までの滑稽味は跡形もなく消えて、肌に粟を生じずにはゐられない。

### 猫の 人語

前述の清養院の猫でも、猫が人の聲をだして話をした事を述べたが、あれは、踊りが目的であつたから今度は人語ばかりを一寸かいて見る。

江戸は本所の割下水に屋敷を構へてゐた旗下の石川八郎と謂ふのが、十二月の或る夜妻女と火燵に温りながら、『生れる兒は女かな、男かな』と謂ふと、妻女君は困りぬいた顔をして『産婆は男だと申しますが、どうもお腹の工合が、突ださずに、斯う横に廣がるのは女らしいと母が申して居りました』と、答へた。主人は今更ら失望したらしい顔をして、『身共もはや四十ぢや、成らう事ならば男子がほしいものぢやが、女子かのう。』妻女はそれでも慰め顔に『生れて見なければ解りませんが、これは神業で御座りますから、仕方が御座いません』と

いふ。するとその火燵の櫓には年頃日頃飼ひ馴した猫が温つてゐたが、明瞭『男だ』と云つた。妻女は氣絶すべきが當然であるが、餘程氣丈の婦人であつたと見えて、聲をもださずに身人の背後に逃れたと謂ふ。八郎もまた膽のすわつた人であつたか、膝も崩さずに昵と猫を見つめたばかりであつたと謂ふ。小刀の柄に手をかけなかつたのは謂ふまでもない。これが普通の男なら大聲をだして斬り付けるに相異なる。

四五日して主人は、この猫を知行所の田舎の寺へ、一生飼ひ殺しにしてくれるようにと金子を添へて、預けて了つた。

これが氣の利いた扱ひである。既に人語をなす怪猫である。此儘おいては、一家の爲に、後々如何なる災禍を起さないと限らない。さればと謂つて、一命を絶つては、それこそ怨靈の程が恐しい。寺へ預けて餘生を終らせるのは、最も善き感化の裡に終りをとらしむる良策である。猫は其儘歸つても來なかつた。

猫がものを謂つた計りなら他に類もあるが、一層氣味の悪いのは、その猫が胎内の兒を見とほしたそれである。果然、産れた兒は男子であつた。



その猫は八郎の母の代から飼はれた、十六七年もたつた老猫であつた。

もう一話のは甚だ短い、ものを謂つた場合が芝の増上寺の脇寺の徳水院で、猫が梁の上で鼠を追ひ廻して居た中に、足をすべらして梁から落ちた。途端に『南無三寶』、これは前述の暗示的なとは反対で、突發的の、思はず知らずの面白さがある。人の聲で、大きな聲であつたと傳へられてゐる。

金 花 猫

加茂明成の侍に平田庄五郎と謂ふ知行五百石の者があつた。その母が猫を可愛がつた。この老母に初まつた話ではないが、どうも老婆の猫を可愛がるのは面白くない結果を見るのが多い。自分の蒲團に臥さし自分の食物を分け與へて、自分の孫や子よりも可愛がつてやりながら、何時か自分と謂ふ者は白骨になつて床下に轉されて、猫が御隠居さまに成り濟して御馳走を喰べてゐる。あれこれと指を折つては際限がない程其例は數多くある。平田の老母も

其仲間、猫を可愛がる事孫子よりも勝つてゐる。その猫と謂ふのは或る年諏訪の神社にお詣りした歸途に、閻魔堂の松原で拾つた赤毛の猫である。するとその猫が何時ともなしに行方不明になつた。その頃から老母は目を病ひ初めて、明るい所を嫌つて晝でも隠居所の戸を閉めさせ、その上にまた屏風までも立させる。庄五郎が目醫者を招ぼうとすると、老母は怒るやうにして招ばせない。庄五郎は老人の事であるから、謂ふなり次第に任せておいた。

老母の側使の女が二人迄行衛知れずになつた。八方向方を尋ねても皆暮知れない。

或時下男が裏の畑を打つてゐると、土の裡に着物の裾が見えた。不思議に思つて掘りかへして見ると、行方知れずになつた二人の女の物着であつた。血塗れになつて、寸々に喰裂れてある。なほ掘つて見ると、喰ひ荒した二人の屍が出た。吃驚仰天してその着物をもつて主人の許に馳け付けやうとする處を、老母が見つけて着物をもぎ奪り『他に謂ふたが最後、おのれの命はないぞ』と一睨みに睨みつけられ、下男はぺた／＼と腰をぬかして了つた。下男は怖さ恐しさに居耐らず、二三日の中に假病構へて田舎へ逃げ歸つた。

その下男の口から洩れたのではあるまいが、誰謂ふとなく平田の隠居は化猫ぢやと謂ふ噂



が専らになつた。情けない哉庄五郎はまだそれを知らない。

隣屋敷の梶川市之丞と謂ふのが、或日曉かけて遠乗に出ようとして、ふと表を見ると、平田の屋敷の門を跳り越えて出て来た者がある。見ると平田の老母ではないか。老人の足腰も不自由なのに、さても不審の疾術と怪みながら、なほ凝視すると、口からかけて半面を血みどろ、人を喰つた鬼のやうなのが、四邊に氣を配つて前の小川で口を濺いでゐる。怯として覺えず刀に手をかけた時、黒犬が飛んで来て老母の左の腕に咬みついた。老母は犬を振りはずして再び高塀を跳ね越えて屋敷へ隠れた。犬は狂犬のやうになつて塀に飛びついては、逸したのを口惜がつて鳴き立てた。

梶川は、さては噂も實であつたかと、その夜に庄五郎を招び迎へ、今朝の怪事の有様を物語つた。庄五郎も思ひ當らぬでもなかつたが、まさかにと疑うてゐたのも、今は疑ふ餘地がない。思へば母者の此頃の怪しさ、日の光りを嫌ひ、熱かい飯を食べず、魚は骨までも食ひ喰ふ。常々に後生願ひの朝夕佛壇に手を合せぬ日とはなかつたのを、去年の夏からは香花も手向けぬ。我に逢ふさへ避け勝ちである。逢ふとも正面に顔を會すことを嫌つて、やゝと

もすれば落着かぬ。借は彼の赤猫の行方知れずになつたのは、母を喰ひ殺して母と化けたのか、さらばと逸物の大犬四五疋をもつて不意にその寢所を襲はせた。

犬は火の玉のやうに飛び付いて、手足腰腹と唾みつく。老母は俄然正體を現した。犬ほどの赤猫となつて四五頭の猛犬を敵として暫しは戦つたが、不意を襲はれた最初の深傷に終に唾み殺された。

赤毛の猫は金花猫と謂つて、年久敷くは飼はぬものと厭はれてゐる。

## 名 刀

下總古河の城主が國光の脇差を秘藏してゐられた。

ある夜の夢に、城主の枕頭に白髯の翁が現はれた。『明夜變化あつて公を惱すべし、我常常に秘められて、公の御側にあらざる故に怪物公を覗ふなり、我を用ひて退治し賜はれ、我は國光の靈なり』と見る中に夢はさめた。



城主は明朝納戸の者を召されて、國光の脇差を取寄せられた。夢の告の奈何なるべきと、引つけて夜を待った。

既にその夜も人定の鐘をきく頃、青ざめた大女が障子をあけて城主の寢所に覗ひよつた。飛びかゝらんとするを見すまして、眠ると見せた城主は國光の脇差抜き討ちざまに斬りつけた。悲鳴を後に風のやうに障子蹴破つて逃れて、行く處を知らぬ。

夜明けて血をたよりに探し求めると、堀の石垣の穴に大猫が斬りつけられて死んでゐた。

### 断弦の怪

出羽の國庄内から四五里の在所に、酒井家の浪人が佗居してゐた。此人は弓術の奥秘を極めた人で百發百中の妙を備へてゐた。志ある士は遠きを厭はず來り學んだ。此人の楽しみは狩で、暇ある毎に弓箭を携へては山野を狩暮し、鳥獸を射ては無上の慰みとしてゐた。此箭に規はれては鳥でも獸でも、一羽一頭として生命を全うし得たのではないと謂はれてゐた。

或る日狐の穴窟を見つけた。追ひ出さなければ成らぬ。青葉を積み重ねて穴の口に燃した。煙は斜めに穴の裡に吹き入つた。狐は耐まらなくなつて飛び出した。三疋の子狐は苦もなく箭を負うて倒れた。親は居ないのか、出て來なかつた。

その夜は勞れに餘念もなく寢入つた。夜半とも覺しき頃、ゆり起された。妻女は戦く聲にあれを、あれを、と指さしながら叫ぶ。枕からはなれて其方を見ると、座敷の隅に三尺ばかりの女の首、鐵槩黒々につけた口をあいて笑つてゐる。主人の身を起したのを見て近付かうとする。主人はかかる化怪に膽を冷す如き意氣地なではない。飛び起きて床に立掛けてある弓をとつた。ひつ摺んだ箭を番へようとする、怪し、弦はぶつつりと断れてゐる。投げ捨てて備への二の弓をとると、奇怪、これも弦が断れてゐる。有繋に主人も度を失うた。奈何はせんと立ち縮んだのを、生首は得たりと近よらうとする。主人も今は絶體である。弓なけつけて枕刀をとらうとした時、妻女は氣性の勝つた勇と智のある女であつたと見えて、早速氣轉に火桶をなげた。冬の事であるから火がした、かあつたのが、八方に散亂した。

その火と灰煙に恐れてか、女の生首は消えてなくなつた。その灰の中には獸の足跡が入り



亂れてゐて、毛の焼けた臭がしてゐた。

主人は狐狸の業と見た。けれど腑に落ちぬ事がある。もし今日射殺した狐の、親子兄弟の怨みとすると、狐は生來疑心深い獣であるから、迂濶には人間に近よらない。まして弓術の恐るべきを所つてゐるから、忍び入つて弦を断るなど謂ふ事は狐には出来ない。けれど弓の弦は二張が二張とも、咬み切つたものとしか思はれない。且また怪しむべきは灰に残した足跡である。それは一種類でない。足の裏の、肉豊かなのと、瘦たのがある。仇をしに忍び入つた獣は同じ獣でない。假りに一方を狐とすると、他の足跡は何であらう。主人は思ひ惑うた。惑うてゐる中に、ふと猫ではないかと胸に浮んだ。

その住居には一疋白猫が飼はれてゐた。子のない妻女には見のように可愛がられてゐた。騒ぎが静まつて妻女は氣がついた。何時の夜も夜着の裾に寝てゐる猫が見えない。呼んで見た。來ない。灯を舉げて家中を探し廻つた。見えない。夜が明けた。その日もその次ぎの日も、三日四日猫は姿を見せなかつた。けれど主人も妻女も、自宅の猫を怪しみはしなかつた。どうしたのだらうと噂してゐた。

主人が或る日庭に立つて巻薬を射てゐた。射果てて椽で一服しようとした。椽の下から此方を覗ふものがある。行方が四五日知れずゐるた自宅の猫ではないか。それならば格別事件ではないが、その背には大きな火傷の痕がある。その他に毛の焼けた個所が少からずある。主人の胸にはその火傷の因が讀まれた。

氣の付かぬ振りをして、引返して巻薬から一筋の箭をぬきとつた。向き直ると齊しく引絞つた。逃げられさうなものだが、そこが武術の精妙であらう。猫は釘づけにされたやうに動けなくなつた。眞向から尻尾かけて稽古矢でありながら美事に射貫いた。

浪人は猫に弦を咬み切られたのを耻辱として、それきり弓の師範をやめて了つた。

## 猫の行

筑前の國の鞍手郡あたりでは、飼猫が大きくなるときつと一度は姿を隠す。二度も三度も隠すのもある。三十日から六七十日も姿を見せない。これは、こゝから五十里もある肥後の



國の猫岳(根子岳)へ行をしに行くのだ。そこには多くの猫が集つて行をする。行から歸つて來るともう普通の猫でない。行に行かない猫は殆んどない。山から歸つて來た猫はけつそり瘦せてゐる。どの猫も耳が裂けてゐる。耳のさけた猫のそばには稚兒は決して寝かさない。もし猫の尾がその身の長さほどにもなると、化ると謂つて怖がられてゐる。

### 浅間ヶ嶽の猫

猫の嘶がでると私はきつとこの話を思ひ出さずにはゐない。母はよくこの話を嘶してくれだ。これにつけても親は子供に、出来るだけ話をして置たいものだと思ふ。親の亡い後で、その命日は忘れても、何かにつけて稚い時に話して聽かされた話は思ひだす。父は餘り話をしてくれなかつた。それにまた話の類を知つてゐなかつたらしい。何時も狼の話ばかりだつた。怖いから此方から願ひさけにした。母はいろんな話を知つてゐた。釋迦八相、妙々車、八犬傳、紅血缺血、これもその一つだが、またかと思ひながらも我儘を謂ふと話してくれな

いから其儘音なく聞いたのだ。寂しい寂しい山寺の灯ともし頃、一人の旅の坊さんが泊めてくれと尋ねて來た。寺には年老つた住持と、これも年老つた猫とがゐた。泊めてやつて本堂にねかせた。いや話が前後したが、その前の晩に住持が夢を見た。自分の永年可愛がつてゐる猫が、枕頭に来てちやんと口をきいた。永々御世話下さいましたが、私も永々御別れをしなければ成らなくなりました。明日の日暮に一人の旅僧が一夜の宿りを求めます。宿を御貸ししなければ何事も御座るませんが、そこが何事も運で御座ります。あなたは御泊めなさいませ。けれど決して、忘れても庫裡に寝かしてはいけません。本堂へ寝かして下さい。四方の戸閉りを嚴重にして、一寸でも隙間があつては大變です。その前に私を御本尊さまの後に隠して下さいませ。あなたは覗いて見たりしてはいけません。一心に御經を誦んでゐて下さい。あなたが一生の大難なのですから、どうぞ私の申しました通りになすつて下さいませ。と謂ふかと思ふと、夢はさめた。猫が枕もとにゐて、しよんほりとしてゐる。夜は明け、日は暮れて、そこともなく薄ら暗くなると、どこから來たか一人の旅僧が尋ねて來て泊めてくれと謂ふ。人のよい老僧はことほるにも斷りかね、宿をゆるす。粟の御飯を一所に食



べて、炬の火に暖りながら四方山の話をした。その儘そこに寝やうとした時、ふと猫が夢にいつた事に気がついて、無理矢理に本堂に寝かした。猫はと見ると、どこに行つたか姿が見えない。何事が起るか、寝もやらず、一心に佛さまを念じて御經を誦へてみると、やがてその夜も丑滿つ頃となつた。俄かに本堂では崩れるやうな物の響き、何か大きな獣が、かけづり廻り、追はれ、追ひかけ、啞み合ひ、掻き合ひ、命の限りに闘つてゐるらしい氣配が手にとるやうに聽える。一刻、二刻、次第にその物音も幽かになると、東の空が明るくなりかかつた。こはごはながら戸を開けて見ると、犬ほどもある大鼠と、お寺の猫とが、啞み合ひ、掻き合ひ、血だらけに成つて死んでゐた。鼠が坊さんに化けて住持を食べに來たのを、日頃の御恩返しに猫が身替りになつたのだ。その鼠の四つ足を脚にした經机が今だにそのお寺に、寶物としてあるさうだよと、母は話して聽かせたが、さてそのお寺はどこにあるのか、唯淺間ヶ嶽の長樂寺とばかり、國も所もわからない。淺間ヶ嶽といへば、彼の信濃のであらうか、位に考へてゐた。

私はこの話を、それからそれと五人の子供に話して聽かせた。私がるなくなつてから、ど

の大人がこの話を忘れずに想ひだすだらう。それは私には判らない。

## 歸らぬ猫

猫の話も、私が一番氣に入つてゐて、一番こわがつてゐる話で纏りをつける。

これも母の形見の話——

昔とばかり、何時頃かてんで時代はわからない。とに角幕府盛んの頃と思へば間違ひはない。江戸は深川永代寺門前に、とある荒物屋があつた。その老婆がわづらつてゐた。店の次ぎの間に臥てゐると、年頃飼つてゐる猫が床のわきに來ては、昵と病人の顔を見詰めてゐる。人がゐても、ゐなくつても、さうだ。病人は氣味を惡がつて、氣にしては、追つておくれ、追つておくれと、口でも謂へば、手真似でも頼む。家の者もまた氣味をわるがつて、見つけ次第に追つばらふ。厭な猫だ、厭な猫だ、病氣が癒つたら私が捨に行く、捨ててくると病人は口僻のやうに呟いてゐた。どうかと思つた病人は何時となしに快くなつて、床を上げ



た。ぶら／＼歩けるやうになつてから、家の者がまだ遠くへ行くのは危いととめるのを、無理に、その猫を籠に入れて風呂敷で包んで、杖をついてとほ／＼と、どこかへ捨てに行つた。それつきり、いくら経つても歸つて來なかつた。捨てに行つたお婆さんも、捨てられに行つた猫も、それつきり歸つて來なかつた。

## 灯 の 占

私は心から灯を禮讃する。

黎明神前の御灯、黄昏拂前の燈明、それは誰しも有り難たさうだと謂ふ。尊けな光りだと云ふ。私はそれ以上に、その各々に姿を見だし、言葉をきき、生命を認める。然し私の至らない悲しさには、その姿を先づ見だし、次ぎに何か叫くを見る。(敢て聴くとは謂へない)。最後にそれに生命のあるのを發見しても、その言葉を一言も解することが出來ない。未來永劫、人間の悲しさには聴き分ることが出來ないに決つてゐる。唇の動くを見て言葉を解き得られぬ。何と謂ふ悲しい事であらう。

けれど私は茲に、その灯の叫きが聲とならずに形となる、その機會を捉へる法を知つてゐる



る。いや形などと、素氣ない、勿體ない事を謂はずに、繪となると謂ふのが眞實である。私の母は江戸の産れで、その母も、そのまた母も江戸の人、さうした故もあらうか、母はいろいろ禁厭のやうな事を知つてゐた。いまこゝに話して見たい一話は、禁厭などと、そんな軽々しい氣安めの一件ではない。法と謂ふのが當つてゐる。けれど此法たる、世間の所謂法と異ひ、あれ程窮屈なものではない。誰にも出来るからである。但、信する者に限つて。

## 寅 待

寅待と唱へる。御承知の方もあらうが、暫しの御體屈を御忍び戴きたい。

この寅待なるものが、果して何國の特有であるか私は今日までも知らない。元來が江戸のものでないのは明かである。これは私の推察だが、何うも西國のものではなからうか、と思はれる。

母は御狂言師、これは日頃は踊りの御師匠さん、何しろ子女の教育は寺子屋かぎり、娘は

それから遊藝に浮身をやつす、當人ばかりでない、一家をあけてそれに夢中になる時代。然し踊りは唄や三味線と異つて物入が夥しい。御師匠さんに特別に目をかけて貰はう、可愛がつて貰はうと思へば、またそれだけの着け届をしなければならぬ。従つてなま優しい金では、娘もお袋も涼しい顔をしてゐられない。普通では出来ないのが踊りの稽古とされてゐた。まして諸大名の奥へ御狂言の御召を受給つてゐる大師匠となると更に費用が大きい。母は日本橋の箔屋町、いまの川崎銀行のあたり、左が相政、即ち相摸屋政五郎、右がろ組の丑右衛門。藤間らく、とはその母の名。四年の中に三度貰ひ火で焼けて、だまつて懐中手をしてゐれば、お弟子さん達が家も土蔵も立ててくれた。嘘ぢやない。お弟子の多くは深川の木場の大問屋、御手前の材木をどしく運んで来て、諸入費持よりで立ててくれる。朝晩の惣菜は魚河岸、大根河岸、衣、食、住、總ては他力で豊かに暮して行かれた。……話が少し經濟に立入すぎたが、何しろそれく御出入の御屋敷があつて、その時には御親類や御近づきの御大名お旗本、この御馳走や諸費用が大したもの。芝居と唐茄子とおさつは、これなくては生きて行かれぬ女子の必要具、唐茄子とお薩は御屋敷でも間に合ふが、間に合はないのは



お芝居である。然しこれは甚だ危険物、江島騒動をそこ、で繰返されては、家事不取締として公義にも他家へも外聞甚だ良しからぬ、と謂つて見たい物はやつぱり見たい。見せなければ尙の事見たい。そこでその危険から遠ざかつて満足させる、この必要に迫られてお狂言師が生れ、且盛んになつたのであつた。女なら奥女中と騒動を起す憂ひはない。

斯うした春や秋を送つてゐる中に、國々それ々の御大名の奥の方から、各種の嘶をきかされた。各種の禁厭を教えられた。いま話さうとする寅待もその一つである。

寅の年寅の月寅の日寅の刻、と謂ふけれども、寅の年までは待つてゐられないから、寅の月ならよとしてある。假りに今日を、寅の月の寅の日とすると、その前夜の卯の日の亥の刻から、五體を淨め髪を洗ひ、それを結ばずに背後にさけて、白の衣服、八疊の間の、四方這入りと唱へる、つまり東西南北、四方のどこからでも入つて、どこからでも出て行かれる座敷、その四方を閉めきつて、事の濟むまでは人の出入は愚か、襖一枚あけても寅待は成就しない。外からは他の覗ふをゆるさず、内からは不淨に立つても、事は破れる。全く人界と斷きつた、寂寞たる一世界を形づくる。その座敷に入つて、白装束に洗ひ髪の方がたつた

一人、寅の方へ一面の銅鏡を置く。これも洗ひ淨めたものでなければならぬ。その前に一本燈心の灯が一臺。この座敷には道具としては、これだけしか許されない。いくらお奥で威張つてゐる人でも、敷物などは以ての外。さてその前に正座した女は、(この場合その女に、月の障りがあつては何の甲斐もない)、灯に禮拜合掌して、自分の身の成行を御示しあらん事を祈願する。この祈願の目的物が、神でも佛でもないのが面白い。目的物は一種の灯である。斯る時灯は、如何の色に輝くであらうか。如何の姿を顯すであらうか。更らにまた如何の言葉を叫んであらうか。

念じ終つて灯は右に置きかへられる。鏡に直面した女は、息をも吐かずに鏡に映る己が顔を見つめる。既にして御殿の夜は更けて、四つの御拍子木が長い長い御廊下の彼方に、夢の寢音のやうに聞えて行く。

時は移る。亥の下刻もすぎて、子の刻、丑の刻、俗に唱ふ草木も眠る丑滿時、家の棟が三寸さがるとさへ謂ふ、その時刻に、唯さへ氣味のわるいお大名の廣い御屋敷、一本燈心の薄暗い光をたよりに、鏡に映る己が顔を見てゐるのは、白装束にちらし髪、そのものが既に先



づ自分を驚かす。鏡といふ器は、白晝でも永く見てみると、自分で自分の顔を見てゐてさへ氣味がわるくなるもの、まして夜である、丑滿の刻である。これはたしかに氣丈の女でなければ辛抱のしかねる業である。

漸くにして寅、即ち寅の一點。

この時、その鏡に、映るものがある。それがこの女の一生の運である、と謂ふ。

その一話、……壘の前の女

明石さまの歌路さまとだけ、何でもお奥では飛ぶ鳥を落すお役であつたと私は記憶してゐる。(これ計りではない、どの話にも役名を忘れてゐるのは、話そのものに興味を引かれて、まだ子供であつた私は、役の名などはどうでも可いに聴いてゐたからである。肝腎の私から進んで母に話して貰ひたくなつた時には、母は大層耳が遠くなつてゐた)。この方がもう三十をすぎたので、斯うした別の世界に寢起してゐても、徐々身の落つく先も考へて見るようになつた。そこで寅待にこれを聴かうと思ひ立つた。(よく普運の家には四方ばりはある、便利

なのでよく作る。作る氣もなく、繪圖をひいてゐると、自然出來やすひもの。一般の家では玄關や茶の間に多い。玄關なら、入口と臺所と右に折れて奥、左は他の部屋、斯うした調子で至極便利だ。けれど家相としてはまた至極の凶相とされてゐる。病人が絶えないとか、死ぬまじき主人が死ぬとか、仕事が行かぬとか、その人の運によつて各々の異こそあれ凶たることはまぬがれない。お大名のお屋敷では、次の間などには得てこれが多い。然し前にも御話したやうに、これが人に知られては、その驗がない。でなくとも、人の事と謂へば、二つの耳を四つにしても聴きたがる奥女中、この寅の日に寅待がある、それは何々の歌路さまと知れると、一晩や二晩はまんじりともせず、壁の裡にでも立ちあかさうの彌次がざら一面、押すな押すなである。四方ばりの部屋が首尾よく手に入つても、他に知られずに行ふのが難しい。それでもこの歌路さまは餘程氣強ひ方であつたと見え、その前の日から召使ひに宿下りをさして、髪を洗ふや、その部屋の仕度や、灯の用意、何や彼と他に氣づかれぬやうに爲るには氣づかひも一通りでない。幾度かびく／＼しながら、漸つとの思ひで灯を念じて鏡に向つた。



さてその寅の刻、鏡に影がさした。

判じやうによつて、その影は吉にも見え凶にも見える。けれど先づ十人の九人までは、これを凶と判じて了ふのが至當なのであつた。歌路さまもそれを氣に病んだ。他に打あけて相談のできる事でなし。何とかして此災運から脱れられるやうにと、観音さまに一身を打込んで祈り頼入りまらせた。それからは一入行常を慎んで、慈悲善根につとめた。鏡に教えられたやうな身の上に落ちて行かないやうにと、それ計りを一心に祈つた。

三四年して下つて縁づいた。それは大きな菓子屋であつた。こゝでも身を慎んで、夫には心から仕へ、奉公人をも心から目をかけた。然しその夫と謂ふのが、申しやうもない呑んだくれで、ほろつ買ひで、箸にも棒にもかからない。歌路さまも、こゝが辛抱の仕處と涙をのんで暮したが、さて無い縁は仕方のないもの、遂々不縁となつた。

暫くして、再びかた付いたのは、大きな疊屋。茲に至つて歌路さまは、夢から覺めたやうに永年の謎が解けた。

朝から寝るまで、寝てまでも、観音さまにお願いした、彼の寅待のまほろしのやうに身の

落ちて行かないやう、念じ祈つた。その愚かしさをつくづく感じずにはゐられない。観音さまはとくに御存知の筈、さぞ苦笑なされた事であらう。

吉であつた寅待の姿を、心が至らないとは謂へ凶と思ひ誤つてゐたのだ。歌路は重荷を背負されてゐたのが、一時に肩がぬけたやうに軽くなると、全身のどこもかもこそばゆさに惱まされた。

鏡に映つた身の行末、疊を山のやうに積重ねた前に、女が一人、着物はわからないが、顔や姿は確かに自分。……なほよく見定めやうとする間もなひ、その影は煙のやうに消えた。一番鶏の聲。

その頃の人として、疊を山とつんでその前にゐるのは、御牢内の有様。歌路さまはそのまほろしを一本調子にそれと思ひ決めて了つた。

牢に入らないやうに、悪い事をしないやうにと、行常を慎んだ。観音さまにも御願した。それが疊屋のおかみさんになる謎とは。



その二話……薦を着た女

これは今戸の伊達さまの、やつぱり上の役の方、岩瀬さまと仰有るのが、この方も身の落つく先を見たくて、その頃流行る寅待と思ひつひたが、誰しも人に知られないやうにやるので行りにくひ。二度ほどやり損じて、三度目に漸つと行ると、見るものに事を缺いて、薦をかぶつてゐる自分を見た。これは氣にもならう。薦を着るとは、どう最負目に見ても、乞食非人としか考へられない。どう考へなほしても、考へなほせない。惱みぬいた揚句、勿體ないとは知りながら、もう一度伺つて見る事と臍をきめた。即ち寅待のやり直しである。やると、またぞろ、今度はまざくと、目の前に大きく自分が薦を着た姿。肩からかけて腰まで餘りの不氣味さに岩瀬さまは、忽ち灯を吹き消して外に轉けでて了つた、と聞く。

勿論、この騒ぎで、岩瀬さまが寅待を遊ばした、と取沙汰はお屋敷一面の評判となつた。何を御見なされましたと、親切らしくお爲ごかしに問ひよるが、如何に凶い夢は人に話すものとしてあつても、薦を着てゐたとどうして打開けられよう。何ともつかずに胡魔化して、

打すぎた。

寅待は他に知られては何の驗もない、と謂ふのは行らない前の事。一度自分の姿を見たからは、他に打あげたとてそれが帖消しになるものではない。それに打あげて幾分なりとも自分の氣の薄らぐなら、帖消しにならなくとも、話す方が氣休めになるから、さしつかへない限りに話したいが、薦の一條では、何分にも他に洩しかねる。謂ひたい事を謂はずにゐるは腹ふくる、原とやら、それを氣病みに病んで、遂々岩瀬さまは病ひの床についた。何がさて斯う謂ふ、筋のわからない病氣はお醫者の匙ではなほらない。看病も薬も何の效があらう。お可憐さうに岩瀬さまは、遂々お亡りになつた。

想ふに、さだめし、夢にも薦を着た自分を、覺めても、天井や襖に、薦を着た自分を、つまりその薦を着た自分の姿に、おびえ、戦き、惱まれて、身も魂も亡ほされたので。

話はこれだけの方が好い。これで話になつてゐる。けれどこれぎりでは、私が母にすまない。と謂ふのは、母はそれからの岩瀬さまを話したからである。

野邊の送りの仕度何や彼や、生靈とも死靈ともつかぬ怪しの影にさいなみ殺された人の骸



は、白い汚れのない清浄の佛衣に包れて、茲に初めて安心の眼を閉じた。もう金輪際、見やうと願つても彼の厭な姿を見られはしない。お薦を身につけずに死なれた悦しさ、この佛さまにはこれに越すの欣びはない。見よ、今は、白無垢の淨衣を纏ふてゐるではないか。

行列はお寺の近くに來た。其時お寺の門は、家根にどこか損じでも出來たと見えて、職人があがつて仕事をしてゐた。何や彼やの道具がのつてゐた。

行列は今しもその下にさしかかつた。その途端、風もないのに、ばさりと、もの音。駕籠の上に落ち冠さつたものがある。——彼これ齊しく、驚いて見ると、薦が一枚。

負債はどこ迄も、死んでまでも負はなければならぬものと見える。

然しこれでは餘り話を通りすぎてゐる。出來すぎてゐる。薦を厭がつて氣病みになつて亡くなつた。それで澤山であるのに、斯う迄も因果をつけて來なければ、昔の人、特に江戸の人は得心が行かなかつたものか。更らにまた御殿女中などの、疑り深い者には、これではければ話の効力がなかつたのか、とは謂へ私は、何もこの駕籠に薦の結末を、絶體に排けるのではない。母に聽かされた時から久しくは、その儘に受入れてゐたが、何時とはなしに前

段だけで結構のやうに思はれて來たのだ。私としては兎に角亡母の言葉をその儘にして置きたい。無理にせがんでして戴いた話の、腰を折るのが既に失禮千萬、それを胴斬りに爲るに至つては餘りに自儘勝手すぎる。されば此話は、皆さんの御思召によつて、御心まかせに願ひたい。半分でおよしに成るとも、終ひまで御ききに成るとも、どうぞ御自由に。

### その三話……消された灯

もう一話。この話は母もうろ覚え、いやうろ覚えと謂ふよりも、うろ覚えの人から受賣されたのらしい。

これも或るお大名の御奥の方。この方もつくづく寅待の必要を感じたと見えて、例の如くその實行者が嘗る苦勞を同じく嘗めて、漸つとその灯に對した。既にして夜も更けて、丑滿とも覺しき頃、何事ぞ、ふつと、宛然人が吹く呼吸の如き物の氣配、と齊しく大切の大切の此際生命よりも大切な件の灯が消えた。消えたと謂ふよりか、吹つ消された。この場合、女である以上、あつとかきあとかあるべきものを、この女餘程のいたたか者か、それともつむ



じ曲りか、もう今夜はいけないと知つて、騒がず。静かに、無言の中に、側の雪洞に灯をすつてつけ、その儘その座敷を出てしまつたさうな。それでもまだ寅待は止ぬられないと見え、つぎの月にまた取かかつた。すると、これはまた何とした事か、かれこれ同じ刻限に、またふつと呼吸の氣配がした、と思ふ間も聴いた間もない。齊しく灯は吹つ消された。それでもその女は、聲も立てずに座を立つたと聞く。茲に至つて思ふ。この寅待を司るの神、善か悪かは知らず、餘程この女性が御氣に召さぬと見える。二度ある事は三度の假令、もう一度この通りの目に逢ふのかも知れないと思ひながらも、三度目の正直と謂ふ事もあるから、また何かお示しがあるかも知れないとの慾も手傳つて、或ひはまた斯うした女の片意地からか、また次の月の寅の日にかけて、その前夜から仕度をした。隙間も風風のせいかと思ふたのであらう、時は十二月であつたさうな。此度こそは消されまい、消させまいと、戸じまり襖の合せ目、充分に心に心して、圍ふに六尺の大屏風をもつてした。さて今夜こそは、今度こそはと、流石にその女も眞劍。時は次第に迫つて行く。やがての事、例の、ふつと呼吸の氣配のしさうな時刻になつたかなと思ふ途端、耳を撃たれた程の凄じい音がした。はつと魂

を冷して、その女は我にもあらず我が顔を手に掩ふた。驚いたのではない、その凄じい物音に驚いたのではない。自分の顔がまつ二つに裂けて落ちた。然かく見、然かく感じたから、我にもあらず手を顔にあてたので、掌の當り掌の觸るところ、顔は裂けてゐない。顔は満足だ。傷もない、怪我もない。何うした事だらう、不審は晴れないながら、掌を放した。灯はついてゐた。嬉しや灯は消えずにゐる。ほつと胸をなぜながら、安心の瞳を鏡に向けると、鏡がない。その眼を落した疊の上に、鏡は縦まつ二つに、瓜を裂いたやうに破れて落ち散つてゐた。

無論この話にも結末があるのだらう。いやあるに相異なる、と見て差つかへない。けれども幸ひな事には母はそれを知つてゐなかつた。聴かされなかつたのであらう。この話は根つきり葉つきりこれつきり、御世辭にも義理にも、それから先は知らないから話せない。最後にその奥女中の顔が、瓜を裂くやうにまつ二つに裂けたか、或ひはまた涼しい顔をして安樂な終りを遂げ得たか、それは聊かも私の心配してゐる事ではないが、面白い話だと思つてゐる。



寅待はこの位にして置く。亡母から聽されたのはまだ三つや四つはあつたが、結局同じやうなものであるから、此位にして置く。

## 夫 さ が し

次手ながらまだ一つ、これは何と謂ふのか母もその名を知つてゐなかつた。これも奥女中の間に内密に行はれたもので、四疊半でも八疊でも、とに角まつ四角な間を要するのだが、二疊では餘りに狭すぎるし、人が四人も集るのであるから八疊を重に使つたらしい。これを行ふにも日があるのださうだが、巳の日か午の日か亥の日か、忘れられた儘話し聽されたのだから、その日は知つてゐない。さてその座敷の中央に、青竹三本で組んだ燭臺を立てる。結ぶに生麻をもつてして、これに女性の(その占にたづさわる女性の)或る隠し所のものを、一人一根づつなひませて、左よりによつて結ぶ。(こま結びの事)油皿には油を、丁度丑滿に油が盡きて消えるやうに見計つてさして置く。燈心が四筋座敷の四隅に向けて灯をつける。

この灯に向ひ合はせに、占はんとする女性が四隅に座を占る。(四人に限られてゐる、三人でも五人でも占の法にかけると稱されてゐる)。この間に入つたが最後、一言も言葉をきいてはならない。自分自分の灯に禮拜して黙禱する。それから一人一人が、その事ばかりを思つて一心に灯を見守つてゐる。時は移る。時は移つて、人の息一息毎に燈心は油を吸つて、暗くなり、また明るくなる。それがやがて、ぱつと明くなつたと思ふと、次第々々に暗くなつて終には眠るやうに消える。四人の女の四つの灯が、必ずしも一度に消えはしない。一つづつ缺けるやうに消えて行く。

この間に、疊の目ほどづつ、四隅の女は中央目がけてにじり寄る。灯の消える頃ほひには四人が袖をすりよせる位にまで來てゐる。

闇となつて小半時、誰からと謂ふ事もなく手をのばして中央をさぐる。その探つた手さきに、人の肌ざわり。探りあてた人はその年の中に亭主もちになれる。

その男は坊主頭だと謂ひ傳へる。何故鬻を結つてゐないか私は知らない。頭を探りあてた女は、自分より目上の夫がもてる。膝を探りあてたのは身分の軽い男、などと謂ふ。四人の



女の中で、探りあてるのは僅に一人に限られてゐて、他の三人は空しく疊をなぜ廻すにとどまる。

その愚を笑ふを休めて、偏にその男戀ふる心に同情を寄せたい。自然の春に反いて、娘盛り、年増ざかりを、窮屈と猜疑と壓迫と専横の渦中に五年、七年、十年、十五年、同性ばかりの間に不自然な寝起を續けて、何うして男戀はずにゐられやう。私が茲に母から聞いた話として提供した灯の占は、二つながら性の變體であつた。寅待は謹み深く、如何にも身の行末を思ひ悩むらしく見えるが、この闇の男を探るのは、獨身の寂しさ、性の不自然の遺瀨なさ、男戀しさを露骨に物語つてゐる。私は御殿女中の宮狭子が好きで、手文庫に二つ程も集めたが、それが手引となつて終には斯うした人達の愛玩した性の變體性の器具の研究に興味を覺ゆるに至つた。それとこれと思ひ合せると、漫ろに甘酸ばい揲つたさを感じずにはゐられない。彼の女達の餓えた胃の附は、寝ても醒めても男食べたいで泣いたり笑つたり計りしてゐたので。

### 油花のト

俳諧歳事記に、「油花のト」と謂ふのがあつた。陰曆三月上旬巳の日、女性がなづなの花を油につけて、それを靜かな水の面と謂ふから、川なぞでなく、池とか水盤の水であらう、その花にしたした油を水の上にそそぐ。落ちて浮いた油が散つて、自からなる不可思議な形を顯はす。龍と見えれば、天が下に唯一人の運、鳳は位高い人の室、花は吉、草は風、と斯うして自分の身の嫁ぎ行く行末を占ふ。今日と異ひ、女の出世は男よりも、自由であり、大きく高かつた時代であるから、實際龍を占ひ得て、人世最上の幸運を掴み得たかも知れない。或ひはまた鳳を描いて、時の關白を一指に動かしたかも知れぬ。然しまたその反對に、草木もなびく美しさの持主でありながら、龍ならず、また鳳ならず、更らにまた花にもならず、油の行末は雲の行方のやうに有耶無耶に流れ散る。正にこれ、美しき眉に不審や油花のト、誰やらの句になつたのを、氣に入つたので今だに覺えてゐる。



いくら豪さうな言をいつても、女は遂に女だ。一生の禍福他人に據る。何と踏張つても亭主次第である。斯くなればこそ、油花のトとなり、宵待となり、闇の探り合ひとなる。どの女も好い運は掴みたい。そしてそれは男だ。一生を連添ふ亭主次第だ。女たる者實に氣が氣であるまい。

### 紅水を焼く

前に述べ來つた三種の占は、上品な方法であつたが、茲に一つ、野趣横溢と謂はうか、尾籠至極と謂はうか、甚だ手きびしいのがある。これも名はない。

但しこれは未婚の處女でなければ行はれない。これにも日があるのだと聞くが、今だにそれを知つた人に出會さない。時は例の如く人定、まだ男を知らない女が、人に知られないやうに、自分の月水に汚れた腰巻を圓で焼くと、その火の中に自分の未來の夫たるべき男の姿が現はれるとしてある。これは可成り江戸時代に下町で行はれたさうで、四邊の光景がどう

も甚だ殺風景だが、神秘の力は反つて此方にあるやうに思はれる。未婚の處女の經水を焼くと謂ふのが、何か斯う事ありさうに感ぜられる。

然しそれは、何も未婚の處女でなくても確實に驗はあるらしい。現に斯うした話がある。吉原のある見世の女が、斯うしたその日その日の浮いた家業をしてゐても、そこは女、身の行末は氣になつたと見えて、人に隠れてそれを行ると、焔の裡に現はれたのは、人もあらうに、毎朝々々格子先を、でーい、でーい、と流して歩く雪駄直し、今でこそごちやく／＼に成つて了つたものの、その頃は殆んど人間扱ひされなかつた。この女も泥水に苦勞を重ねた末大名旗本のお部屋さまに成らうなぞと、及ばぬ玉の輿は願ふてもゐなかつたが、それ相當の家へは嫁づきたい。それを雪駄直し、さりとては、さりとては、餘りの事に身の淺猿しさをつく／＼悲觀して、此方では物の數とも思はないが、彼方ではばかり夢中で通つて來る男を、寂しい冥途の道連れと選んで、無理心中を仕掛けた。運の凶い者は飽くまで凶い。男は馬鹿々々しくも死んでのけたが、因果と女は助かつた。恥さらしの標しを咽喉に残して、その頃の廊の定め、日本橋に三日曝されて、彈左衛門に引渡された。縁はそこに手を擴げて待構へ



てゐた。女は遂々焰の中の裡の男と夫婦になつた。もう一度念の爲めに申添えて置く。死ぬほど厭がつてゐた穢多の女房になつたのだ。

こんな話を書いてゐる私の机の上を、三十ワットのタングステンが、乳白色の小さかしけな腫をして瞰下してゐる。電燈は明るい、けれど私はこれに魂があり言葉があらうとは何うしても思はれない。御燈明の灯よ、行燈の灯よ、雪洞の灯よ、蠟燭の灯よ。

## 狼の毒

### 狼を神の國

狼ぐらゐる始末にならぬ物はない。牛のやうに角の先から尻尾の端まで、一寸の屑もでない獸もあるのに、これはまた、肉は食へず、皮や毛は剛し、なめしは利かず、骨でも爪でも、どこと謂つて物の役に立つ部分をもつてゐない。人と謂はず家畜と謂はず、眼に見えたが最後飛びついて喰ひ殺す。神さまは何の爲めに狼とか蛇とか毛虫とかけじけじとか、一點の愛嬌も持たずに人に厭がられて許りゐる、害あつて益のない物をお拵へになつたのだらうか。まあ如何に物好きのつむじ曲りにしろ、狼を可愛いと頸を撫でる奴はあるまい。無理に考へ





て見れば、善人ばかりでは世の中が寂しすぎる、悪人があればこそ泣いたり怒つたりする事も出来る。その調子で獣の中の悪人として狼をお拵へになつたのだらう。人騒がせの嫌はれ物、謂はばどこやらの社會主義者のやうなものなのだ。

處が、脚一步武藏の秩父領に入ると、吾々人間はこの狼に頭が上らない。狼などは口にしない。御犬族と唱へて、噂をするのにも塵物に觸るやうにしてゐる。行く程の人家の軒口には、大口眞神の名の下に物恐ろしい狼殿が、遠慮もなく口を耳まで裂いて、それこそ豪然と踏んぞり反つてゐるのが、貼りつけてない家はない。正にこれこそ彼の勢力範圍のボスタである。

秩父の三峰と謂へば、可なり世間に名の通つた狼の名所である。彼の山深い山々の中でも雲取、白岩、妙法、この三山が合してそこに一角を生みだした。それが所謂三峰である。舊三峰の一村は三里四方と唱へられた、頗る廣漠たるものである。春は遅くまで雪がある。雨が多い。霧が深い。この山に斯うして狼を祠つた根元や縁起は、表向きあるにはあるが、煎じ詰めると無いと同じ事になる。また狼では神社として看板がよくないと思つてか、世間體

は例によつて例の如く、諸冊の二尊と日本武尊としてある。詰らぬ遠慮をしたものだ。狼が神に守つてあればこそ面白味があるのだ。諸冊二柱の御神に狼が同居して祭られてあつてはそれこそ勿體至極もない。一體この諸冊の二尊位、どこにも擔ぎ出される神さまはまたない。何かと謂ふと諸冊の二尊である。御夫婦の神さままではあり、至極無難で男にも女にも向が好い。従つてまづ大ていの場合には、諸冊の二尊としてある。おやそこにも祠つてあるのかと、二尊さまがお驚き遊ばす出店が全國至る所にある。筑波の峰は二つ、男體、女體、そこで諸冊の二尊は調和がよいが、三峰で御神體が二つでは調子がわるい。それに秩父は日本武尊と深き縁起もあるからと、恰度よい事にして二尊に日本武尊を並べたのは、考へすぎ拵へすぎである。表面は如何あらうと、依然私は狼が神さまになつてゐると思つた方が面白い。この狼殿はなかく稼ぐ。一ヶ年に三萬餘の參詣人があつて、一人の御札配りをも出さずに、一年に能く三十七萬の御札が賣れる。その勢力範圍は、關東一圓と信州甲州である。普通の神社なら、矢大臣、左大臣が並んでゐる隨臣門に、銅造りのまつ黒い瘦せこけた狼が見張つてゐるのが、如何にも狼を神とした社らしい。火防と盜難防を以て信仰的とされて



るが、盗難の方が聞えてゐる。今はいくらになつたか知らないが、一圓か二圓の御初穂を納めると、野菜つくめでこそあれ二の膳付で、それこそ食べきれない。酒は菊菱と名のあるもの、もとはこの山で醸したさうだが、今はどうなつてゐるか、いくらでも飲み放題なのが上戸には頼もしさの限りである。黒塗の大きな木盃で呑むのが古風でよい。受付のやうな、百姓と社務所の人をつきませたやうな男が相手に出て、この方が客よりも遠慮なしにさも悦しさに飲む事飲む事、此方の方が氣が退ける。尋常四年位の小わつばが、或時は立ちながら酌をする。またこの無禮講が、愉快である。この小わつばが日が暮れて社に宿る時は、山から法螺を吹いて知らせる。その貝の吹きやうで、家から迎ひにも来るやうにもなつてゐる。何と謂つても茲は狼の巢、いくら御犬族でもそこは何かの淺猿しさ、何時どう氣が變つてばかりやらないものでもない。そこで可成暗くなりかかると、貝を吹いて宿めるのを知らせる。知らせの貝はそれからそれと吹き傳へられて五十何町の山の下まで届く。いくら二の膳付でも、芋や人参や味噌汁ばかりでは、餘りに野趣が横溢しすぎて、食べ物がありません。食べる物がない。箸持ち無沙汰で早く飯にしてくれれば助かるのにと、考へてる人の腹も知

らないで、件の御取持の男なる者、更らに遠慮と謂ふ事を知らず、また飽く事を知らず、揚々と大盃を傾ける。そしてお山の話それからそれと頻りに辯ずる。

### 三峰の話

#### 失くならぬ落し物

三峰の本社附近には、この大掛りな社務所の他に家はない。従つて参詣人はこれに就て時の食を求むるより他はない。参詣をすまして社務所にかかると、黒紋付の四十男が、谷をへだてて霧に見え隠れする雲取の山も動けと許り、参詣人何人と大聲に叫び上げる。そして直ぐと、此方の謂はんとする意を見通して、おしのぎにしませうかお上りになるかと訊く。おしのぎとはそこに腰をかけた儘で、味噌汁に飯の食事にありつく事。このおしのぎが十年程前五錢か二十錢ときいたが、見ただけでも頗る頼母しい、一升も入る鍋に溢るる許りの味噌汁



と、黒塗の櫃にぎし／＼詰めた飯がある。強石から三里餘りを上つて来た人間には、盗難除より火難除より、先づこの食べきれなさうな膳の物に御利益を感じるに相違ない。吾々は上客として上に通される。この時であつた。草鞋を脱ぎながら正面に眼をやると、二號型位の金庫がすゑ付けてある。金庫はこれ泥棒除けのもの、この盗難除けの本家本元に何の必要がある、甚だその意を得ない。不釣合である。處で今、どちらが客か主人か區別がつかない程度にがぶ付いてゐる接待子に、訊すにこの事をもつてする。泥棒除けの三峰の社務所に金庫は不釣合ではありませんかと。接待子敢て答へず、顧みて他を謂ふ。お山で物の失くなる事はありませんよ、へい、全く失くさうとしたつて失くせませんので、二三日前にも、いやこんなことあ年に何十度あるか知れない。參詣人が此所まで来てから懐中物のないのに気がつく、さあ失くしたのか、取られたのか、落したのか、騒いだり考へたりします。どどの詰りが、さつき麓の茶見世でだした、あの時は確かにあつたのだから、取られたのぢやあ勿論ない、ぢやあ落したのかなと謂ふ事になる。さあどこだらうと考へたつて、落した所が考へ出せる位なら落しつこはありません。そこで此方が、お山にかかつて落したのなら失くなり

つこはない、明日下りしなに氣をつけておいでなさい、屹度落した所に落ちてゐると謂つてあけても、あゝさうですかと濟してゐる人は百人に一人あるかなしです。ぢやまあ行つて御覽なさいと提灯をかしてあげると、まだ夜のお山の怖い事を知らない人ですから、折柄の慾と二人連で、折角うんすら上つて来た山路を探しに行きます。行つた者はどれもこれも申し合したやうに、今度は元氣な顔をして歸つて來ます。落し物を首尾よく探しあてたのです。これが眞實の信心者なら、御犬族さまの御影だなど一層有り難く感じるのですがねえ、そこへ行くと見物の衆は、よく他に拾はれなかつた位にしか思つちやるません。勿體ない事です。お山では泥棒根生をだしたら最後、往生です。夜は申すまでもありませんが、晝日中でもどこに何う御犬族さまが隠れて御覽になつておるるか判るものぢやありません。道に財布が落ちてゐても、目もくれないけません。手をだしたが最後、わぐりです。だからお山で物の失くなりつこはありません、と益々金庫不必要を裏書する。さすれば何でまた此山坂を、米一俵擔ぎあけるにも人間一匹が五歩に一息十歩に一汗する苦しみ、これだけの金庫をこゝに、迄擔ぎあけるには、どれだけの人間がどれ程の汗を流した事だらう、その汗で路が滑つてさ



ぞ運びにくかつたらうに、なぞと考へる。結局このお山に金庫なんかのあるのは、神さまの信用を薄からしめるに外ならない。然しまた一方、この山の金庫位泥棒に對して絶體安全なのはまたと世界にあるまい。金庫からは御犬さまのある方が安心だし、お犬さまからは金庫のある方が泥棒の用心になる。

### 群狼のさまよふ夜

麓から本社まで行くのに、彼の橋の所からで七八つもあらうか、休み茶屋や神官の家らしいのが、それが山に散在する人家の重なもの。そこには必ずなくてはならぬ着物の袖のやうに、大きくは辻堂のやうなの、小さくは庭の隅の社のやうなのが、どの家にもこびり付てる。何が祠つてあるかは考へなくても誰にも當りがつく。斯うした狼の方が人間よりも幅の利く國に住んでは、自然其方の御機嫌を伺はずにはゐられなくなる。朝なり暮方なりに、洗米でもお初でも、それに供へる。そしてそれは何時の間にか失くなつてゐる。犬猫のゐられない山、鹿野山のやうに鴉がゐるではなし、さては誰が食べるのか。叱、聲が高い。

またしても件の接待子は、舌なめづりをしながら話し続ける。

此時連れの某思はず失禮な事を謂ふ。この山には今でも狼がゐませうか。接待子さも憐む如き眼をして、それはゐませんよ。あなた方の謂ふやうな、狼などは昔からゐません。おるでになるのは御犬族さまです。さあ判らない。世俗傳ふる處によれば三峰は狼の王國、それがゐるに、御犬族とは？ 借問したい。狼と御犬族とは一體どこが違ふのだらう。三峰では總て御犬族と唱へるのでしてな。接待子また論す如くに語る。それで漸つと判つた。安心して、「随分ませうね」。さあ、俺もお山の事ならまづ知らない事はないが、御犬族さまの數だけは一寸困る。そこに並べて置いて數える譯には行きませんからな。お山に木が何本あるか數えきれないやうに、御犬族さまも數えきれないものぢやありません。昔から其儘にして、誰も指一本さゝないのですからな、殖えればと謂つて減りつこはありません。然し實際の話、決して氣味のいゝものぢやありません。草が三寸のびてさへるれば、自由自在にその影に身を隠すことが出来ると謂ふんですからね。どこに何う此方の様子を覗つてゐるか知れやしません。一寸考へるとこの山は浅いやうですが、實はこれで秩父も懐の方なのでして、大宮郷



あたりから山になつてゐるのですな、春は何日まで来てくれません。漸つと来たかと思ふと、直ぐと夏が追かけて来ます。然しこれは名ばかりで、三峰では夏を知らない。夏と謂つても一雨降れば、火鉢に火が山盛りなければ寒くつて仕方がありません。つまり春と謂つても夏と謂つても名ばかりで、冬が付纏つてゐない時とはありません。秋も次第に老けて山が瘦せかかると、夜、小用に起きた時などに、徐々聲が聲えて来ます。何の聲と謂つて、御犬族さまのです。彼の犬の遠吠です、あの通りですが、あれを一猶凄くしたので、割合になれてゐる手前共でも、迎も二聲と聴いてはゐられません。體中の毛穴が一個一個そそけ立ちます。寢床にもぐり込んで一合程に縮みあがつて了ひます。いよく冬と謂ふ聲をきくとそれこそ毎晩膽がおびやかされ通しです。此家はこの通り大槌でなぐつても、三つや四つでは破れやしませんから、まあ安心ですが、火の氣は絶せません。あなた方麓から茲まで御いでなさる路に、山持ぎの家らしいので茶見世をだしてゐるのがありましたらう、四五軒。彼の人達と来たら迎も堪りません。よくも住んでゐられると感心します。何しろ冬になると山に食べ物が少なくなりますから、自然御犬族もそこらを漁り歩くやうになります。お出ましに

なる夜は、今夜は御犬族が御出ましになるなと、山の人の頭へは感じます。不思議なもので誰から教へられるともなく、つまり永年の経験ですな。亭主の頭にも感じれば、女房の頭にも感じる。戸じまりを嚴重にして、爐には三尺もある大きな燃木を三四本もさしくべて、火の燃えてゐるのが戸の隙間からも見えるやうにして置く。斯うしてさへ置けば、人の匂ひがするので覗いて見ても、大嫌ひな火が燃えてゐる。それが厭さに別に出来心も起さずに行つて了ひます。よくしたもので、あれ程の箭も鐵砲も恐れな方でも、火を見てはから意氣地はありません。何しろいくら賢い方でも、そこは出来心でな、どう氣が變つて戸を咬み破つて飛び込んで来ないとも限りません。考へて見れば身の毛のよだつ事です。餘程前になりませんが、土臺下を掘られたのがありました。火がよく燃えてゐなかつたのでせう。それでも戸じまりが嚴重なので、咬み破つて入る事が出来なかつたと見え、表口の柱と柱の間を掘りばめたのでした。それを知らずに寝てゐた家の中では何かの物音で主人が目を見ましたのです。家の中は薄暗くなつてゐる。燃木が燃えてゐない。はつと思ふと、直ぐと頭へ来たのです。外に御犬族さまのゐるらしいのが。耳をすますと、ガリ／＼土を搔く音と、荒い鼻息がしま



す。その男は夢中で飛び起きるなり、燃えてはゐないが火になつてゐる燃木をとつて、いきなりその音を目掛けて突いたのです。それがうまく脚で搔いて掘りながら人の匂ひをかいてゐる鼻つ先へでもぶつかつたのでせう。外ではうおーと一聲、それこそ人間なら魂を消し飛した悲鳴と謂ふのです。此方の男はもう喰はれるか追つ拂ふかの必死の場合、火を手掴みにして、軒口に投げつけ投げつけて、少し氣が落つくと、そこにあつた十能に目がついて、それで火を構つては、なげかけ、構つてはなげかけ、掘られた土臺下の穴一面を火で埋めて了つたのでした。この火に怖れをなしたものが御犬族はその儘にして立去つたと謂ひます。今夜は御出ましになるかと感づいた夜は、いくら火を勢ひよく燃さうとしても、どうしてもよく燃えない。何かに斯う怯じ怖れてゐるやうで、とろ／＼としか燃えませんが、恐しいものですな、氣が火の力まで壓しつけて了ふのですね。夜が明けてから戸をあけると、雪のやうに下りた霜の上に、重り合つて足の跡があります。小さいのは猫のやうなの、ほんの子供ですね。大きいになると馬の足跡ぐらゐるのがあります。王様ですな、御犬族の中の、お山の主でせう。吾々人間はその眞物にでつぐわしたが最後氣を失ふにきまつてゐます。御犬族の出

さうな夜、冬になるとこれが厭でしてね。

それ程怖ければこんな山になんかゝるなければよかりさうなものを、親の代から孫の代までも暮してゐる。尤もこの山から外へ踏出しては、日當りは好くつても、米櫃がついて來ない。なまなか都で暮さうとすれば、人の世の狼が恐しい。それに比べれば三峰の狼は、いやこれあるが爲めにお身達は今日を安泰に食べて行かれるのだ。これを思へば、霜の上の足跡こそ、神渡りとも見るべきではないか。

### 神の命綱、三分の金

このお山も今でこそ斯うして安氣にやつて行かれるものゝ、昔は一時酷かつたさうです。この建物は明和年間に出來たもので、ざつと今から百四五十年になりますかな。いやそれ處ぢやありません。この四方を建廻してある總二階立、前廊下が三間もある建物の原は、天文五年が抑もの源で、それを型に後から後からと續ぎたして行つたのです。處でな、勿體ないが、神さまにも運不運がある。例へば元祿の頃、さあ何年だかそこ迄は存じませんが、何うも元



祿なぞと謂ふ時代はよくありませんな、人の心が浮薄で贅澤で、その日その日の事ばかりしか考へないのですから、自然神信心などは怠り勝になる。一軒の家にしてもさうぢやありませんか。亭主が茶屋小屋を毎日毎晩飲み歩いて、女房は女房で芝居お花見と着飾つて出て計り歩く。それでゐて神棚や佛壇が綺麗になつてゐるやう筈はありません。このお山もその調子でな、男は女の尻を、女は役者の尻を追ひかけ追ひ廻してゐる最中ですから、こんな山の中へなんぞ神信心に来つこはありません。斯う申しちや勿體ないが、人間あつての神さままでしてな、信心者が無ければ神さまだつて立つて行かれませぬ。その時の別當を日光とか謂ひましたが。何うにも彼うにも立行かなく成つたので、一時山を下りて何とかして食べて行かうと決心しまして、山を下りにかゝつたさうです。しますと何うです、何時の間にお出ましになつたものか、前も後も、右も左も、一寸の間もない程に御犬族さまで一ぱいになつたださうです。彌々今日で御名残ぢや、もう俺が生きてゐる中は再びこのお山にお宮守する事は出来まい、それを知つて名残を惜みにお出まし下すつたのだ、と考へて來ますと、同じ人間同志ではないから言葉こそ交せないが、さて心と心は通じるものです。食べられないので

お山を捨る身にも、年來の御馴染、御犬族さまからはこの廣いお山にたつた一人の馴染の間。然し此時日光は何百、いや千とも数えきれない程の御犬族さまに取巻かれて、永年お山で聲は夜々きく、お姿は晝でもお見うける、馴れてはるても斯う山のやうな御犬族に取圍れては、迎も生きた心地はなかつたと謂ひます。然し先方に害意のないのは、心から心へ知れてゐますから、咬み殺されるとは思はなかつたさうです。怖さと懐かしさとがごちや／＼に成つて、石のやうにそこに立すくみました、何時までさうしても居られません。行く手に立閉がる御犬族さまに御じきをしいしい、一足、一足、拾ひ拾ひに下りて行かうとしますと、後からそれを止める者がある。振向くと、御犬族が、裾や袂をくはえて引止めるのですまた下りやうとしますと、今度は前の御犬族が、體をすりつける、立ふさがる、一かな通すまいとする氣配です。後からは引とめられる、前には行かれない、日光も進退谷つた。これは下手をやつて御犬族さまの御機嫌を損じて、もしもの事があつては堪らない。餓えて死ぬのも、食ひ殺されるのも一つなら、まだ咬み殺されない方がありました。水を呑んでも生きられない迄生きて見やうと、下山を思ひ直して再び社務所に草鞋をぬぎました。それからもうお



山で死ぬ覺悟でゐますと、三日か四日かして、それこそ日照の大雨と謂はうか、地獄で佛と謂はうか、甲州口から二十人餘りの參詣人があつて、この人々が奉納した僅か三分の金から息を吹返し、三峰神社は雨霧の餌食にならずに今日まで斯うして來られたのであります。その三分の金こそ三峰の命の親です。もしその時別當の日光が下山して下れば、甲州口の參詣人も、人つ子一人ゐないお宮へ、三分の金を置きつ放しにして行く氣づかひはありません、お賽錢だけで歸つて行つたのでせう。これに付けても運ほど一寸先の判らないものはありません。それが悲しい哉人間には判らない。然るに御犬族さまにはお判りになる。三日も四日も後の事がちやんとお判りになる。お判りになればこそ別當が下山しやうとするのをお留めになつたので、實に有り難い事です。それを何ぞや、世間の不信心な徒は、狼と謂へば、直ぐと、人を喰ふ、鬼か悪魔のやうにしか思つてゐません。斯うした輩には御利益はありません。あなた方も縁あればこそ御參詣なすつたのだ、惡ひ事は謂はない、御信心なさい。三峰神社のお札さへ貼つて置けば、盜難火難の心配はない。それこそ枕を高くして眠れる。警察の数がへつても騒ぐ事はない。

虎の威をかる狐と謂ふ格、眉を上げ肩を聳やかして瞳をすえる。

### 夜半の神使ひ

此頃は人間が無精になつたので、それに脚の弱いせいもあるが、此處まで來ると最う満足してその儘歸つて行く。奥の院まで行くのは普通の登山者には殆んどないと謂つて好い。講中になると習慣もありまた年來やつて來た事を中途で止ることをしたくないらしい。少くも十人十五人、所謂衆を頼みに奥の院に詣る。奥の院は一里半位もあらうか、それこそ晝なほ暗い木下蔭つたひに、鳥の聲もしない寂しい谷の上に行く。三峰が狼の王國なら、こゝはその王城と謂つべく、土一升狼一匹と謂ふも敢て誇大ではない。こゝへ來るともう諸冊の二尊は全く影が薄くなつて、狼その物の權威が歴々と明かになる。神經の故もあるが、草木の氣の外に一種の或る氣が、人の魂を駭かせる。

白晝、それも三四人、一人にては斷じて行くまじき境、日既に彼方の懷に落ちては、月があらうと、友があらうと、心すべき境である。それを役目なりとは謂へ、夜の丑滿にたつた



二人で、松明の灯を命に此處に使せねばならぬ人がある。

四月の十、幾日であつたか、日は忘れたが、祭りのその前の夜、七日前に籤で撰ばれた二人、一人は神官、一人は剛力、これはこの七日の間を、家のある者も家に歸らず、別火で精進潔齋する。男ばかりの世帯。魚の顔は繪でばかりの此山で、今更ら精進も變なものだが、まあ氣も清淨にして、酒でも呑まない位であらう。さてその夜になると、これも潔齋して搗きあけた大供餅、二尺もあらうと謂ふのを、上下一個づゝ二人が背負ふ。神官は既に祭の服装、烏帽子直垂、草鞋脚絆に足を固めて、左に松明、右には杖。剛力も持物は同じであるが山路の上下三里、火が命の難所であるから、背負えるだけ松明を背負ふ。十二時が打ちきると出發する。即ち祭の當日だからである。日のある中なら此山の人だけに、單身でも奥の院を先祖の墓場ぐらゐにしか考へてはゐないのだが、草木も眠ると謂ふ眞夜半、いくら考へ直しても決して有り難い仕事ではない。狼、狼、その顔が眼の前に大きく浮んで、……いやその時だけではない、籤に當つたが最後、その日から眼の底に消えない。身も魂も捕はれて了ふ。このお使ひをして昔から今日まで、一度でも間違でもあつた例はないが、いくら前例が

ないと謂つても、何時何かのはづみで先方が量見違ひをして間違ひの血祭にならないとは限らない。ぢやによつて首尾よくお使ひを済して了ふまでは、殆んど生きてゐるやうな氣はないと謂ふ。お使ひを勤めた者は誰でもさう謂ふのである。

一步社務所から出ると、二人の心はびたりと合して一つになる。いくら昨日まで氣に食はない奴だと思ひ合つた仲でも、この場合になると、氣に食ふ食はないなどはてんで問題ぢやない。一の心と一の體になる。これも體驗した人の話。

手を曳き合ふやうにして、松明を打振り打振り、火花のばつばつと飛ぶのを唯一つの力草に、黙々として行く。知りきつてゐる路でありながら、この路は甚だしく長く怖い。草にも木にも心をおくと謂ふのは、實際この場合だと感じる。木の葉一つづゝに例の眼があるとしか思はれない。松明の照すところ、そこに木あり草あり路あり岩あるを知るが、それ以外の漆黒の闇は、みな總て狼の群れとしか思はれない。轉んだが最後、火を消されたが生命のない時と、一足ぬきに踏張つて力を込めるやうに自然歩く。足もとに計り氣をとられてゐると、松明が消えさうになる。その度に力一ぱい大きく宙に輪をかいて、火勢をつける。足も



堅固に歩かう、火も消すまいと、一度に兩方は難かしい。足もと、火に心をとられながら、漸つとの事で奥の院まで辿りつく。

狼を神の國の山の眞夜半、餘りに凄じき寂けさである。手にした松明がばち／＼と音をたて、燃える。たゞそれだけである。もし此時風一渡りして、草木をざわ／＼と鳴らせば、二人の人間は顔の色を變へて三尺も飛びあがるに極つてゐる。松明を脚もとに組合して置いて背の供餅を互ひに手をかして下しにかゝる。下し終ると神前に供へて、さて神官は恭しく祝詞を奉る。その大要は、例年の如く大祭の御供餅をあけます、然しこの中の上なり下なりを御残し下さい、それは信仰の者に分け與へて、彼等が狐狸などの難に苦しむ時の御助けに致します、と謂ふやうなもので、實際また三峰からでる此供餅を砕いて粉にしたものは、驚くべき偉力がある。俗に唱へる狐つきなどは、これを一度口にしたが最後、熱の落ちたやうに舊の體になる。けれど狐はもうよくこれを知つてゐて、いくら湯にとかしても食物にまぜても、決して受けけるものではない。神官はそれこそ一生懸命に、ぶる／＼響震はして奏し終ると、虎口を脱れると謂ふ文字を姿に現はしたやうに、後をも見ずに歸つて行く。いや逃

けて行く。尤も後を見るなどは嚴しい戒めである。此人達もこんな生命がけのお使ひをしてさぞ厭な事だらう、怖いだらう。然しそれも皆おまんまが恐いからだ。此世の中で何が恐いと謂つて、おまんま位恐いものはまたとないのだから。

### 咬殺された男

三峰からお犬さまをお借り申してくると謂ふ例がある。人間の眼には見えないが、狼殿が一匹そのお迎ひに行つた人間に従いて来る。斯うした習慣は随分と多くの神佛にある。早い話が彼の伏見の稻荷から狐を受けて来る例がある。昔から言傳へる處のくだ狐などは、三寸程の青竹の管の裡に隠れて、街道百里が二百里でも、その人の家まで来る。管に隠れるから即ちくだの名も據て起つたので、これを授つて来る途中は、一寸茶一杯飲む腰掛茶屋でも、旅籠でも、犬がゐたら最うそれきり、自分の身が恐いから、授けに來た人間などに遠慮なんかしてゐない、直ぐ離れて了ふ。されば無事に持つて歸るのも一苦勞である。そこへ行くと三峰のは、恐がられる方では指屈りの株、さうした心配はない。竹筒ほうを後生大事に抱いて



歩く面倒もないが、自分の前か後に口の耳まで裂けたのがついてゐると思つては、眞に恐縮の限りである。このお犬さまをお借り申して来る位盗難除に確實味の多いことはまたと世間に類例がない、と三峰では聴かされた。それなら普通の十銭か十五銭のお札効は能が薄いか。いや、勿體至極もないことだ。そのお札についてもかういふ話がある。

信州の松本在と聴く。牛山と謂ふ土地での資産家の家の出来事。一二年以來、度々金が見えなくなる、如何にお足と名があると謂へ、さう度々見えなくなつては持主たる者實もつて堪らない。しまつてあるのは内倉。母屋からはほんの廊下續き、外から入つた泥棒なら何とか跡があるべき筈。それが何一つこわれてゐなければ、足跡もない。餘り度々なので捨て、も置かれない。知合ひの巡査も極内密に来てくれて、委細謂べたが、外から入つたものでないのは、今更らでないが明白となつた。てつきり盗人は家内にあると睨まれた、となると、誰を見ても泥棒に見える。素より大家内、番頭やら下男やら下女やら、商買こそしてゐないが大百姓相當の人が奉公してゐる。それに家族、合せて二十人以上の人が主人の眼から睨まれる事になる。女房子供はまづ除けて、疑ひの眼は勢ひ他人に注がれる事になり易い。

斯うなると日頃まめまめしく立廻れば、どうも彼奴油断がならないと見えて来る。口も碌にきかずに遠くで働いてゐれば、どうも目に付かないようにしてゐる彼奴ぢやないかと思ふ、と斯う探り合ひ疑り合ふ中にも、金の失くなるのは聊かも遠慮しない。今日のやうに小型の弗函で、文字合せでなければ開かないなどと謂ふ重寶な代物のある時分ではなし、金は箆筒の抽斗か用筆筒と、自他共に藏ひ場所の決つてゐた頃、他の場所へさう無雜作に押込んで置かれるものでない。ただ念には念を入れて、同じ抽斗へ藏ふにしても、抽斗の後とか、箱の下とか、他人の氣の付きさうもない處へ隠して置く。それで失くなる。あたかもどこからかそれを見てゐたかのやうに盗まれる。癢にも障る、氣味もよくない。またこんなことが數度繰返された。その内に親類の者に、三峰さまの御犬を拜借して來たがよい、さうすれば盗人は必然捕まると教えられて、他人には頼まれなないと、大家の旦那が一人でわざわざ遠い路を三峰に來て、お犬をお借り申して歸つた。六七分の杉の箱にお札が納めてある。それを土藏の正面にかけて置いた。

一體泥棒などは、しさうな奴はしないもので、しそもない奴がやるものだ。此家の主人



もその寸法で、観察の方法を誤つてゐた。知らぬは亭主ばかりなりの諺は單に間男のそればかりではなかつた。何日かが過ぎた。主人は驗して見る考で、盗人の方もだが、半分以上は御札の御利益をである。盗れてもいいやうに金を藏つて置いた。

と、ある日灯ともし頃、土藏へ用達しに行つた下女が、唇の色まで變へて主人のゐる所へ飛んで來た。土藏を指さして物も言へない。仔細は判らないが非常な事が起つたに相違ない。腰が抜けたやうに成つて立てない下女を其儘にして、主人は一目散に土藏へ駆けつけた。するとである。一人の人間が土藏のまん中に、仰向けに倒れてゐる。急病でも起つたらしい。主人は大きな聲で人を呼んだ。呼んでゐる中に、ふと主人は手や足の裏に、何か斯う水のやうな物でもついたやうな冷たさを感じた。水が來た。灯が來た。漸つと物の色が見えるやうになると、主人は驚駭その者のやうな聲をあげて倒れてゐる人の名を呼んだ。それは此の家の秘藏息子の名であつた。水を飲せやうとして皆して顔をもち上げた。血が……咽喉からかけて頬と、眼も鼻も分らないやうに紅に塗れてゐる。氣丈なものがあつて調べて見た。咽喉に獸の齒の痕があつた——といふ。

### 死屍何處へ行く

これは三峰の話ではない。父に聽かされたのである。笹子峠の七兵衛茶屋の七兵衛が、夜中に小用に起きた。また床に入つて眠られずにあると、からんからんと鈴の音がする。はて此夜更けに、馬の通る譯もなし、彼の鈴は何の鈴だらうと、御苦勞さまにも起きて、氣つかれない程に戸をあけて覗いて見ると、折柄月が冴えてゐて、街道は蟻の這ふのも手にとるやうに見える。白い着物を着た人間のやうなものが、地の上三尺ばかりをふわり浮んで、流れるやうに行く。流れると謂ふよりか、引づられるやうに行く。鈴の聲はその白い着物の袂から聽える。なほ能く見ると、手をだらりと垂れてゐるのが見えた。頭は見えない、足は引づつてゐる。これだけで七兵衛は、新佛だなど感づいた。思はず身の毛がそそけ立つた。月が意地悪く冴え返つてゐるので、見なくともよい物まで見せずにはおかない。次ぎに見たのはその白いもの下に、細い犬のやうな脚が、二三十本ごたごたに群れて纏れ合つてゐた。七兵衛は戸に獅子嚙ついで五體から魂まで震はせた。



それから七兵衛は、それとなく峠の下で新佛のでた家を探つて見た。初鹿野で神主が亡くなつてゐる。なほよく聞いて見ると、埋る時に年來大切にしている鈴を袂に入れてやつたと。

狼が新佛の埋られたのを臭ぎあてると、きつとものにしずにはおかない。下野あたりで謂ふ所によると、盗まうとする新墓に来て、狼が左に三度まわると、亡者は自然に棺を蹴破つて足をだす。それを唾えだして運んで行く。決して其處では食はない。奪られた家では外聞を恥じて、土をかけて、舊の如くにして胡魔化して置く。

### 鏡が鳴る

下野の國と、鈴の鳴つたので思ひだして、最う一話はなす。日光の中宮祠に奉公してゐた人の話。日光も足尾から烟の來ない昔は、それこそない獸はない位、日が暮れては松明に鐵砲ぐらゐでは、一人では一寸考へもので、十一月の聲をきくとそろそろ種々なものを見たり聽いたりさせられる。その人の寝起する小屋は、湖水に向つて窓が開いてゐた。夜半に、

湖の向ふで、どしんめりめりめりと大木が倒れたやうな音がする。夜が明けて行つて見ると、何一つ倒れてなんぞゐない。昔から俗にこれを天狗倒しと唱へてゐる。月のよい夜などには、窓の外で、ばさばさと大きな羽音がする。開けて見ると、大きな鳥がばつと立つて行く。四五間行つて、波打ち際に立つて羽根を休めてゐる。徒然ではあり事あれかしと思つてゐる時であるから、よき戯け場と壁から鐵砲をおつ取つて、何時でも役に立つやうに玉は込めてある、打つ。うまく當る。明日とりに行かうと其儘にして寝る。夜が明けてから行つて見ると、何の事、鳥の羽根一片落ちてはゐない。こんな事は山に番をしてゐると、誰しもやられる。怖いとも思はなければ、不思議だとも思つてゐない。結局誰もが天狗さまの悪戯だと信じてゐる、この山番をした人の話。

下へ火急の用が出來て、嫌が應でも下りなければならぬ。仕度萬端、萬一の用心にと玉込めした鐵砲を肩にかけて、松明をふり振り中宮祠を出たのが四つを廻つてゐた。月の皓々と冴え返つてゐる夜で、風が強い。山々谷々に鳴つてももの凄じい。中宮祠からは四里の下り途と謂へば途とても今日のやうな途は山のどこにもない。やつと一人が草を分け分け歩く。



里餘も来た頃、どうしたはづみか草鞋の紐が切れた。今になつて思へば、彼の時奪られる命であつたのだ。それが斯うして助かつてゐるのは、別にこれと謂つて神佛も信じないが、何様かのお助けであらう。

さて草鞋の紐が切れた。場所は右も左も深い深い林。何時ざわざわと草押し分けて何が飛びだすか分らない。松明を足もとに立かけて、紐を繕つた。繕ひながらも、立かけてある鐵砲と松明に断えず眼を配る。とその時、人の聲をきいた。確かに、確かに人の聲。人も人、女だ。

この夜更けの、この山奥に、女の聲、この男でなくとも魂を消すのが當然である。尋常のものでない、眞人間でない、と思ふと齊しくこの男は、臆病と謂はうか、或ひはまた賢ひと謂はうか、直ぐと松明を踏み消した。如何の量見があつての事か、忽ち鐵砲を擔いで、右とも左とも見定めずに林の裡に踏み込んだ。いや、逃げ込んだと謂ふ方があてはまつてゐる。

茲で林の茂みから、その怪精の女に銃口を向けて、轟、と、山々に響く鐵砲の音——そんな乳臭ひお話ししない。

此男の手にした鐵砲は、射つ爲の器ではない、震える時に體に重みをつけて、幾分でも震えを軽くする錘にすぎない。迷惑なのは逃げ込まれた林の草木達である。たださへ山風の烈しいので、頭も手足も胴も動かされ通して忙しくて仕方がない。そこへもつて来て此地震の兒のやうなのが飛び込んで來られては、天變人妖、甚だもつて遣瀬がない。然し男は、草や木の迷惑なんか、てんで考へる力もない。それこそ一生懸命に震えてゐた。震えれば震えるだけ、何分か氣安めになる。こんな量見で震えてゐた。

これが闇なら何も見ずに、足音だけで怖さも浅く濟んだのだが、生憎と月が、例の冬の月が、磨ぎすました光りに冴え返つてゐた。やがてそこに顯はれたのは、女だ。白い着物を着てゐる。その白さが、凡そ此世の中で、これよりの白さはまたとあるまじき白さであつた。ふり亂した髪の毛の上に、蠟燭が一本ともつてゐる。この山風の中によくも消されない。それも氣味悪さを添える。さてその胸には、一團の鏡、月の光りを照り返して、輝き輝いてゐた。その男の語るやう、彼の時彼の鏡の光りは、彼の月よりも物凄かつた、光つてゐた、と。女は素足らしい。ばたばたと足音をさして、上りの山路をたどつて行く。息苦しいか、



はつはつと喘ぐのが聴えたさうである。男はそれを、釘付されたやうに見てゐた。勿論震えは止まない。

丑の刻参り、男はただそう思つた。何邊へ行くのだらう。中宮祠まで行くのだらうか、恐怖の裡にもまたこんなことを考へた心の一端があつた。此男は臆病の中に暢氣が幾干か加はつてゐたらしい。

正體が知れて見ると、次第に怖さが薄らいで行つた。今更ら松明を消したのが惜しいが、あれがあつては、相手は命がけの、人間にして人間でない、謂はば鬼のやうな者、またどんな災難にならないとも限らない。此通りの一本路、逢はずに身を隠せたのは、お互ひの仕合せだ。こんなことを思つてまだ林を出ずゐた。女は二三町も行つたか、行かないか。と颯と風をきつて物の走る音と、ばたばたと犬の走るやうな音、犬にしても餘程大きい、はつはつと凄じい鼻息。男は今度こそは度膽を抜かれた。吐きかけた息と一緒に舌を吞込んで咽喉に引掛けた。今度こそは魂から震ひはじめた。齒の根が合はない。月影疎らな林の裡で、他から見たら踊りを踊つてゐるとしか思はれない位、震えてゐた。

男は、これは容易な事では此林は出られないと、そこに座つて了つた。その時、風の吹き廻しの加減であつたらう、氣の故とは思へない、女らしい悲鳴を確かに耳にした。男は今まで無茶苦茶に唱へてゐた自分の爲の念佛の中へ、その女のごつちや混ぜにして念佛を唱へ續けた。(二荒神社のお影で生きて行かれるのだが、まるで御頼み申さうと謂ふ氣が起らなかった。お頼み申しても無益のやうに感じてゐた。依然人間は死ぬか生るかの場合には、お念佛でなければ頼みにならない、とその後で付加へた)。

來た。何か來たぞ。尖つてゐる彼の神経にびりつと觸れた或物があつた。やがての事、水の流れるやうな月下を、三匹の大きな狼が、先刻の女を唾へて背にのせて、引づるやうにして下りて行く。彼の、これ程の白さは此世にあるまると思つた白衣は、袖も襟もすたすたに裂けて、黒く見えるのは、血か。男は掌を合せて、御念佛を申した。それこそ心からの。

からん、からん、と鳴るは、彼の胸の鏡が岩に觸れて鳴るのだ。見まじき物、地獄の繪卷を見たやうに、魂から戦いて、それを見た。死んでも此林は出まいと思つた。

からん、からん、鏡の鳴る聲が、いつまでも男の耳に遺された。